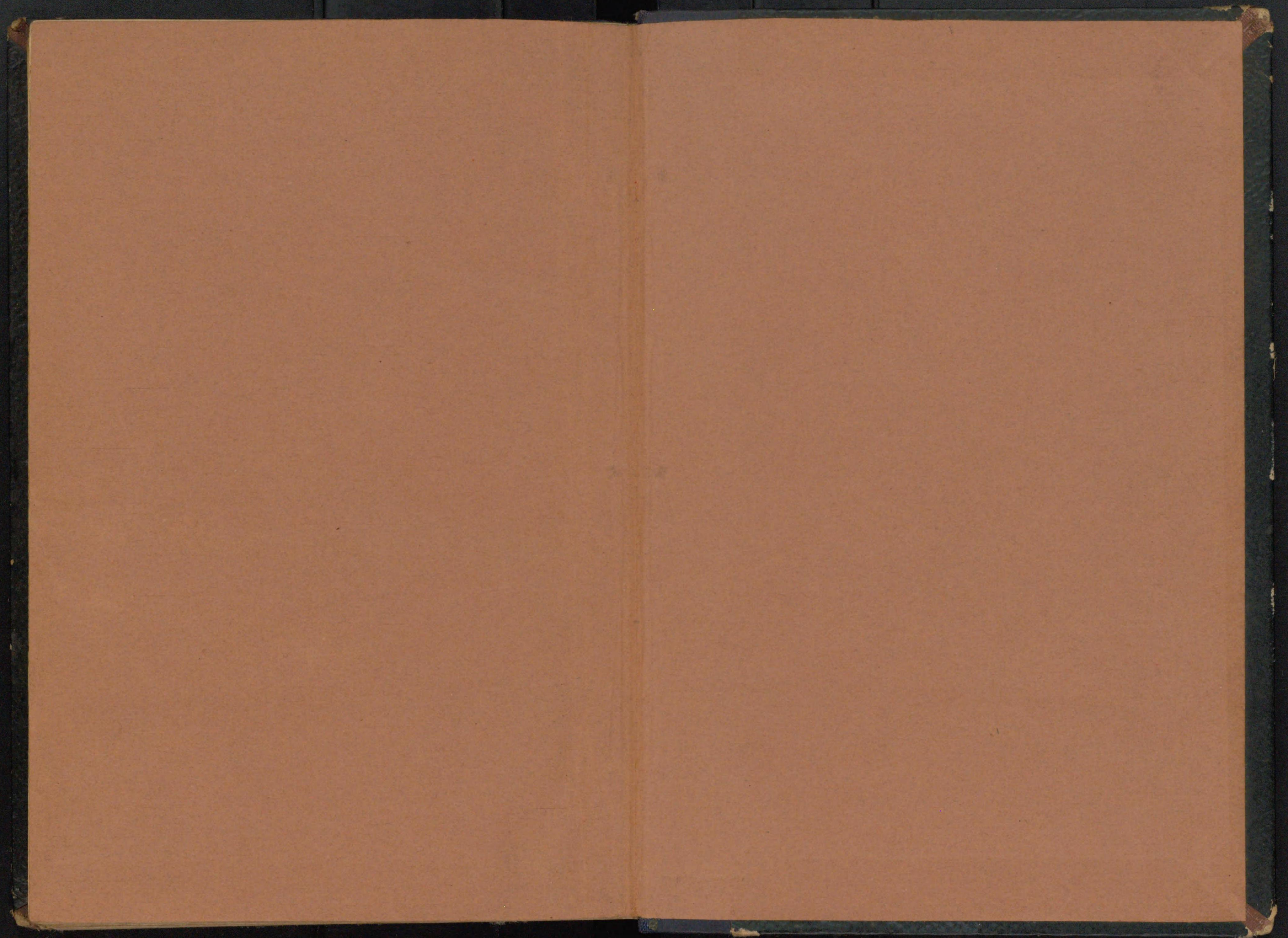


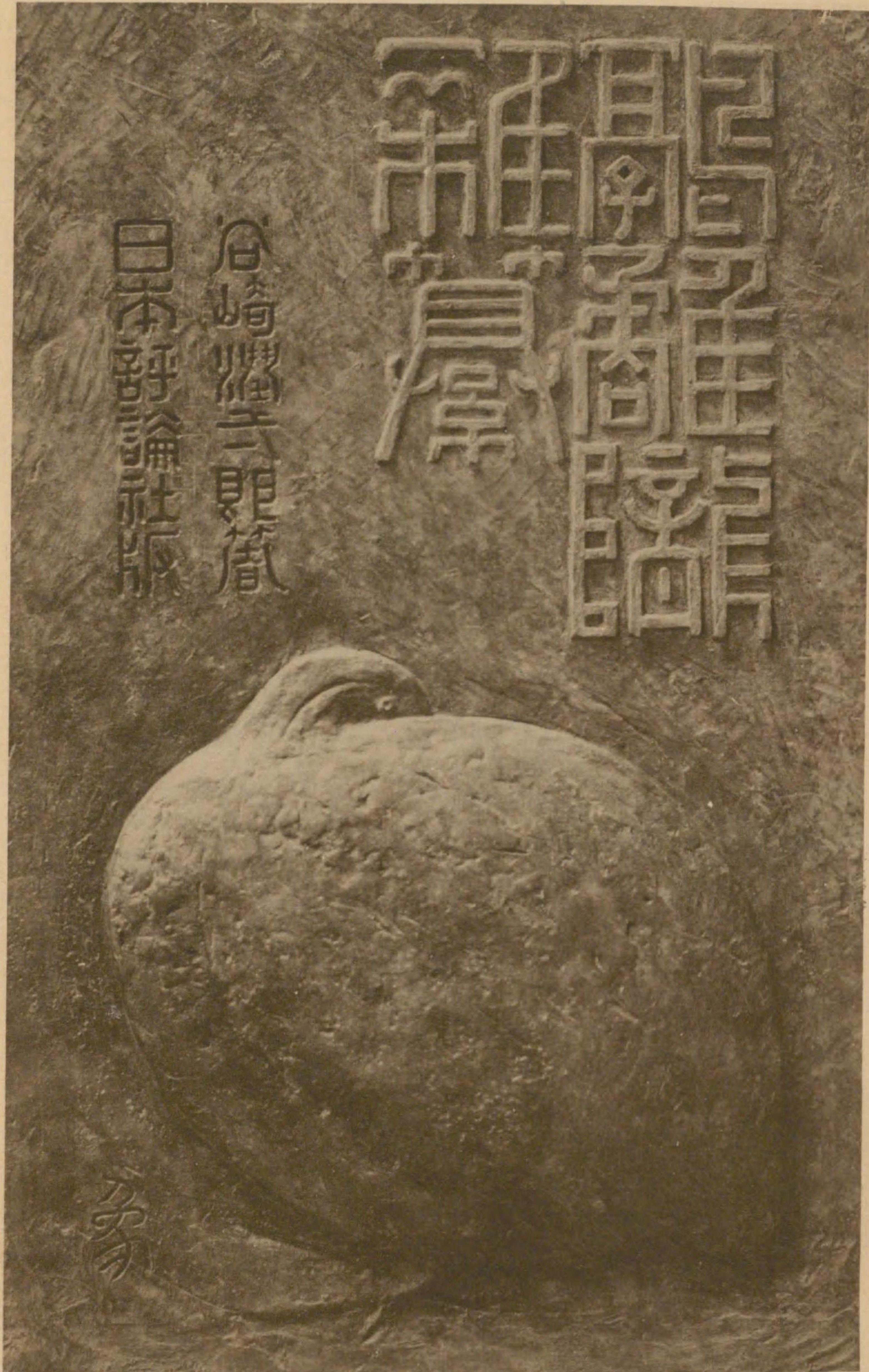
703-85



1200501582912

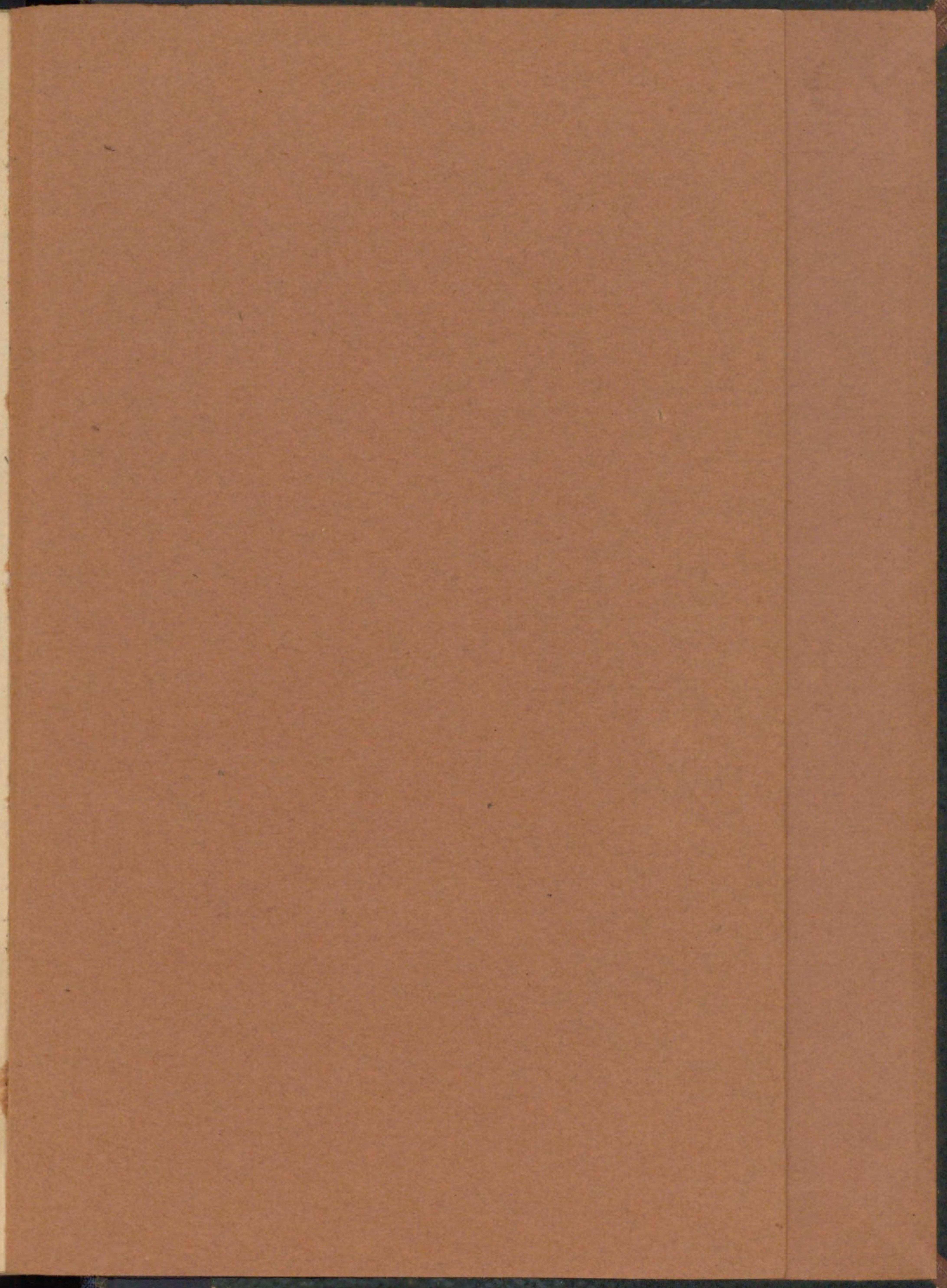
703



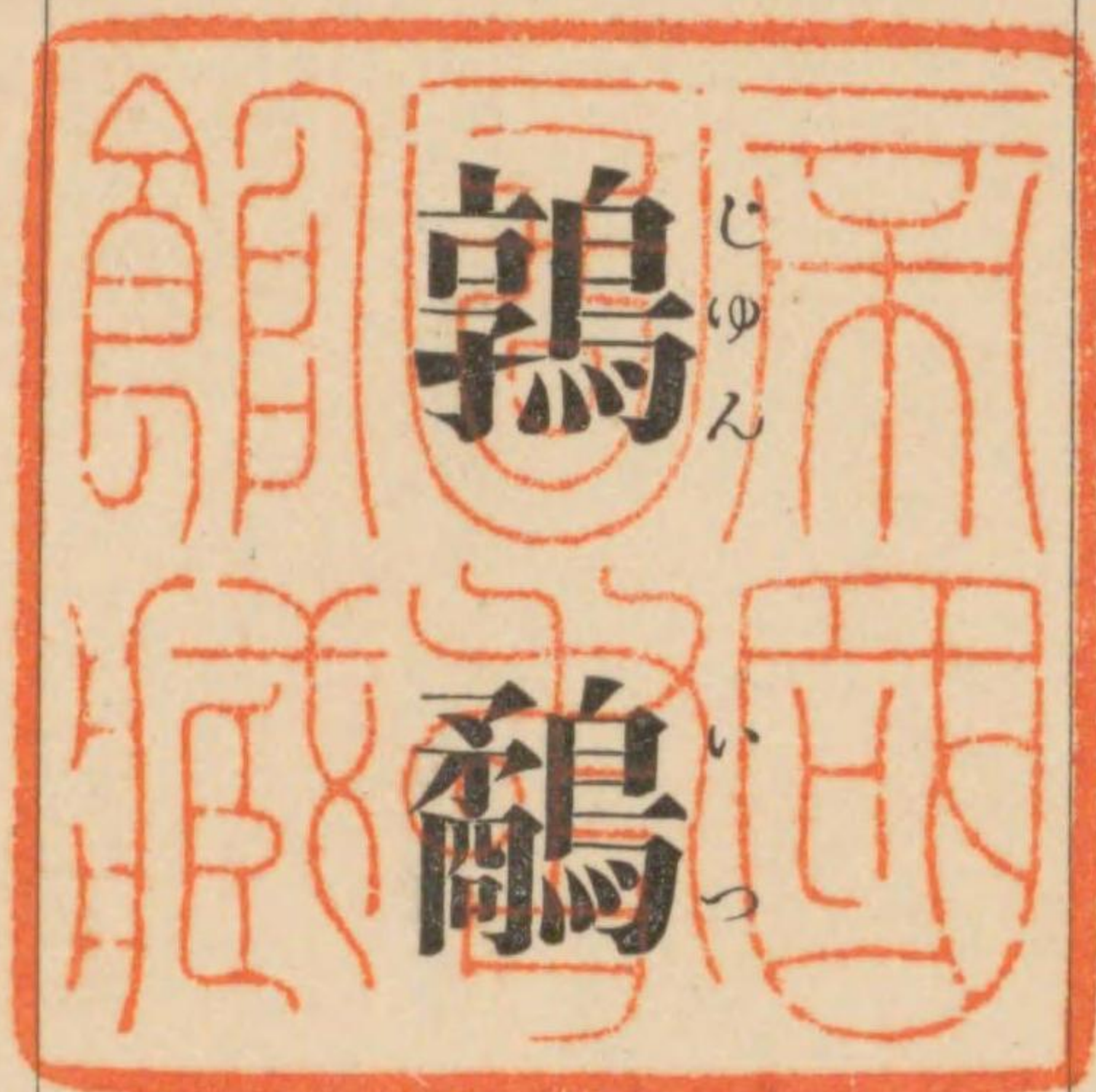


石崎潤三郎蔵
日本評論社版

石



谷崎潤一郎著



隴ろう

雜ざつ

纂さん



日本評論社版

703-85

目次

戀愛及び色情……………一

陰翳禮讃……………四二

現代口語文の缺點について……………九〇

私の見た大阪及び大阪人……………一二九

大阪の藝人……………一八三

東京をおもふ……………一九二

「つゆのあとさき」を讀む……………二七八

春琴抄後語……………三〇六

懶惰の説……………三二五

私の貧乏物語……………三三三

目次

半袖ものがたり……………三四六

廁のいろく……………三五六

旅のいろく……………三六六

青春物語……………三九二

大貫晶川、恒川陽一郎並びに萬龍夫人のこと……………三九二

「新思潮」創刊前後のこと……………四〇七

「パンの會」のこと……………四一八

紅葉館の新年會のこと……………四二六

小山内氏とのいきさつのこと……………四三九

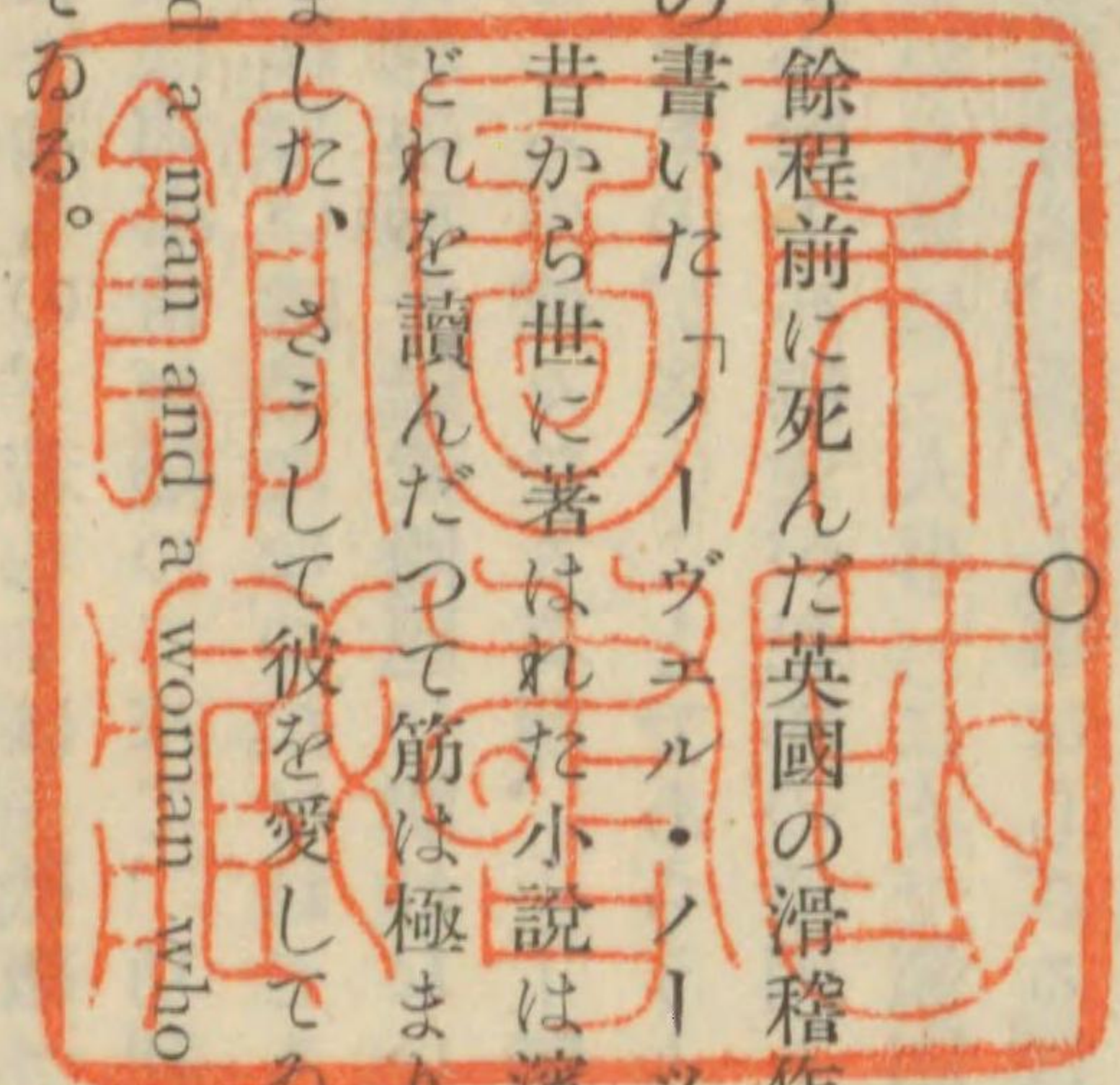
京阪流連時代のこと……………四五三

敏先生との初對面のこと……………四六八

神經衰弱のこと、並びに都落ちのこと……………四七九

戀愛及び色情

もう餘程前に死んだ英國の滑稽作家にジェローム・ケー・ジェロームと云ふ人がある。此の人の書いた「ノイザブル・ノーツ」と題する本の中に、小説なんて要するに下らないもんだ、昔から世に著はれた小説は濱の眞砂の數よりも多く、何千何百何十萬冊あるか知れぬが、それを讀んだつて筋は極まり切つてゐる。煎じ詰めれば「先づ或る所に一人の男があらりました、さうして彼を愛してゐた一人の女があらりました。」—“Once upon a time, there lived a man and a woman who loved him.”——と、結局それだけのことぢやないかと云つてゐる。



それから又、佐藤春夫から聞いたのだが、ラフカディオ・ハーンの何かの講義録の中に、「小説と云ふものは昔から男女の戀愛關係ばかりを扱つてゐるので、自然一般が戀愛でなければ文學の題材にならないやうに考へる癖がついてしまつたが、しかしそんな筈があるべきではない。戀愛でなく、人事でなくとも、随分小説の題材になり得るのであつて、文

學の領域と云ふものは元來もつと廣いのである」と云ふ意味が述べてあるさうである。

以上、ジエロームの諷刺と云ひ、ハーンの意見と云ひ、西洋では「戀愛のない文學」や「小説」が餘程不思議に思はれてゐることは事實であるらしい。尤も可なり古くから政治小説、社會小説、探偵小説等があることはあつたが、それは多く純文學の範圍を脱した「功利的」なもの、若しくは「低級」なものとしてゐた。

現在は稍事情が變つて來て、功利的意義を以て書かれたものがそれの故に「低級」であるとされない時勢になつたけれども、しかし階級闘争や社會改革を取り扱つた作品と雖も、何等かの形で戀愛問題に觸れないものは絶無だと云つていい。むしろ戀愛を機縁として起るところの種々なる葛藤、——戀愛重きか、階級的任務重きか？ と云ふやうなテーマを捕へたものが多いことであらうと察する。

探偵小説も亦戀愛が犯罪の原因となつてゐる場合がしばしばである。さうして若し「戀愛」から更に「人事」にまで範圍を擴げれば、西洋古來の小説と云ふ小説、文學と云ふ文學の種材は、悉く人事ならざるはない。「カーテル、ムール」や「ブラック、ビュテイー」や、「野性の叫び聲」や、稀には動物を主人公にした小説もないではないが、それらは多く寓話的作品であるから、矢張り廣い意味に於ける「人事」の範圍を出るものではない。その他、除外例的には自然美を對象にしたものもあり、詩に於いては殊に珍しくないやうなもの、それもよくよく吟味してみると、何等かの點で人事と交渉を持たないものは極めて少いやうな氣がする。

私は此處まで書いて來て、ふと漱石先生の著に「英國詩人の天地山川に對する觀念」と云ふ論文があつたことを想ひ出した。そして、早速書棚を漁つてみたけれども、生憎ちよつと見あたらないので、残念ながら先生の意見を今の場合に徴することが出来ないが、兎に角彼等の藝術に於いては、「戀愛」にあらざれば、少くとも「人事」が、その領域の大部分を占めるものであることは、彼等の文學史、美術史を見れば直ちに合點が行くのである。

○

日本の茶道では、昔から茶席へ掛ける軸物は書でも繪でも差支へないが、ただ「戀」を主題にしたものは禁せられてゐた。と云ふことはつまり、「戀は茶道の精神に反する」とされてゐたからである。

斯様に戀愛を卑しめる氣風は日本の茶道ばかりでなく、東洋に於いては決して珍しいことではない。われわれの國にも古來幾多の小説や戯曲があり、戀愛を扱つた作品に乏しくないけれども、それらがわれわれの文學史に於いて丁重な扱ひを受けるやうになつたのは、西洋風の物の見方が始まつてから以後のことだ、まだ「文學史」などと云ふものがない時代には、軟文學と云へば先づ文學の末流、婦女子の手すさびか、士君子の餘技とされてゐ

たもので、書く者も遠慮し、読む者も遠慮してゐた。實際に於いては傑出した戯曲家や小説家があり、又彼等の作品が一世を風靡したことはあつたとしても、表面的には品位の下つたものとされ、一人前の男子の生涯を賭すべき仕事でないとされてゐた。支那では古來「濟世經國」を以て文章の本領としてゐたくらんで、支那文學の王座を占める本筋の漢文學と云ふものは、經書か、史書か、然らざる迄も修身治國平天下を目的としたる述作が主であつた。私が少年の時漢文學の教科書として用ひた書物、四書だの、五經だの、史記だの、文章軌範だのは凡そ戀愛とは最も縁の遠いもので、往時はああ云ふものが眞の文學、正系の文學と考へられてゐたらしい。それが明治になつてから坪内先生の「小説神髓」が出たり、沙翁と近松、モウパッサンと西鶴の比較論が始まつたりして、次第に戯曲や小説が文學の主流と見做されるやうになつたのであるが、さう云ふ見方は實はわれわれの正しい傳統ではないのである。小説や戯曲は「創作」であつて、史學や政治學や哲學は「創作」でなく、さうして又、創作にあらざるが故に文學でないと云ふ考へは、見やうに依つては随分窮屈であるとも云へる。もしわれわれの傳統に従つて西洋の文學を見るとしたら、ベールコンや、マコーレイや、ギボンや、カーライルの如きものこそ正系であつて、沙翁の物などはそつと隠して置く方が本當であるかも知れない。

西洋人の考では、詩は散文よりも一層純文學的であるとされてゐる。が、その詩に於いてさへ東洋のものには比較的戀愛の分子が少いことは、最も代表的なる二大詩人——李杜二

家の詩について見れば思ひ半ばに過ぎるであらう。杜甫のものにはたまたま哀別離苦を唄ひ、流謫の悲しみを寄せてゐるのがあつても相手は多く「友人」であるか、稀には彼の「妻子」であつて、「戀人」である場合は一つもない。「月と酒の詩人」と云はれる李白に至つては、その月光と酒杯とに對する熱情の十分の一も、「戀」を思つてはゐなかつたであらう。森槐南は嘗てその「唐詩選評釋」の中で、あの有名な「蛾眉山月歌」、

蛾眉山月半輪秋　影入平羌江水流

夜發清溪向三峽　思君不見下渝州

の詩を擧げ、「君を思うて見ず」とは表面月を意味する如くであるけれども、「蛾眉山月」と云ふ言葉から推して、何んとなく陰に戀人のあることが感ぜられると云つてゐる。槐南翁の此の解釋はたしかに卓見であるが、李白はそんな工合に、時として戀愛を詠することがあつても、思ひを月に托したりして、極めて仄かに、暗示的に述べてゐる。さうして此れが東洋の詩人のたしなみとされてゐたのである。

故に「戀愛でなくとも小説又は文學になる」と云ふラフカディオ・ハーンの説は、西洋人としては珍らしいかも知れないが、われわれ東洋人に取つては別に不思議でも何んでもない。われわれは實は「戀愛でも高級な文學になる」と云ふことを、彼等に教へられたやうなものである。

われわれはしばしば、浮世繪の美は西洋人に依つて發見され、世界に紹介されたもので、西洋人が騒ぎ出す迄は、われわれ日本人は自分の有する此の誇るべき藝術の價値を知らなかつたと云ふ話を聞く。が、考へてみると、此れはわれわれの耻辱でもなければ、西洋人の卓見でもない。われわれは勿論此の方面のわれわれの藝術を認めてくれ、それを世界に喧傳してくれた西洋人の功績を徳とし、深く感謝する者ではあるが、しかし正直に云つてしまふと、「戀愛」や「人事」でなければ藝術にならないと考へる彼等には、浮世繪が一番分り易かつたのである。さうして何故に此の立派な藝術が日本の同胞の間に於いて相當な尊敬を拂はれずにあるか、その理由が彼等に分らなかつたのである。

まことに、徳川時代に於ける浮世繪師の社會的位置は、ちやうど戯作者や狂言作者のそれに等しい。恐らく當時の教養ある士大夫は、浮世繪や戯作を見ること春晝や姪本と遠からざる程に思つたであらうから、大雅堂や、竹田や、光琳や、宗達と、師宣や、歌麿や、春信や、廣重とを、同格に待遇する筈はなく、文學に於いても亦、白石、徂徠、山陽の徒と、近松や西鶴や三馬や春水とを一緒に見る者はなかつたであらう。さればこそ「關八州繫馬」の或る部分が後水尾院の叡威に預かつたとか、「曾根崎心中」の道行の文章が徂徠の激賞する所となつたとか云ふ逸話が、餘程特別な、驚異とすべき事實のやうに傳へられてゐるの

である。馬琴が在世の當時、自らも外の戯作者より一段高い矜持を示し、世人も一種尊敬の眼を以て見たと云ふのは、彼の作物が専ら勸善懲惡を旨として、人倫五常の道を説いたことに起因してゐる。これを以て見ても一般の戯作者の位置がどんなものであつたかを知ることが出来る。

左様われわれの傳統は、戀愛の藝術を認めない譯ではないが、——内心は大いに感心もし、こつそりさう云ふ作品を享樂したことも事實であるが、——うはべは成るべくそ知らぬ風を装つたのである。それがわれわれの慎しみであり、誰云ふとなく社會的禮儀になつてゐたのである。だから歌麿や豊國を擔ぎ出した西洋人は、此のわれわれの暗黙の禮儀を破つたのであると云へなくもない。

しかし、或ひは反問する人があらう、——「それなら戀愛文學が旺盛を極めた平安朝はどうであるか？ われわれの文學史にもああ云ふ時代があつたではないか？ 徳川時代の戯作者は或ひは卑しめられたかも知れぬが、業平や和泉式部のやうな歌人は如何？ 源氏物語以下多くの戀愛小説の作者は如何？ 彼等並びにその作品が受けてゐた待遇はどうか？」と。

「源氏」については古來いろいろの説がある。儒學者は姪蕩の書として時に攻撃するもの

があつたのに反し、國學者はさながらあれをバイブルのやうに神聖視し、あの書の内容を以て最も道徳的な教訓に充ちたものであると云ひ、果ては作者の紫式部を「貞女の鑑」であるとして、迄コヂツケル者があるやうになつた。が、コヂツケであるにもせよ、——兎に角表向きはあの物語が「姪蕩の書」であることを否定しなければ、——さうして無理にも「道徳的」な「教訓的」な読み物であるとしなければ、——文學としての「源氏」の立ち場がなくなるやうに考へたところに、矢張り一種の「禮儀」があり、東洋人に特有な「體裁」を取りつくりふ癖があるのである。

さて、ここで私は最初の質問に返り、平安朝の戀愛文學について少しく觀察することによよう。

○

むかし、刑部卿敦兼と云ふ公卿は世にも稀な醜男であつたのに、その北の方は又すぐれて器量の美しい人で、いつも自分が淺ましい夫を持つたことを嘆いてゐたが、或るとき宮中に五節の舞ひを見に行つて今日を晴れと着飾つた滿延の公卿達の花やかな姿を眺め渡すと、孰れも此れも自分の夫のやうな醜い男は一人もゐない。皆とりどりに立派な風采をしてゐるので、つくづく夫が厭になつて、それからと云ふものは家に歸つても面を背けて物をも云はず、しまひには奥へ引き籠つたきり顔も見せない。夫の敦兼はいぶかしく思ひながら初めは何の事か分らずにゐたが、或る日宮中へ出仕して夜おそく歸つて來ると、出居でみに灯もともつてゐなければ、召し使はれる女房たちまで何處かへ逃げてしまつたと見えて、装束を脱いでも疊んでくれる人もない。そこで、よんどころなく車寄の妻戸をおしあけて、一人物思ひに沈んでゐると、次第に夜が更けて、月のひかり風のおとが身に沁み渡るにつけ、薄情な妻の仕打ちが折に添へて恨めしく、やるせなさかひしひしと迫つて來たので、ふと心をすまして、筆筈を取り出して、

ませのうちなる白ぎくも

うつろふ見るこそあはれなれ

われらが通ひてみし人も

かくしつっこそかれにしか

と、繰り返し繰り返し謠つた。北の方は奥に隠れてゐたが、此の歌をきくと急に哀れを催して敦兼を迎へ、そののちは夫婦仲が非常にこまやかになつたと云ふ。

此の物語は人も知る古今著聞集の好色の卷に出てゐるもので、或ひは鎌倉頃か王朝末期の話かと思ふが、いづれにしても京都の貴族生活はまだ平安朝の風俗習慣を多分に傳へてゐたのであるから、これなどは代表的な平安朝的戀愛の情景と見て差支へあるまい。

ところで、私が妙に思ふのは、此の場合に於ける男と女の位置である。古今著聞集の著書は、「それより殊になからひめでたくなりけるとかや、優なる北の方の心なるべし」と云

つてゐるやうに、此の北の方の不貞を責めようとするのでもなく、又夫の敦兼の意氣地のなさを嘲弄してゐる譯でもなく、云はば夫婦の美談として傳へてゐるのである。さうして此れが平安朝の公卿の間では當然の常識であつたやうに思へる。

醜男を承知で添つた筈の妻が、今更何んの理由もなしに夫を疎んずる。夫はさう云ふ妻に對して愛憎をつかしでもすることか、女の家の外に立つて歌をうたひつつ哀しみを訴へる。それを聴き入れてやつた妻が「優にやさしい心だ」と云はれる。これが西洋のラヴ・シーンではなく、實に日本の王朝の出來事なのである。さう云へば敦兼は「筆箆を取り出して」歌に合はせて鳴らしたとあるが、あの時分の公卿はそんな樂器を常に携へてゐたのであらうか。私はいつも著聞集の此の件を讀むと、盲人の澤市がひとり三味線を弾きながら地唄の「菊の露」を唄つてゐるあの「壺坂」の幕開きの場面を想起する。

鳥の聲、鐘のおとさへ身に沁みて、思ひ出すほど涙が先へ、落ちて流るる妹背の川を合とわたる舟の、楫だに絶えて、かひもなき世と恨みて過ぐる合二上り思はじな、逢ふは別れといへども、愚痴に、庭の小菊のその名にめでて、晝は眺めて暮らしもせうが、よる／＼毎におく露の、露の命のつれなや憎や合今は此の身に秋の風

芝居の澤市は此の唄の前半、本調子のところばかりを唄ふ。さうしてここでも敦兼と同じく思ひを菊に托してゐるのが奇縁であるが、昔から大阪では此の唄をうたふと縁が切れると云つて嫌がる。が、それは兎に角、此の淨瑠璃は團平夫人の作であると云ふから、さす

がに女性のやさしみが出てゐるけれども、しかし澤市は素より人に憐れまれる不具の身であるから、敦兼とは大分事情が違ふ。況んやお里と北の方とは雲泥の相違で、お里のやうなのこそ「優にやさしい心」がけであり、それでこそ「夫婦の美談」であるとも云へる。思ふに後世、武門の政治と教育とが一般に行き亘つた時代から見れば、此の北の方の不都合は論外として、敦兼のやうな夫はまことに男子の風上にも置けぬ奴、「男の面よごし」として擯斥されたであらうことは想像に難くない。かう云ふ場合、鎌倉以後の武士であつたら、潔く女を思ひ切るか、思ひ切れなければ直ちに奥へ踏ん込んで存分に成敗を加へるかする。女も大概さう云ふ男をこそ好くのであつて、敦兼のやうな女々しい眞似をすれば一層嫌はれるばかりであるのが、われわれの普通の心理である。徳川時代は戀愛文學の流行した點で平安朝に對立するものだけでも、今試みに近松以下の戯曲について考へてみても、此の敦兼のやうな意氣地なしの男の例はちよつと思ひ出せない。稀にこれに似た場合があつても、滑稽的に取り扱つてゐるので、美談として傳へてゐるものは恐らくあるまい。人は元祿時代の世相を餘程淫靡で懦弱であつたやうに云ふが、その實當時の遊冶郎は案外意地ッ張りで、殺伐で、向う見ずで、博多小女郎の宗七や油地獄の與兵衛は云はずもがな、心中物に出て來る二枚目はしばしば刃傷沙汰に及んだりして、なかなか王朝の公卿のやうな弱蟲ではない。降つて化政期以後の江戸になれば女でさへも張りを貴んだのであるから、「男らしい男」が持てたことは云ふ迄もなく、江戸芝居に出て來る色男と云へば、

大口屋曉雨式の俠客か、片岡直次郎式の不良少年が多いのである。

○
平安朝の文學に見える男女關係は、さう云ふ點で外の時代と幾分違つてゐるやうな氣がする。敦兼のやうな男を意氣地がないと云つてしまへばそれ迄だけれども、これを云ひ換へれば女性崇拜の精神である。女を自分以下に見下して愛撫するのでなく、自分以上に仰ぎ視てその前に跪く心である。西洋の男子はしばしば自分の戀人に聖母マリアの姿を夢み、「永遠女性」の倂を思ひ起すと云ふが、由來東洋には此の思想がない。「女に頼る」ことは「男らしい」ことの反對とされ、凡そ「女」と云ふ觀念は、崇高なもの、悠久なもの、嚴肅なもの、清淨なものとも最も縁遠い對蹠的な位置に置かれる。それが平安朝の貴族生活に於いては、「女」が「男」の上に君臨しない迄も、少くとも男と同様に自由であり、男の女に對する態度が、後世のやうに暴君的でなく、随分丁寧で、物柔かに、時には此の世の中の最も美しいもの、貴いものとして扱つてゐた様子が思はれる。たとへば竹取物語のかぐや姫が最後に至つて昇天する思想などは、後世の人の考へ及ばないところであつて、第一われわれは芝居や淨瑠璃に現はれる女が、あの儘の服装で天へ昇る光景を想像することだに容易でない。小春や梅川は可憐であつても、要するに男の膝に泣き崩折れる女でしかないのである。

○
古今著聞集で思ひ出したが、今昔物語の本朝の部第十九卷にある「不被知人女盜人語」と云ふものは、日本には珍しい女××××の例であり、さうして恐らく、××××のためのFlagellationの記事としては、東洋に於ける最も古い稀な文献の一つではなからうか。「……晝は常の事なれば人もなくてありける程に、男をいざと云ひて奥に別なりける屋に將行き、此の男の髪に繩を付けて幡物はたものと云ふ物に寄せて背を出させて足を結び曲めてしたためおきて、女は烏帽子をし、水干袴を着て、引きつくりひて笞を以て男の背を慥に八十度打ちてけり。さて如何思ひぬると男に問ひければ、男怪しうはあらずと答へければ、女さればよと云ひて、竈の土を立てて吞ませ、よき酢を吞ませて土をよく掃ひて臥させて、一時ばかりありて引き起して例の如くになりければ、その後は例よりは食物をよくして、持ち來り、よくよくいたは勞りて三日ばかりを隔て、杖目おろ癒ゆる程に前の所に將行き、亦同じやうに幡物に寄せて本の杖目打ちければ、杖目に随つて血走り肉亂れけるを八十度打ちてけり。さて堪へぬべしやと問ひければ、男いささか氣色も替へて堪へぬべしと答へければ、此のたびは初めよりも讚め感じて、よくねざらひて、亦四五日ばかりありて亦同様に打ちけるに、それにも尙同様に堪へぬべしと云ひければ、引きかへして腹を打ちてけり。それにも尙ことにもあらずと云ひければ、えもいはず讚め感じて……」とあるの

がそれで、後世の女賊や毒婦などにも残忍な女は少くないが、かかる嗜虐性の女、殊に男に笞を加へて喜ぶと云ふ例は、荒唐無稽な草双紙にも餘り見受けなところである。これなどは少し極端だけれども、前の敦兼の場合と云ひ、此の女賊と云ひ、平安朝の女は動ともすると男に對して優越な地位に立ち、男は又女に對してとかく優しかつたやうな氣がする。清少納言が宮廷に於いてしばしば男子をへこました話は枕草子を見ても分るが、あの時分の日記や、物語や、贈答の和歌などを讀むと、女は多く男から尊敬されてをり、或る場合には男の方から哀願的態度に出たりして、決して後世のやうに男子の意志に蹂躪されてゐない。

源氏物語の主人公は、大勢の婦女子を妻妾に持つたのであるから、形から云へば女を玩弄物扱ひにしたことになるが、しかし制度の上で「女が男の私有物」であつたと云ふことと、男が心持ちの上で「女を尊敬してゐた」と云ふことは必ずしも矛盾するものでない。自分の財産の一部であつても貴重品と云ふものはある。自分の家の佛壇にある佛像は、もちろん自分の所有品に違ひないが、それでも人はその前に跪き、掌を合はせ、勤めを怠れば罰を受けることを恐れる。私がここで問題にしてゐるのは、經濟組織や社會組織から見た婦人の位置でなく、男が女の映像のうち何かしら、「自分以上のもの」「より氣高いもの」を感ずることを意味する。光源氏の藤壺に對する憧憬の情は、露はに表現してはなけれども、ややそれに近いものだつたことが推し測られる。

西洋の騎士道に於いては、武人の忠誠と崇拜の標的は「女性」にあつた。彼等はその尊敬する婦人のために高められ、引き上げられ、勵まされ、勇氣づけられた。「男らしいこと」と「女人を渴仰すること」とは一致してゐた。近代に及んでも此の風習は同じであつて、レディー・ハミルトンとネルソンの如き、ジョン・スチュアート・ミル夫人とその夫の如き關係は、東洋には全く類例がないと云つていい。

なせ日本では、武門の政治が起り武士道が確立するに従つて、女性を卑しめ、奴隷視することになつたのか。何故「女人にやさしくすること」が「武士らしいこと」と一致しないで、「懦弱に流れる」とされなければならなかつたか。これは面白い問題だけれども、そんな詮索をやり始めると長くもなるし、自然後章で此のことに觸れる機會もあらうから、今は論じないことにして、兎にも角にも、さう云ふ國柄の日本に於いて、高尚な戀愛文學の發達する筈はないのである。成るほど西鶴や近松の作品は、或る點に於いて西洋のものに比べても決して遜色を見ないであらう。が、正直のところ、徳川期の戀愛物はどんな天才的作品と云へども畢竟するに町人の文學であつて、それだけ「調子が低い」のである。そ

れもその筈、彼等自ら女人をおとしめ、戀愛をおとしめながら、いかにして氣象高邁なる戀愛文學を作ることが出来ようぞ。西洋ではかのダンテの「神曲」ですら、ベアトリスに對する此の詩人の初戀から生れたと云ふではないか。その外ゲーテにせよトルストイにせよ、一世の師表と仰がれる人の作品は、姦通を描き、失戀自殺を描き、道徳的には可なりいかげはしい情景を扱つてあつても、その調子の高いことは到底わが元祿文學の比肩し得るところではない。

○
蓋し西洋文學のわれわれに及ぼした影響はいろいろあるに違ひないが、その最も大きいものの一つは、實に「戀愛の解放」、——もつと突つ込んで云へば「性慾の解放」——にあつたと思ふ。明治の中葉頃に榮えた硯友社の文學はまだ多分に徳川時代の戯作者氣質を帯びてゐたものの、つづいて文學界や明星一派の運動が興り、自然主義が流行するに及んで、われらは完全に戀愛や性慾を卑しいとするわれらの祖先の慎しみを忘れ、舊い社會の禮儀を捨てた。今試みに紅葉の作品と、紅葉以後の大作家である漱石の作品とを比べると、女性の見方に著しい相違のあることが分る。漱石は有数の英文學者でありながら決してハイカラの方ではなく、寧ろ東洋の文人型の作家であるが、それでも「三四郎」や「虞美人草」に出て來る女性とその扱ひ方とは、到底紅葉の作に見出し難いものであつて、此の二家の

差は個人の相違でなく、時勢の相違なのである。

文學は時代の反映であると同時に、時代に一步を先んじて、その意志の方向を示す場合もある。「三四郎」や「虞美人草」の女主人公は、柔和で奥床しいことを理想とした舊日本の女性の子孫でなく、何となく西洋の小説中の人物のやうな氣がするが、あの當時さう云ふ女が多く實際にゐた譯ではないとしても、社會は早晚所謂「自覺ある女」の出現を望み、且夢みてゐた。私と同じ時代に生れ、私と同じく文學に志したあの頃の青年は、多かれ少かれ皆此の夢を抱いてゐたであらうと思ふ。

が、夢と現實とはなかなか一致するものでない。古い長い傳統を背負ふ日本の女性を西洋の女性の位置にまで引き上げようと云ふのには、精神的にも肉體的にも數代のジェネレーションに互る修練を要するのであつて、これがわれわれ一代の間に満たされよう筈はない。早い話が、先づ西洋流の姿態の美、表情の美、歩き方の美である。女子に精神的優越を得させるためには、肉體から先に用意しなければならぬことは勿論であるが、考へて見ると、西洋には遠く希臘の裸體美の文明があり、今日もなほ歐米の都市には至る所の街頭に神話の女神の彫像が飾られてゐるのであるから、さう云ふ國や町に育つた婦人たちが、均整の取れた、健康な肉體を持つやうになるのは當然であつて、われわれの女性が眞に彼等と同等の美を持つためには、われわれも亦彼等と同じ神話に生き、彼等の女神をわれわれの女神と仰ぎ、數千年に溯る彼等の美術をわれわれの國へ移し植ゑなければならぬ。今

だから白状してしまふが、青年時代の私などはかう云ふ途方もない夢を描き、又その夢の容易に實現されさうもないのに此の上もない淋しさを感じた一人であつた。

○ 私にはさう思ふ、——精神にも「崇高なる精神」と云ふものがある如く、肉體にも「崇高なる肉體」と云ふものがあると。而も日本の女性にはかかる肉體を持つ者が甚だ少く、あつてもその壽命が非常に短い。西洋の婦人が女性美の極致に達する平均年齢は、卅一二歳、——即ち結婚後の數年間であると云ふが、日本に於いては、十八九からせいせい二十四五歳までの處女の間こそ、稀に頭の下るやうな美しい人を見かけるけれども、それも多くは結婚と同時に幻のやうに消えてしまふ。たまたま某氏の夫人だとか、女優や藝者などに美人の聞えの高いのはあるが、大概そんなのは婦人雑誌の口繪の上の美人であつて、實際に打つかつて見ると、皮膚がたるみ、顔に青黒いお白粉やけやしみが出來、眼もとに所帶の窶れたの××の過剰から來る疲勞の色が浮かんでゐる。殊に處女時代の雪のやうに白く堆い胸部と、ハチ切れるやうな……の曲線とを崩さず持つてゐる者は一人もないと云つていい。その證據には若い時分に好んで洋装した婦人たちでも、三十臺になると、ゲツソリと肩の肉が殺げ、腰の周りが變に間が抜けてヒョロヒョロして來て、とても洋装が着切れなくなる。結局彼女等の美しさは和服の着こなしや化粧の技巧で、つち上げたもので、弱々しい綺麗さはあるにしても、眞に男子をその前に跪かせるやうな崇高な美の感じはない。

○ だから西洋には「聖なる姪婦」、もしくは「みだらなる貞婦」と云ふタイプの女が有り得るけれども、日本にはこれが有り得ない。日本の女はみだらになると同時に處女の健康さと端麗さを失ひ、血色も姿態も衰へて、醜業婦と選ぶ所のない下品な姪婦になつてしまふ。

○ たしか徳川家康であつたかと思ふが、嫁は夫の寢床の中にいつ迄も止まつてゐてはいけな
い、××の後には成るべく早く自分の床へ戻るやうにするのが、長く夫に愛される秘訣である
ると云ふ意味を、婦女のたしなみとして諭してゐるのを何かの本で讀んだことがある。こ
れはあくどいことを嫌ふ日本人の性質を餘程よく呑み込んだ教へであつて、家康の如き絶
倫な肉體と精神力を持つてゐた人でも、尙此の言葉があるかと思ふと、ちよつと意外な
氣がしないでもない。

嘗て私が中央公論誌上へ紹介した室町時代の小説に「三人法師」と云ふ物語がある。讀ん
だ方は或ひは覺えてをられるであらうが、あの中の一節に、足利尊氏の家來の糟屋と云
ふ侍がさるやんごとなき堂上方の女房を垣間見て、忽ち戀わづらひに罹るところがある。
南北朝の時代にはさすがにまだ王朝頃の優雅な風が武士の間にも残つてゐたと見えて、や

がて此の事が尊氏將軍の耳に這入り、將軍自ら糟屋のために橋渡しの文を書いて、佐々木と云ふ侍を使者に立てて、その堂上家へ遣はすことになる。「……さては易き事よと仰せありて、忝くも御所様御文を遊ばして、佐々木を御使にて、二條殿へ參らせける。……」と、原本では糟屋が自分でそのいきさつを物語つてゐるのであるが「……御返事には、尾上と申す女房にて渡り候程に、地下へは下すまじきにて候。其人を此方へ給はり候べき由、遊ばされ候ひし文の返事を、我等が宿へ給はり候。御所様の御恩、報じ申すべきやうもなし。是に付きても、味氣なき世かな。譬ひ尾上殿に逢ひ奉り候とも、たゞ一夜の契なるべし。是こそ遁世する所と存じ候ひしが、又打返し思ひ候事は、糟屋こそ、二條殿の女房達を戀ひ申し、將軍の御籌策にてありけるが、臆して會ひ申さで、遁世したるなど云はれんこと、生涯の恥と存じて、せめて一夜なりとも會ひ申し、其後は兎も角もと存じ候て、……」と、その時の氣持ちを糟屋は斯う告白してゐるのである。

相手は地下人の武士から見れば身分違ひの上臈であるにもせよ、一人前の侍が病みつゝ程に戀ひこがれてゐたものが、主人の好意でやうやう思ひを叶へようと云ふ、天にも登る嬉しさの場合に、「御所様の御恩報じ申すべきやうもなし」と、自分でも感謝してゐながら、すぐその後で「是に付きても、味氣なき世かな。譬ひ尾上殿に逢ひ奉り候とも、ただ一夜の契なるべし。是こそ遁世する所」だと思つたと云ふのは、いかにも異常な心理である。

これが平安朝の貴族でもあれば格別、尊氏將軍の部下と云へば、幾度か戰場を馳驅したであらう亂世の武士の感懷であるから、一層不思議ではないか。

たしか西洋の諺に「空を飛ぶ數羽の鳥よりも手にある一羽の鳥の方がいい」と云ふ意味の語があつたと記憶する。然るに此の武士は、及びも付かぬ高根の花と眺めてゐたものが、意外にも自分の物にならうと云ふ間際に至つて、まだその喜びが實現もされぬうちから、云はば來るべき幸福の豫想に浸りつつある最中に、「是に付きても味氣なき世かな」と、早くも遁世の志を抱く。そして結局、「……臆して會ひ申さで、遁世したるなど云はれんこと、生涯の恥と存じて」思ひ返しはするものの、手に入れた上は何處迄も放さず、底の底まで歡樂を極めようとするのではなく、「せめて一夜なりとも會ひ申し、其後は兎も角も」と云ふ心で戀人の許へ出かける。蓋し斯う云ふ心理は日本人だけのものであつて、西洋人にも、そして恐らくは支那人にもあるまい。

○

前に云つた家康の教訓は、變則な戀愛や一時的にパツと燃え上る戀愛には當て箴まらない場合もあらうが、少くとも正式な結婚生活を營む者には甚だ適切な注意であつて、實は嫁よりも夫の方が、——彼が日本人である限り——誰しも痛感してゐるであらう。私なぞもしばしば覺えのあることで、妻は云ふ迄もないが戀人に對しても、直後暫くは——最も短くて二三分間、長くて一と晩以上一週間も一箇月も、——離れてゐたくなるのが常で、過

去の戀愛生活を振り返つて見るのに、さう云ふ感じを起させなかつた「相手」と「場合」とは殆んど數へる程しかない。

これにはいろいろの原因があることだらうが、兎に角日本の男子は此の方面に於いて比較的早く疲勞する。さうして、疲勞が早く來るために、それが神経に作用して、何んとなしく淺ましいことをしたと云ふ感じを起させて、氣分を暗くさせ、消極的にさせる。或ひは傳統的に戀愛や色情を卑しむ思想が頭に沁み込んで、それが心を憂鬱にさせ、逆に肉體に影響するのもかも知れないが、どつちにしてもわれわれは×××に於いて甚だ淡泊な、あくどい姪樂に堪へられない人種であることは確かである。横濱や神戸あたりの開港地にある賣笑婦に聞いてみても此のことは事實であつて、彼女等の話に依ると、外國人に比べて日本人は遙かにその方の慾望が少いと云ふ。

○

しかし私は、これを一概にわれわれの體質の弱いことに歸したくない。われわれが今後大いにスポーツを盛んにし、(ついでだから云つておくが、西洋人のスポーツ好きは餘程彼等の×××と密接な關係があるに違ひない。うまい物をたらふく食ふために腹を減らすのと同じ意味である。)西洋人並みの強壯な肉體を持つやうになつても、果して彼等のやうにあくどくなれるかどうかは疑問であると思ふ。せんたいわれわれは他の方面に於いては可なり活動的な、精力的な人種であることは、過去の歴史に照らしても、現在の國勢に徴しても、明かなことである。われわれが×××にあくどくないのは、體質と云ふよりも、季候、風土、食物、住居などの條件に制約される所が多いのではないか。

それについて思ひ出すのは、西洋人は日本に長く在留すると、次第に頭が悪くなり、體がだるくものうくなつて來て、遂には仕事が出来ないやうになる。だから四年に一遍ぐらゐは休暇を取つて歸國し、故郷に半年か一年ぐらゐ居て又戻つて來るか、そんな暇のない者は、日本のうちで稍歐米の季候に似た土地へ轉地する。信州の輕井澤が開けたのは全くそのためであると云ふが、つまり日本は歐米に比べてそれだけ濕氣が多いのである。われわれでさへ入梅の季節にはとかく神経衰弱にかかつて、手足が大儀になるのであるから、入梅と云ふ現象のない乾いた空氣の國から來た者は、此の土地にゐると一年ぢゆう入梅のやうに感じるかも知れない。尤も世界には日本以上に濕氣の多い所もある。私の友人の或る會社員で、長らく印度のボンベイに勤めてゐた者が、たまたま歸國しての話に、「いや、もう年が年ぢゆう蒸し暑くつて、べとべととして、とても溜らぬ。あんな所に又やられるなら辭職した方が優しだ」と云ふので、「それでもときどき歸國出来るんぢやないか」と云ふと、「四年に一度ぐらゐ歸つて來たんぢや遣り切れない。彼處に長く住んで見ろ、誰だつて頭が馬鹿になつて、體ぢゆうが、骨の髓から腐つたやうになる、だから日本人だつて西洋人だつてみんな行くのを厭がるんだ」と云つてゐたが、たうとうその男は本

當に會社を罷めてしまつた。蓋し數多い在留外人のうちには、日本に派遣されたことを、ちやうど日本人がボンベイへ派遣された如く感じてゐる者もあるに違ひない。あまり乾燥し過ぎた土地も健康のためにはどうか分らぬが、性慾に限らず、たとへば脂っこい食物や強烈な酒に飽満した時など、すべてあくどい歡樂の後では、すうツと上せの下るやうな清々しい空氣に觸れ、きれいに澄み切つた青空を仰いでこそ、肉體の疲勞も恢復し、頭腦も再び冴えるのである。ところが濕氣の多い國は従つて雨も多いから、青空を見る時が割りに少く、殊に日本は島國のせるか餘程海岸から遠い高原地でない限り、冬でも空氣がじめじめしてゐて、南風の吹く日などはべとべとした汐風のために顔がぬらぬらと脂汗を湧かして、頭痛のするやうなことが珍しくない。私は旅行家でないから確かなことは云へないけれども、恐らく日本ぢゆうで、比較的雨が少く、暖かでも乾燥した土地、さうして交通の便利も悪くない地方と云へば、私の現に住んでゐる六甲山麓の一帶と、沼津から静岡に至るあの沿岸などであらう。一と頃の醫者は虚弱な人に海濱へ轉地することを勧め、東京ならば湘南地方、京阪ならば須磨明石邊へ療養に行くことが流行つたもので、今でも鎌倉あたりから東京へ通勤する人を見かけるが、私の經驗に依ると、海邊の土地は成る程冬は暖かいことは暖かいけれども、その代り例のポヤポヤとした生ぬるい汐風の吹く日が多く、着物などが直ぐべつとりと濕つて來て、頭がかつかつと上せて來る。一月二月はまだいいとして、三四月になると一層これが甚しい。もし夫れ夏の蒸し暑さに至

つては、鎌倉などは東京よりもずつと寒暖計が上るくらゐで、何を苦しんであの飲み水のまづい蚊の多い所へ避暑に行くのか氣が知れない。私などは人並み以上に上せ性のせゐるか、鶴沼にも小田原にも住んだことがあるが、概ね頭部に鈍痛を覺えない日は少く、殊に小田原では激しい神經衰弱にかかつて體重が恐ろしく減つた。京阪に於ける須磨明石もほぼ此れと同様で、あれから西の方へかけての中國筋は、いつたいに雨が少いから見た所は明るいけれども、どう云ふものか空氣がべたべたと粘つくやうな感じがして、もう櫻の咲く時分から蒸し暑く、やがて夕なぎの季節になれば手足が蕩けるやうにもものうく、自分の體は素よりのこと、海を見ても青葉を見ても出來立ての油繪のやうにキラキラして、びつしより汗を掻いてゐる。

さう云ふ譯で、何しろ日本と云ふ國はその中樞部の大部分が斯う云ふべとべとした季候なのであるから、あくどい歡樂にはまことに不向きである。佛蘭西あたりでは眞夏の酷熱の際と云へども汗がひとりで乾いてしまつて、決して肌がべたつかないと云ふではないか。そんな土地でこそ飽くなき××に耽ることも出来るが、じつとしてゐても頭痛がしたりひだるかつたりするのでは、とても毒々しい遊びは思ひも寄らない。實際、瀬戸内海地方の夕なぎなどに來合はせたら、ほんの少しビールを飲んでさへ直ぐ體ぢゆうがねとねとして、浴衣の襟や袂は脂じみ、臥ころんでゐながら節々がほごれるやうで、さう云ふ時には全く慾も得もなく、××のことなど考へてもウンザリする。それに、季候がそんな工合

であるから、食物も亦淡白であり、住居の形式も開放的であつて、これが大いに影響してゐる。貝原益軒が白晝に××××××をすることを勧めてゐるのは、日本のやうな風土に於いては殊に健康な方法であつて、さうして一遍晴れ晴れとした日の目を見、風呂でも浴びてそこらを散歩して來れば、憂鬱な氣分に陥ることも少く疲勞も早く癒える譯だが、いかんせん普通の民間の間取りでは密閉し得る部屋と云ふものがないのだから、これもなかなか云ふべくして行ひ難いことになる。

○
それなら印度や南支那あたりの濕氣た國の人々は、われわれ以上にその方面が淡白であつていい筈であるが、どうもさうでもなささうである。彼等はわれわれよりはすつと濃厚な食物を取り、もつと都合のいい間取りの家に住み、それ相當にあくどく暮らしてゐさうに思はれる。が、その代り、古來支那が多く北方から征服された歴史を考へ、又印度の現状などを見ると、そんなことのために彼等は精力を消費し過ぎたのかも知れない。物資の豊かな大國の人民はそれでもよかつたのであらうが、日本人のやうに活動的で、氣短かで、負けず嫌ひで、而も貧しい島國に生れた者は、到底あの眞似は出来なかつたのであらう。善くも悪くも、兎に角われわれは刻苦精勵して、武人は武を研ぎ、農夫は耕作にいそしみ、年中たゆみなくせつせと働いてゐなければ國が立つて行かなかつた。もし少しでも氣

を緩めて平安朝の公卿のやうな安逸な生活をつづけてゐれば、忽ち近隣の大國から侵略されて、朝鮮や蒙古や安南と同じ運命を辿つたであらう。その事情は昔も現代も變りはなく、而もわれわれは甚だ負けじ魂の強い民族なのである。われわれが今日東洋に位しながら世界の一等國の班に列してゐるのは、即ちわれわれがあくどい歡樂を貪らなかつた所以であるとも云へるであらう。

○
戀愛を露骨に現はすことを卑しむ、且その上にも色慾に淡白な民族であるから、われわれの國の歴史を讀んでも蔭に働いた女性の消息と云ふものが一向明かに記してない。私などはその職業上、過去の人物を題材にして歴史小説を書きたいと思ふことがしばしばであるが、いつも困るのはその人物をめぐる女性の動きがはつきり分らないことである。云ふ迄もなく、史上の英雄豪傑も必ず裏には何かの形式で戀愛事件があつたに違ひなく、さう云ふ方面を忌憚なく描寫してこそ人間味を出すことが出来るのであつて、かの太閤が淀君に送つた戀文などは眞に貴重な資料であるが、ああ云ふ文書の傳へられてゐるものは割り合ひに少く、稀にあつても専門の歴史家が多くの日子を費して、漸くわづかに一つ二つを集め得るに過ぎない。甚しきは歴史上著名の人物であつて、その正室の有無さへも分らず、母のあつたことはたしかだとしても、彼女の素性や名前も知れない場合があることは、諸

家の系譜を見る者の常に感ずるところであらう。實に日本の昔からの系圖書きと云ふものは、上は××から下々の家族のものに至る迄、男子の行動を傳へることは比較的詳かであるに拘はらず、女子の場合には單に「女子」もしくは「女」と記入してあるのみで、生れた年も死んだ年も名前も書いてないことが普通だと云つていいのである。即ちわれわれの歴史には個々の男性はあるけれども、個々の女性と云ふものはない。それは系圖にある通り、永久に一人の「女子」——或ひは「女」なのである。

源氏物語に末摘花と云ふ卷がある。源氏のために戀の取り持ちをする大輔の命婦と云ふ女が、「心ばえ形など深きかたは得知りはべらず、かいひそめ、人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひ侍る、琴をぞなつかしき語らひ人と思ひ給へる」と、故常陸宮の姫君のことを噂するので、或る秋の夜の二十日あまりの月の出る頃に、源氏が忍んで、荒れたる宿に世を佗びてゐる姫君の許へ通ふことになる。姫君はひたすら羞かしがつてゐたが、いろいろと命婦にすすめられると、さすがに人の云ふことは強うも否びぬ御心で、「先の云ふことを黙つて聞いてゐるだけで、返事をしないでいいのだつたら、格子を隔てて會ふことにしよう」と仰つしやる。格子の外ではあまり失禮だからと云ふので、命婦が源氏を一間のうちへ入れ、襖を中に置いて會はせる。源氏には姫の姿は見えない

が、「とかうそそのかさされて、ゐざり寄り給へるけはひ、忍びやかに衣被えびの香かとなつかしうかほり出で、おほどかなる」が感ぜられる。そして襖の此方から源氏が何を語りかけても、姫からは一と言のいらへもない。

幾そたび君がしじまに負けぬらむ

ものな云ひそと云はぬたのみに

と、やがて源氏が口ずさむと、襖の内で付き添ひの女房の侍従と云ふのが、姫君に代つて答へる。

鐘つきとぢめんことはさすがにて

いらへまうきぞかつはあやなき

こんな遣り取りがあつてから、結局源氏は境の襖を押し開けて這入り、姫と契りを結ぶのであるが、矢張り室内が暗いために相手の人柄は分らずにしまふ。かうして源氏は長いあひだ姫君の顔を見知らずに通つてゐるうちに、或る雪の降る日の朝、手づから庭先の格子を上げて前栽の雪景色を眺めながら、「をかしきほどの空も見給へ、盡きせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と恨みを云ふと、お付きの老女たちも「はや出でさせたまへあぢきなし」とすすめるので、姫はやうやう身づくろひをして、初めて明るみへゐざり出る。

末摘花の場合には、此の姫君の鼻のあたまの紅かつたことがその時に分つて、さすがの源氏も興ざめがしたと云ふ滑稽談があるのだが、しかしさう云ふ滑稽事件が成立するくらゐ

であるから、相手の顔も知らないままに通ひつづけると云ふことが當時は普通であつたと見える。第一、取り持ちをする大輔の命婦にしてからが、「心ばえ形など……得知りはべらず、……さべき宵など、物越しにてぞ語らひ侍る」と云ふのだからまだ姫君の實物を見ず、恐らく几帳か何かを隔てて話したことがあるばかりで、「琴を弾くのを楽しみにしてい
らつしやいます」と、たつたそれだけの、心もとない口上である。こんな口上で取り持つ
方も取り持つ方だが、それに釣られて出かけて行くのみか、正體もたしかめずにそのまま
契りを重ねると云ふのは、今から見れば男の方もずるぶん物好き過ぎてゐる。思ふに個性
と云ふことを重ねる現代の男子であつたら、ほんの一と夜の悪戯なら知らぬこと、そんな
風にして眞の戀愛を楽しむことが出来ようとは、夢にも考へられないであらう。が、前
にも云ふやうに、平安朝の貴族の間では、此れが實に普通であつた。女は文字通り「深窓
の佳人」で、翠帳紅閨の奥に垂れこめてをり、その上當時の採光の悪い家の中では、晝間
でさへもうすぐらいのに、まして燈火の灯かげの鈍い夜であつては、一と間のうちに鼻を
つき合はせても容易に見分けが附かなかつたことが想像せられる。つまりさう云ふ暗い奥
の方に、几帳だの御簾だのと云ふ幾重の帳をすゑて、そのかげにひっそり生きてゐたので
あるから、男の感覺に觸れる女と云ふものはただ衣すれの音であり、焚きしめた香の匂ひ
であり、餘程接近したとしても、手さぐりの肌ざはりであり、丈なす髪の瀧津瀬であつた
に過ぎない。

○

ここでちよつと餘談になるが、もう十年あまり前、嘗て私は今の北平、當時の北京に滞在
してゐて、夜を非常に眞つ暗に感じたことがある。近頃はあの都にも市電が敷けたさうで
あるから、街通りも餘程明るく賑やかになつたことであらうが、あの時分はまだ世界戦争
の最中で、城外の色町や芝居町のやうな盛り場を除く外は、日が暮れると實に眞つ暗であ
つた。表の大通りはそれでも幾らか明りが洩れてゐるけれども、ちよつと横丁へ這入つた
りすると、全く漆のやうな闇で、螢ほどの灯も見えない。何分あの邊の邸町と云ふのは、
高い土塀を圍らした、小さな城廓のやうな構へばかりで、門には嚴重に一寸の隙間もなく
板戸がしめてあり、その戸の中には又影壁と云ふ衝立のやうな塀があり、二重にも三重に
も鎖してあるのだから、家の中からは一點の灯影もこそと云ふ人聲も洩れるではなく、無
氣味な廢墟のやうな壁が暗い中に黙然として續いてゐる。その壁と壁との間の屈曲した狭
い小路を、私は始め何氣なく歩いてゐたが、何處迄行つても闇が餘り濃く、餘り静かなの
で、間もなく云ひ知れぬ怖れを感じて、何かに追ひ立てられるやうに走つて抜けたことが
ある。

蓋し近代の都會人はほんたうの夜と云ふものを知らない。いや、都會人でなくとも、此の
頃は可なり邊鄙な田舎の町にも鈴蘭燈が飾られる世の中だから、次第に闇の領分は驅逐せ

られて、人々は皆夜の暗黒と云ふものを忘れてしまつてゐる。私はその時北京の闇を歩きながら、これがほんたうの夜だつたのだ、自分は長らく夜の暗さを忘れてゐたのだと、さう思つた。そして自分が幼ない折、覺つかない行燈の明りの下で眠つた頃の夜と云ふものが、いかに凄じく、わびしく、むくつけく、あぢきないものであつたかを想ひ起して、不思議ななつかしさを感じたのであつた。

少くとも明治十年代に生れた者は、その頃の東京の夜の街が丁度北京のそれと同じやうであつたことを覚えてゐるだらう。私は茅場町の自分の家から蠣殻町の親戚の家まで、鎧橋を渡つてほんの五六丁の距離を、しばしば弟と一緒に息せき切つて夢中で走つて行つたことを記憶してゐる。無論その時分は、たとひ下町のまん中でも女の一人歩きなどは、夜は出来るものでなかつた。既に十年前の北京、四十年前の東京がそんなふうであつたとしたら、今から千年近くも前の京都の夜の暗さと静けさはどれ程であつたらう。私はそこまで考へて来て、「ぬばたまの夜」と言ふ言葉や、「夜の黒髪」と云ふ言葉を思ひ合はせると、その頃の女と云ふものに付きまとふ、或る幽婉な、神祕な感じを、はつきりと讀み取ることが出来る。

○

「女」と「夜」は今も昔も付き物である。しかしながら現代の夜が太陽光線以上の眩惑と光彩とを以て女の裸體を隈なく照らし出すのに反して、古への夜は神祕な暗黒の帳を以て、垂れこめてゐる女の姿を尙その上にも包んだのである。かの渡邊綱が戻橋で鬼女に逢つたり、頼光が土蜘蛛の妖精に襲はれたりしたのは、かう云ふ凄じい夜であつたことを念頭におく必要がある。「住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん」と云ひ、「いとせめて戀ひしきときはうばたまの夜のころもをかへしてぞぬる」と云ひ、その他むかしの人の夜に關するくさぐさの歌も、さう考へてこそ始めて實感が湧いて来る。思ふに古への人の感じでは、晝と夜とは全く異なつた二つの世界だつたであらう。晝の明るさと夜の暗さ、まことに何んと云ふ甚だしい相違であることか。一と夜明ければ昨夜の物凄いや暗黒の世界は忽ち千里の彼方に去つて、空は青々と晴れ、日はきらきらと輝やくのである。その白日の光りを仰ぎつつ昨夜のことを考へると、まことに夜と云ふものは有りとしもなき不思議な幻、何か此の世の外なるものやうな氣がする。「春の夜の夢ばかりなる手枕に」と和泉式部は歌つたが、果敢なくも短かい夜のむつごとを回想すると、和泉式部でなくても「夢ばかりなる」感じがしたに違ひない。

女は實にその常闇の夜の奥に隠れてゐて、晝間は姿を見せることがなく、ただ「夢ばかりなる」世界にのみ幻影の如く現はれる。それは月光のやうに青白く、蟲の音のやうにかそけく、草葉の露のやうに脆く、要するに、暗黒の自然界が生み出す凄艶なる魘魅の一つである。昔の男女が歌の贈答にしばしば戀を月にたとへたり露にたとへたりするのは、決して

てわれわれが考へるやうな軽い意味の比喩ではあるまい。きぬぎぬの朝、露に袂をしめらせながら庭前の草葉を踏んで歸つて行く男を思へば、露も、月も、蟲の音も、戀も、その關係が甚だ密接で、時には一つものやうにも感じたであらう。人は源氏物語以下昔の小説に現はれる婦人の性格がどれもこれも同じやうで、個性が描かれてゐないことを攻撃するけれども、古への男は婦人の個性に戀ひしたのでもなく、或る特定の女の容貌美、肉體美に惹きつけられたのでもない。彼等に取つては、月が常に同じ月である如く、「女」も永遠に唯一人の「女」だつたであらう。彼等は暗い中で、かすかなる聲を聞き、衣の香を嗅ぎ、髪の毛に觸れ、なまめかしい肌ざはりを手さぐりで感じ、而も夜が明ければ何處かへ消えてしまふところのそれらのものを、女だと思つてゐたであらう。

私は嘗て、小説「蓼喰ふ蟲」の中で、主人公の感想に託して文樂座の人形芝居のことを下のやうに記した。

……それを根氣よく視つめてゐると、人形使ひもしまひには眼に入らなくなつて、小春は今や文五郎の手に抱かれてゐるフェアリーではなく、しつかり疊に腰を据ゑて生きてゐた。だがそれにしても、俳優が扮する感じとも違ふ。梅幸や福助のはいくら巧くても「梅幸だな」「福助だな」と云ふ氣がするのに、此の小春は純粹に小春以外の何者でもない。俳優のやうな表情のないのが物足りないと思ふに昔の遊里の女は芝居でやるやうな著しい喜怒哀樂を色に出しはしなかつたであらう。元祿の時代に生きてゐた小春は、恐らく「人形のやうな」女であつたらう。事實はさうでないとしても、兎に角淨瑠璃を聴きに來る人たちの夢みる小春は梅幸や福助のそれではなくて、此の人形の姿である。昔の人の理想とする美人は容易に個性を現はさない、慎しみ深い女にあつたのに違ひないから、此の人形でいい譯なので、此れ以上に特長があつては寧ろ妨げになるかも知れない。昔の人は小春も梅川も三勝もおしゆんも皆同じ顔に考へてゐたかも知れない。つまり此の人形の小春こそ日本人の傳統の中にある「永遠女性」のおもかげではないのか……

此のことはひとり人形芝居に就いてばかりでなく、繪卷や浮世繪に描かれてゐる美人を見ても亦同様な感じがする。時代に依り作者に依つて、美人の型にも幾分の變化はあるけれども、あの有名な隆能源氏以下の繪卷物にある美女の顔は、孰れも此れも同じであつて、全く個人的特色がなく、平安朝の女と云ふものは皆一つ顔をしてゐたのかと思ふ程である。浮世繪に於いても、俳優の似顔繪は別として、少くとも女の顔の關する限り、歌麿には歌麿の好んで描く顔、春信には春信の好きな顔と云ふものはあるが、同一の畫家は絶えず同じ顔ばかりを畫いてゐる。彼等の題材とする女の種類は、遊女、藝者、町娘、女房、その他さまざまであるけれども、いつも同じ顔に違つた着付けや髪かたちを與へるに

過ぎない。さうしてわれわれは、おのおのの畫家が理想として描いた多くの美女の顔たちから、その孰れにも共通な典型的の「美人」を想像することが出来る。云ふ迄もなく昔の浮世繪の巨匠たちは、モデルに就いて個人的特色を見分ける力がなかつたのでもなく、又それを描き出す技術に缺けてゐたのでもない。恐らく彼等は、さう云ふ個人的色彩を消してしまふ方が、一層美的であり、それが繪かきのたしなみであると信じてゐたのであらう。

○

一般に東洋流の教育の方針と云ふものは、西洋流とは反對に、出来るだけ個性を殺すことにあつたのではないか。たとへば文學藝術にしても、われわれの理想とするところは前人未踏の新しい美を獨創することにあるのでなく、古への詩聖や歌聖が到り得た境地へ、自分も到達することにあつた。文藝の極致——美と云ふものは昔から唯一不變であつて、歴代の詩人や歌人はその一つものを繰り返して歌ひ、何んとかして頂上を極めようと努める。「分けのぼる麓の道は多くともおなじ高嶺の月を見るかな」と云ふ歌があるが、芭蕉の境地は要するに西行の境地である如く、時代に應じて文體や形式は違つて來るけれども、目ざす所は結局ただ一つの「高嶺の月」である。此の事は文學よりも繪畫——殊に南畫を見ると分る。南畫のすぐれたものは、山水にしる、竹石にしる、個人に依つて技巧はいろいろに異るとしても、そこから受ける一種の神韻——禪味と云ふか、風韻と云ふか、煙霞の氣と云ふか、——兎に角悟道に達したやうな崇高な美の感じは常に同じであつて、南畫家の窮極の目的は畢竟此の氣品を得るにある。南畫家がしばしば自分の製作に題して、「誰の筆意に仿ふ」と云ふ斷り書きを附けるのは、即ち己れを空しうして前人の跡を踏まうとするもので、さう云ふ事から考へると、古來支那の繪に贋作が多く、且贋作を巧みにする者が多いのは、必ずしも人を欺さうとする意志からではないかも知れない。彼等に取つて個人的功名などは問題でなく、ひたすら己れを古人に合致させることが楽しいのかも知れない。その證據にはニセモノと云つても實に丹念な密畫があつて、さう云ふものを似せて畫くには、その人自身に餘程の手腕と、旺盛な製作熱がなければならず、慾得づくでは中々ああ迄に出来るものでない。既に古人の美の境地を極めることが主眼であり、己れを主張することが目的でない以上は、作者の名前など誰であつてもいい譯である。

孔子は政を堯舜の古へに復すことを理想とし、しばしば「先王の道」を説いた。此の、絶えず古へを模範とし、それに復歸しようとする傾向のあつたことが、東洋人の進歩開發を妨げた所以であるが、善くも悪くも、われわれの祖先は皆その心がけて、倫理道德の修養に於いても、自分を立てると云ふよりは、先哲の道を守ることが第一とした。特に女は、己れを殺し、私の感情を去り、個人的長所を没却して、「貞女」の典型に充て簞まるやうに努めたのではないかと思はれる。

日本語に色氣と云ふ言葉がある。これはちよつと西洋語に譯しやうがない。近頃エリナ・グリンに依つて發明されたイトトと云ふ言葉がアメリカから渡つて來たけれども、色氣とは甚だ意味が違ふ。映畫で見るクララ・ボウのやうなのは豊滿なるイトトの所有者であらうが、凡そ色氣とは最も縁遠い女である。

昔はよく家庭に舅や姑がゐてくれた方が、却つて嫁に色氣が出ると云つて、それを喜ぶ夫があつた。今日の新郎新婦は、親たちがあつても大概別居してしまふから、ちよつとさう云ふ心持ちは分りかねるかも知れないが、嫁が親たちに遠慮しつつ、蔭で夫に縋りつき、愛撫を求めようとする——つつましやかな態度のうち何んとなくそれが窺はれる——その様子に、多くの男は云ひ知れぬ魅惑を感じた。放縱で露骨なのよりも、内部に抑へつけられた愛情が、包まうとしても包み切れないで、ときどき無意識に、言葉づかひやしぐさの端に現はれるのが、一層男の心を惹いた。色氣と云ふのは蓋しさう云ふ愛情のニュアンスである。その表現が、ほのかな、弱々しいニュアンス以上に出て、積極的になればなるほど「色氣がない」とされたのである。

色氣は本來無意識のものであるから、生れつきそれが備はつた人と、さうでない人とがあつて、柄にない者がいくら色氣を出さうと努めても、唯いやらしく不自然になるばかりである。器量がよくつて色氣のない人もあれば、その反對に、顔は醜いが、聲音とか、皮膚の色とか、體つきとかに、不思議に色氣のある人がある。西洋でも一人々の女に就いて見ればさう云ふ區別はあるに違ひないけれども、化粧法や愛情の表現法が餘り技巧的であり、挑發的であるために、色氣の効果が消されてしまつてゐる場合が多い。

生れつき色氣のある人は勿論、たとひそれが乏しい人でも、心の奥にある愛情——或ひは慾情——を、出来るだけ包み隠して、一層奥の方へ押し込んでしまはうとする時に、却つてその心持ちが一種の風情を帯びて現はれる。さう云ふ點から考へると、女子を儒教的に、武士道的に教育すること、——即ち女大學流の貞女を作ると云ふことは、半面に於いて、最も色氣のある婦人を作ることだつたのである。

東洋の婦人は、姿態の美、骨格の美に於いて西洋に劣るけれども、皮膚の美しさ、肌理の細かさに於いては彼等に優つてゐると云はれる。これは私の浅い經驗でもさう思はれるのみならず、多くの通人の一致した意見であり、西洋人でも同感する者が少くないが、私は實はもう一步進めて、手ざはりの快感に於いても、(少くともわれわれ日本人に取つては)東洋の女が西洋に優つてゐると云ひたい。西洋の婦人の肉體は、色つやと云ひ、釣り合ひと云ひ、遠く眺める時は甚だ魅惑的であるけれども、近く寄ると、肌理が粗く、うぶ毛が

ぼうぼうと生えてゐたりして、案外お座が覺めることがある。それに、見たところでは四肢がスツキリしてゐるから、いかにも日本人の喜ぶ堅太りのやうに思へるのだが、實際に手足を掴んでみると、肉付きが非常に柔かたで、ぶくぶくしてゐて、手答へがなく、きゆつと引き締まつた、充實した感じが來ない。

つまり男の側から云ふと、西洋の婦人は抱擁するよりも、より多く見るに適したものであり、東洋の婦人はその反對であると云へる。私の知つてゐる限りでは、皮膚の滑かさ、肌理の細かさは支那婦人を以て第一とするが、日本人の肌も西洋人のそれに比べれば遙かにデリケートであつて、色は白皙でないとしても、或る場合にはその淺黄色を帯びたのが却つて深みを増し、含蓄を添へる。これは畢竟、源氏物語の古へから徳川時代に至る迄の習慣として、日本の男子は婦人の全身の姿を明るみでまざまざと眺める機會を與へられたことがなく、いつも蘭燈ほのぐらき聞のうちに、ほんの一部ばかりを手ざはりで愛撫したことから、自然に發達した結果であると考へられる。

クララ・ポウ流の「イット」と、女大學流の「色氣」と、孰方がいいかは人の好き好きに任せて置くべきことだけれども、しかし私に心配するのは、今日のやうなアメリカ式露出狂時代、——レヴユウが流行して女の裸體が一向珍しくも何んともない時代になつては、イットの魅力はだんだん失はれて行きはしないか。どんな美人でも素つ裸になる以上にムキ出しになることは出來ないのだから、裸體に對して皆が鈍感になつてしまへば、折角のイットも結局人を挑發しないやうになるであらう。

陰翳禮讚

○
今日、普請道樂の人が純日本風の家屋を建てて住まはうとすると、電気や瓦斯や水道等の取付け方に苦心を拂ひ、何とかしてそれらの施設が日本座敷と調和するやうに工夫を凝らす風があるのは、自分で家を建てた経験のない者でも、待合料理屋旅館等の座敷へ這入つてみれば常に氣が付くことであらう。獨りよがりの茶人などが科學文明の恩澤を度外視して、邊卑な田舎にても草庵を營むなら格別、苟くも相當の家族を擁して都會に住居する以上、いくら日本風にするからと云つて、近代生活に必要な煖房や照明や衛生の設備を斥ける譯には行かない。で、凝り性の人は電話一つ取り附けるにも頭を悩まして、梯子段の裏とか、廊下の隅とか、出来るだけ目障りにならない場所に持つて行く。その他庭の電線は地下線にし、部屋のスキツチは押入れや地袋の中に隠し、コードは屏風の蔭を這はす等、いろいろ考へた揚句、中には神經質に作爲をし過ぎて、却つてうるさく感ぜられるやうな場合もある。實際電燈などはもうわれ／＼の眼の方が馴れツこになつてしまつてゐるか

ら、なまじなことをするよりは、あの在來の乳白ガラスの浅いシェードを附けて、球をムキ出しに見せて置く方が、自然で、素朴な氣持ちもする。夕方、汽車の窓などから田舎の景色を眺めてゐる時、茅葺きの百姓家の障子の蔭に、今では時代おくれのしたあの浅いシェードを附けた電球がぼつんと燈つてゐるのを見ると、風流にさへ思へるのである。しかし扇風器などと云ふものになると、あの音響と云ひ形態と云ひ、未だに日本座敷とは調和しにくい。それも普通の家庭なら、イヤなら使はないでも濟むが、夏向き、客商賣の家などでは、主人の趣味にばかり媚びる譯に行かない。私の友人の偕樂園主人は随分普請に凝る方であるが、扇風器を嫌つて久しい間客間に取り附けずゐたところ、毎年夏になると客から苦情が出るために、結局我を折つて使ふやうになつてしまつた。かく云ふ私なども、先年身分不相應な大金を投じて家を建てた時、それに似たやうな經驗を持つてゐるが、細かい建具や器具の末まで氣にし出したら、種々な困難に行きあたる。たとへば障子一枚にしても、趣味から云へばガラスを嵌めたくないけれども、さうかと云つて、徹底的に紙ばかりを使はうとすれば、採光や戸締まり等の點で差支へが起る。よんどころなく内側を紙貼りにして、外側をガラス張りにする。さうするためには表と裏と棧を二重にする必要がある、従つて費用も嵩むのであるが、さてそんなにまでしてみても、外から見ればただのガラス戸であり、内から見れば紙のうしろにガラスがあるので、やはり本當の紙障子のやうなふつくらした柔かみがなく、イヤ味なものになりがちである。そのくらゐなら

ただのガラス戸にした方がよかつたと、やつとその時に後悔するが、他人の場合は笑へても、自分の場合は、そこまでやつてみないことには中々あきらめが付きにくい。近來電燈の器具などは、行燈式のもの、提燈式のもの、八方式のもの、燭臺式のもの等、日本座敷に調和するものがいろいろ賣り出されてゐるが、私はそれでも氣に入らないで、昔の石油ランプや有明行燈や枕行燈を古道具屋から捜して来て、それへ電球を取り付けたりした。分けても苦心したのは暖房の設計であつた。と云ふのは、凡そストーヴと名のつくもので日本座敷に調和するやうな形態のものは一つもない。その上瓦斯ストーヴはぼうぼう燃える音がするし、又煙突でも付けないことには直きに頭痛がして来るし、さう云ふ點では理想的だと云はれる電氣ストーヴにしても形態の面白くないことは同様である。電車を使つてゐるやうなヒーターを地袋の中へ取り付けるのは一策だけれども、やはり赤い火が見えなると、冬らしい氣分にならないし、家族の團欒にも不便である。私はいろ／＼智慧を絞つて、百姓家にあるやうな大きな爐を造り、中へ電氣炭を仕込んでみたが、これは湯を沸かすにも部屋を温めるにも都合がよく、費用が嵩むと云ふ點を除けば、様式としては先づ成功の部類であつた。で、暖房の方はそれでどうやら巧く行くけれども、次ぎに困るのは、浴室と廁である。借樂園主人は浴槽や流しにタイルを張ることを嫌がつて、お客用の風呂場を純然たる本造にしてゐるが、經濟や實用の點からは、タイルの方が萬々優つてゐることとは云ふ迄もない。たゞ、天井、柱、羽目板等に結構な日本材を使つた場合、一部分をあのケバケバしいタイルにしては、いかにも全體との映りが悪い。出来たてのうちはまだいいが、追ひ追ひ年數が経つて、板や柱に木目の味が出来た時分、タイルばかりが白くつるつるに光つてゐられたら、それこそ木に竹を接いだやうである。でも浴室は、趣味のために實用の方を幾分犠牲に供しても濟むけれども、廁になると、一層厄介な問題が起るのである。

○

私は、京都や奈良の寺院へ行つて、昔風の、うすぐらい、さうして而も掃除の行き届いた廁へ案内される毎に、つく／＼日本建築の有難みを感じる。茶の間もい／＼にはい／＼けれども、日本の廁は實に精神が安まるやうに出来てゐる。それらは必ず母屋おちやから離れて、青葉の匂ひや苔の匂ひのして来るやうな植ゑ込みの蔭に設けてあり、廊下を傳はつて行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうづくまつて、ほんのり明るい障子の反射を受けながら冥想に耽り、又は窓外の庭のけしきを眺める氣持ちは、何とも云へない。漱石先生は毎朝便通に行かれることを一つの樂しみに數へられ、それは寧ろ生理的快感であると云はれたさうだが、その快感を味はふ上にも、閑寂な壁と、清楚な木目に圍まれて、眼に青空や青葉の色を見ることの出来る日本の廁ほど、恰好な場所はあるまい。さうしてそれには、繰り返して云ふが、或る程度の薄暗さと、徹底的に清潔であることと、蚊の呻りさへ耳につ

くやうな静かさだが、必須の條件なのである。私はさう云ふ厠にあつて、しとくと降る雨の音を聴くのを好む。殊に關東の厠には、床に細長い掃き出し窓がついてゐるので、軒端や木の葉からしたゝり落ちる点滴が、石燈籠の根を洗ひ飛び石の苔を濕ほしつゝ土に沁み入るしめやかな音を、ひとしほ身に近く聴くことが出来る。まことに厠は蟲の音によく、鳥の聲によく、月夜にも亦ふさはしく、四季をりり物のあはれを味はふのに最も適した場所であつて、恐らく古來の俳人は此處から無數の題材を得てゐるであらう。されば日本の建築の中で、一番風流に出来てゐるのは厠であるとも云へなくはない。凡べてのものを詩化してしまふ我等の祖先は、住宅中で何處よりも不潔であるべき場所を、却つて雅致のある場所に變へ、花鳥風月と結び付けて、なつかしい聯想の中へ包むやうにした。これを西洋人が頭から不淨扱ひにし、公衆の前で口にすることをさへ忌むのに比べれば、我等の方が遙かに賢明であり、眞に風雅の骨髓を得てゐる。強ひて缺點を云ふならば、母屋から離れてゐるために、夜中に通ふには便利が悪く、冬は殊に風邪を引く憂ひがあることだけども、「風流は寒きものなり」と云ふ齋藤綠雨の言の如く、あゝ云ふ場所は外氣と同じ冷めたさの方が氣持ちがよい。ホテルの西洋便所で、スチームの温氣がして來るなどは寔にイヤなものである。ところで、數寄屋普請を好む人は、誰しも斯う云ふ日本流の厠を理想とするであらうが、寺院のやうに家の廣い割りに人數が少く、而も掃除の手が揃つてゐる所はいゝが、普通の住宅で、あゝ云ふ風に常に清潔を保つことは容易でない。取り分け床を板張りや畳にすると、禮儀作法をやかましく云ひ、雑巾がけを勵行しても、つい汚れが目立つのである。で、これも結局はタイルを張り詰め、水洗式のタンクや便器を取り付けて、淨化装置にするのが、衛生的でもあれば、手數も省けると云ふことになるが、その代り「風雅」や「花鳥風月」とは全く縁が切れてしまふ。彼處がそんな風にばつと明るくて、おまけに四方が眞つ白な壁だらけでは、漱石先生の所謂生理的快感を、心ゆく限り享樂する氣分になりにくい。成る程、隅から隅まで純白に見え渡るのだから確かに清潔には違ひないが、自分の體から出る物の落ち着き先について、さう迄念を押さずとものことである。いくら美人の玉の肌でも、お臀や足を人前へ出しては失禮であると同じやうに、あゝムキ出しに明るくするのは餘りと云へば無算千萬、見える部分が清潔であるだけ見えない部分の連想を挑發させるやうにもなる。やはりあゝ云ふ場所は、もや／＼とした薄暗がりの光線で包んで、何處から清淨になり、何處から不淨なるとも、けじめを朦朧とぼかして置いた方がよい。まあそんな譯で、私も自分の家を建てる時、淨化装置にはしたものの、タイルだけは一切使はぬやうにして、床には楠の板を張り詰め、日本風の感じを出すやうにしてみたが、さて困つたのは便器であつた。と云ふのは、御承知の如く、水洗式のもの皆眞つ白な磁器で出来てゐて、ピカピカ光る金屬製の把手などが附いてゐる。せんだい私の註文を云へば、あの器は、男子用のも、女子用のも、木製の奴が一番いい。蠟塗りにしたのは最も結構だが、木地のまゝでも、年月を経るうちには適當に黒ず

んで来て、木目が魅力を持つやうになり、不思議に神経を落ち着かせる。分けてもあの、木製の朝顔に青々とした杉の葉を詰めたのは、眼に快いばかりでなく些の音響をも立てない點で理想的と云ふべきである。私はあゝ云ふ贅澤な真似は出来ない迄も、せめて自分の好みに叶つた器を造り、それへ水洗式を應用するやうにしてみたいと思つたのだが、さう云ふものを特別に誂へると、餘程の手間と費用が懸るのであきらめるより外はなかつた。そしてその時に感じたのは、照明にしる、煖房にしる、便器にしる、文明の利器を取り入れるのに勿論異議はないけれども、それならそれで、なせもう少しわれわれの習慣や趣味生活を重んじ、それに順應するやうに改良を加へないのであらうか、と云ふ一事であつた。

○

既に行燈式の電燈が流行り出して來たのは、われわれが一時忘れてゐた「紙」と云ふものを持つ柔かみと温かみに再び眼ざめた結果であり、それの方がガラスよりも日本家屋に適することを認めて來た證據であるが、便器やストーヴは、今以てしつくり調和するやうな形式のものが賣り出されてゐない。煖房は私が試みたやうに爐の中へ電氣炭を仕込むのが一番いゝやうに思ふけれども、かゝる簡単な工夫をすら施さうとする者がなく、(貧弱な電氣火鉢と云ふものはあるが、あれは煖房の用をなさないこと、普通の火鉢と同じである。)

出來合ひの品と云へば、皆あの不恰好な西洋風の煖爐である。が、かう云ふ些末な衣食住の趣味について彼れ此れと氣を遣ふのは贅澤である、寒暑や飢餓を凌ぐにさへ足りれば様式などは問ふ所でないと思ふ人もあらう。事實、いくら瘦せ我慢をしてみても「雪の降る日は寒くこそあれ」で眼前に便利な器具があれば、風流不風流を論じてゐる暇はなく、滔滔としてその恩澤に浴する氣になるのは、已むを得ない趨勢であるけれども、私はそれを見るにつけても、もし東洋に西洋とは全然別箇の、独自の科學文明が發達してゐたならば、どんなにわれわれの社會の有様が今日とは違つたものになつてゐたであらうか、と云ふことを常に考へさせられるのである。たとへば、もしわれわれがわれわれ独自の物理學を有し、化學を有してゐたならば、それに基づく技術や工業も亦自ら別様の發展を遂げ、日用百般の機械でも、藥品でも、工藝品でも、もつとわれわれの國民性に合致するやうな物が生れてはゐなかつたであらうか。いや、恐らくは、物理學そのもの、化學そのものの原理さへも、西洋人の見方とは違つた見方をし、光線とか、電氣とか、原子とかの本質や性能について、今われわれが教へられてゐるやうなものとは、異つた姿を露呈してゐたかも知れないと思はれる。私にはさう云ふ學理的のことは分らないから、たゞぼんやりとそんな想像を逞しうするだけであるが、しかし少くとも、實用方面の發明が獨創的の方向を辿つてゐたとしたならば、衣食住の様式は勿論のこと、引いてはわれらの政治や、宗教や、藝術や、實業等の形態にもそれが廣汎な影響を及ぼさない筈はなく、東洋は東洋で別箇の

乾坤を打開したであらうことは、容易に推測し得られるのである。卑近な例を取つてみると、私は嘗て「文藝春秋」に萬年筆と毛筆との比較を書いたが、假りに萬年筆と云ふものを昔の日本人か支那人が考案したとしたならば、必ず穂先をペンにしないで毛筆にしたであらう。そしてインキもあゝ云ふ青い色でなく、墨汁に近い液體にして、それが軸から毛の方へ滲み出るやうに工夫したであらう。さすれば、紙も西洋紙のやうなものでは不便であるから、大量生産で製造するとしても、和紙に似た紙質のもの、改良半紙のやうなものが最も要求されたであらう。紙や墨汁や毛筆がさう云ふ風に發達してゐたら、ペンやインキが今日の如き流行を見ることはなかつたであらうし、従つて又ローマ字論などが幅を利かすことも出来まいし、漢字や假名文字に對する一般の愛着も強かつたであらう。いや、そればかりでない、我等の思想や文學さへも、或ひはかうまで西洋を模倣せず、もつと獨創的な新天地へ突き進んでゐたかも知れない。斯く考へて來ると、些細な文房具ではあるが、その影響の及ぶところは無邊際に大きいのである。

○

さう云ふことを考へるのは小説家の空想であつて、もはや今日になつてしまつた以上、もう一度逆戻りをしてやり直す譯に行かないことは分りきつてゐる。だから私の云ふことは、今更不可能事を願ひ、愚痴をこぼすのに過ぎないのであるが、愚痴は愚痴として、兎に角我等が西洋人に比べてどのくらゐ損をしてゐるか云ふことは、考へてみても差支へあるまい。つまり、一口に云ふと、西洋の方は順當な方向を辿つて今日に到達したのであり、我等の方は、優秀な文明に逢着してそれを取り入れざるを得なかつた代りに、過去數千年來發展し來つた進路とは違つた方向へ歩み出すやうになつた、そこからいろ／＼な故障や不便が起つてゐると思はれる。尤もわれ／＼を放つておいたら、五百年前も今日も物質的には大した進展をしてゐなかつたかも知れない。現に支那や印度の田舎へ行けば、お釋迦様や孔子様の時代とあまり變らない生活をしてゐるでもあらう。だがそれにしても自分たちの性に合つた方向だけは取つてゐたであらう。そして緩漫にはあるが、いくらかづつの進歩をつゞけて、いつかは今日の電車や飛行機やラヂオに代るもの、それは他人の借り物でない、ほんたうに自分たちに都合のいゝ文明の利器を發見する日が來なかつたとは限るまい。早い話が、映畫を見ても、アメリカのもの、佛蘭西や獨逸のものとは、陰翳や、色調の工合が違つてゐる。演技とか脚色とかは別にして、寫真面だけで、何處かに國民性の差異が出てゐる。同一の機械や藥品やフィルムを使つても猶且さうなのであるから、われ／＼に固有の寫眞術があつたら、どんなにわれ／＼の皮膚や容貌や氣候風土に適したものであつたかと思ふ。蓄音器やラヂオにしても、もしわれ／＼が發明したなら、もつとわれ／＼の聲や音樂の特長を生かすやうなものが出來たであらう。元來われ／＼の音樂は、控へ目なものであり、氣分本位のものであるから、レコードにしたり、擴聲器で

大きくしたりしたのでは、大半の魅力が失はれる。話術にしてもわれ／＼の方のは聲が小さく、言葉数が少く、さうして何よりも「間」が大切なのであるが、機械にかけたら「間」は完全に死んでしまふ。そこでわれ／＼は、機械に迎合するやうに、却つてわれ／＼の藝術自體を歪めて行く。西洋人の方は、もと／＼自分たちの間で發達させた機械であるから、彼等の藝術に都合がいゝやうに出來てゐるのは當り前である。さう云ふ點で、われわれは實にいろ／＼の損をしてゐると考へられる。

○
紙と云ふものは支那人の發明であると聞くが、われ／＼は西洋紙に對すると、單なる實用品と云ふ以外に何の感じも起らないけれども、唐紙や和紙の肌理を見ると、そこに一種の温かみを感じ、心が落ち着くやうになる。同じ白いのでも、西洋紙の白さと奉書や白唐紙の白さとは違ふ。西洋紙の肌は光線を撥ね返すやうな趣があるが、奉書や唐紙の肌は、柔かい初雪の面のやうに、ふつくらと光線の中へ吸ひ取る。さうして手ざはりがしなやかであり、折つても疊んでも音を立てない。それは木の葉に觸れてゐるのと同じやうに物靜かで、しつとりしてゐる。せんたいわれ／＼は、ピカピカ光るものを見ると心が落ち着かないのである。西洋人は食器などにも銀や鋼鐵やニッケル製のものを用ひて、ピカピカ光る様に研き立てるが、われ／＼はあゝ云ふ風に光るものを嫌ふ。われ／＼の方でも、湯沸し

や、杯や、銚子等に銀製のものを用ひることはあるけれども、あゝ云ふ風に研き立てない。却つて表面の光りが消えて、時代がつき、黒く焼けて來るのを喜ぶのであつて、心得のない下女などが、折角さびの乗つて來た銀の器をピカピカに研いたりして、主人に叱られることがあるのは、何處の家庭でも起る事件である。近來、支那料理の食器は一般に錫製のものが使はれてゐるが、恐らく支那人はあれが古色を帯びて來るのを愛するのであらう。新しい時はアルミニウムに似た、あまり感じのいゝものではないが、支那人が使ふとあゝ云ふ風に時代をつけ、雅味のあるものにしてしまはなければ承知しない。そしてあの表面に詩の文句などが彫つてあるのも、肌が黒ずんで來るに従ひ、しつくりと似合ふやうになる。つまり支那人の手にかゝると、薄ッぺらでピカピカする錫と云ふ輕金屬が、朱泥のやうに深みのある、沈んだ、重々しいものになるのである。支那人は又玉と云ふ石を愛するが、あの、妙に薄濁りのした、幾百年もの古い空氣が一つに凝結したやうな、奥の方までどろんとした鈍い光りを含む石のかたまりに魅力を感じるのは、われ／＼東洋人だけではないであらうか。ルビーやエメラルドのやうな色彩があるのでもなければ、金剛石のやうな輝きがあるのでもないあゝ云ふ石の何處に愛着を感じるのか、私たちにもよく分らないが、しかしあのどんよりした肌を見ると、いかにも支那の石らしい氣がし、長い過去を持つ支那文明の滓があの厚みのある濁りの中に堆積してゐるやうに思はれ、支那人があゝ云ふ色澤や物質を嗜好するのに不思議はないと云ふことだけは、領ける。水晶な

どにしても、近頃は智利から澤山輸入されるが、日本の水晶に比べると、智利のはあまりきれいに透きとほり過ぎてゐる。昔からある甲州産の水晶と云ふものは、透明な中にも、全體にほんのりとした曇りがあつて、もつと重々しい感じがするし、草入り水晶などと云つて、奥の方に不透明な固形物の混入してゐるのを、寧ろわれ／＼は喜ぶのである。ガラスでさへも、支那人の手に成つた乾隆ガラスと云ふものは、ガラスと云ふよりも玉か瑪瑙に近いではないか。玻璃を製造する術は早くから東洋にも知られてゐながら、それが西洋のやうに發達せずに終り、陶器の方が進歩したのは、餘程われ／＼の國民性に關係する所があるに違ひない。われ／＼は一概に光るものが嫌ひと云ふ譯ではないが、淺く冴えたものよりも、沈んだ翳りのあるものを好む。それは天然の石であらうと、人工の器物であらうと、必ず時代のつやを連想させるやうな、濁りを帯びた光りなのである。尤も時代のつやなどと云ふとよく聞えるが、實を云へば手垢の光りである。支那に「手澤」と云ふ言葉があり、日本に「なれ」と云ふ言葉があるのは、長い年月の間に、人の手が觸つて、一所をつる／＼撫でてゐるうちに、自然と脂が沁み込んで來るやうになる、そのつやを云ふのだらうから、云ひ換へれば手垢に違ひない。して見れば、「風流は寒きもの」であると同じ時に、「むさきものなり」と云ふ警句も成り立つ。兎に角われ／＼の喜ぶ「雅致」と云ふものの中には幾分の不潔、且非衛生的分子があることは否まれない。西洋人は垢を根こそぎ發き立て、取り除かうとするのに反し、東洋人はそれを大切に保存して、そのまゝ美化す

る、と、まあ負け惜しみを云へば云ふところだが、因果なことに、われ／＼は人間の垢や油煙や風雨のよごれが附いたもの、乃至はそれを想ひ出させるやうな色あひや光澤を愛し、さう云ふ建物や器物の中に住んでゐると、奇妙に心が和やいで來、神経が安まる。それで私はいつも思ふのだが、病院の壁の色や手術服や醫療機械なんかも、日本人を相手にする以上、あゝピカピカするものや眞つ白なものばかり並べないで、もう少し暗く、柔かみを附けたらどうであらう。もしあの壁が砂壁か何かで、日本座敷の疊の上に臥ながら治療を受けるのであつたら、患者の興奮が靜まることは確かである。われ／＼が齒醫者へ行くのを嫌ふのは、一つにはがり／＼と云ふ音響にも因るが、一つにはガラスや金屬製のピカピカする物が多過ぎるので、それに怯えるせもある。私は神經衰弱の激しかつた時分、最新式の設備を誇るアメリカ歸りの齒醫者と聞くと、却つて恐毛をふるつたものだけだ。そして田舎の小都會などにある、昔風の日本家屋に手術室を設けた、時代後れのしたやうな齒醫者の所へ好んで出かけた。さうかと云つて、古色を帯びた醫療機械なんかも困ることは困るが、もし近代の醫術が日本で成長したのであつたら、病人を扱ふ設備や機械も、何とか日本座敷に調和するやうに考案されてゐたであらう。これもわれ／＼が借り物のために損をしてゐる一つの例である。

京都に「わらんじや」と云ふ有名な料理屋があつて、こゝの家では近頃まで客間に電燈をともさず、古風な燭臺を使ふのが名物になつてゐたが、ことしの春、久しぶりで行つてみると、いつの間にか行燈式の電燈を使ふやうになつてゐる。いつからかうしたのかと聞くと、去年から此れにいたしました、蠟燭の灯では餘り暗すぎると仰つしやるお客様が多いものでござりますから、據んどころなく斯う云ふ風に致しましたが、やはり昔のまゝの方がよいと仰つしやるお方には、燭臺を持つて参りますと云ふ。で、折角それを樂しみにして來たのであるから、燭臺に替へて貰つたが、その時私が感じたのは、日本の漆器の美しさは、さう云ふぼんやりした薄明りの中に置いてこそ、始めてほんたうに發揮されると云ふことであつた。「わらんじや」の座敷と云ふのは四疊半ぐらゐの小じんまりした茶席であつて、床柱や天井なども黒光りに光つてゐるから、行燈式の電燈でも勿論暗い感じがする。が、それを一層暗い燭臺に改めて、その穂のゆら／＼とまた／＼く蔭にある膳や椀を視詰めてゐると、それらの塗り物の沼のやうな深さと厚みとを持つたつやが、全く今迄とは違つた魅力を帯び出して來るのを發見する。そしてわれ／＼の祖先がうるしと云ふ塗料を見出し、それを塗つた器物の色澤に愛着を覺えたことの偶然でないのを知るのである。友人サバル君の話に、印度では現在でも食器に陶器を使ふことを卑しき、多くは塗り物を用ひると云ふ。われ／＼はその反對に、茶事とか、儀式とかの場合でなければ、膳と吸ひ物椀の外は殆んど陶器ばかりを用ひ、漆器と云ふと、野暮くさい、雅味のないものにさ

れてしまつてゐるが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「明るさ」のせゐではないであらうか。事實、「闇」を條件に入れないければ漆器の美しさは考へられないと云つていい。今日では白漆と云ふやうなものも出來たけれども、昔からある漆器の肌は、黒か、茶か、赤であつて、それは幾重もの「闇」が堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生れ出たものゝやうに思へる。派手な蒔繪などを施したピカピカ光る蠟塗りの手箱とか、文臺とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさへ思へることがあるけれども、もしそれらの器物を取り圍む空白を眞つ黒な闇で塗り潰し、太陽や電燈の光線に代へるに一點の燈明か蠟燭のあかりにして見給へ、忽ちそのケバケバしいものが底深く沈んで、濛い、重々しいものになるであらう。古への工藝家がそれらの器に漆を塗り、蒔繪を畫く時は、必ずさう云ふ暗い部屋を頭に置き、乏しい光りの中に於ける効果を狙つたのに違ひなく、金色を贅澤に使つたりしたのも、それが闇に浮かび出る工合や、燈火を反射する加減を考慮したものと察せられる。つまり金蒔繪は明るい所で一度にばつとその全體を見るものではなく、暗い所でいろ／＼の部分がとき／＼少しづつ底光りするのを見るやうに出來てゐるのであつて、豪華絢爛な模様の大半を闇に隠してしまつてゐるのが、云ひ知れぬ餘情を催すのである。そして、あのピカピカ光る肌をつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、靜かな部屋にもをり／＼風のおとづれのあることを教へて、そゞろに人を冥想に誘ひ込む。もしあの陰鬱

な室内に漆器と云ふものがなかつたなら、蠟燭や燈明の醸し出す怪しい光りの夢の世界が、その灯のはためきが打つてゐる夜の脈搏が、どんなに魅力を滅殺されることであらう。まことにそれは、壘の上に幾すぢもの小川が流れ、池水が湛へられてゐる如く、一つの灯影を此處彼處に捉へて、細く、かそけく、ちら／＼と傳へながら、夜そのものに蒔繪をしたやうな綾を織り出す。蓋し食器としては陶器も悪くないけれども、陶器には漆器のやうな陰翳がなく、深みがない。陶器は手に觸れると重く冷めたく、而も熱を傳へることが早いので熱い物を盛るのに不便であり、その上カチカチと云ふ音がするが、漆器は手ざりが軽く、柔かで、耳につく程の音を立てない。私は、吸ひ物椀を手に持つた時の、掌が受ける汁の重みの感覺と、生あたゝかい温味ぬくみとを何よりも好む。それは生れたての赤ん坊のぶよ／＼した肉體を支へたやうな感じでもある。吸ひ物椀に今も塗り物が用ひられるのは全く理由のあることであつて、陶器の容れ物ではあゝは行かない。第一、蓋を取つた時に、陶器では中にある汁の身や色合ひが皆見えてしまふ。漆器の椀のいゝことは、先づその蓋を取つて、口に持つて行く迄の間、暗い奥深い底の方に、容器の色と殆んど違はない液體が音もなく澱んでゐるのを眺めた瞬間の氣持である。人は、その椀の中の闇に何かあるかを見分けることは出来ないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上を感じ、椀の縁ふちがほんのり汗を掻いてゐるので、そこから湯氣が立ち昇りつゝあることを知り、その湯氣が運ぶ匂ひに依つて口に啣む前にほんやり味はひを豫覺する。その瞬間の心持ち、スープを淺

い白ちやけた皿に入れて出す西洋流に比べて何と云ふ相違か。それは一種の神秘であり、禪味であるとも云へなくはない。

私は、吸ひ物椀を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁むやうにジイと鳴つてゐる、あの遠い蟲の音のやうなおとを聴きつゝ此れから食べる物の味はひに思ひをひそめる時、いつも自分分が三昧境に惹き入れられるのを覺える。茶人が湯のたぎるおとに尾上の松風を連想しながら無我の境に入ると云ふのも、恐らくそれに似た心持ちなのであらう。日本の料理は食ふものでなくて見るものだと云はれるが、かう云ふ場合、私は見るものである以上に冥想するものであると云はう。さうしてそれは、闇にまた／＼蠟燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音樂の作用なのである。嘗て漱石先生は「草枕」の中で羊羹の色を讚美してをられたことがあつたが、さう云へばあの色などは矢張り瞑想的ではないか。玉ぎよくのやうに半透明に曇つた肌が、奥の方まで日の光りを吸ひ取つて夢みる如きほの明るさを啣んでゐる感じ、あの色あひの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶對に見られない。クリームなどはあれに比べると何と云ふ淺はかさ、單純さであらう。だがその羊羹の色あひも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしほ瞑想的になる。人はあの冷めたく滑かなものを口中にふくむ時、恰も室内の暗黒が一個の甘い塊

になつて舌の先で融けるのを感じ、ほんたうはさう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添はるやうに思ふ。蓋し料理の色あひは何處の國でも食器の色や壁の色と調和するやうに工夫されてゐるのであらうが、日本料理は明るい所で白ツちやけた器で食べては慥かに食欲が半減する。たとへばわれ／＼が毎朝たべる赤味噌の汁なども、あの色を考へると、昔の薄暗い家の中で發達したものであることが分る。私は或る茶會に呼ばれて味噌汁を出されたことがあつたが、いつもは何でもなくたべてゐたあのどろ／＼の赤土色をした汁が、覺束ない蠟燭のあかりの下で、黒うるしの椀に澱んでゐるのを見ると、實に深みのある、うまさうな色をしてゐるのであつた。その外醬油などにしても、上方では刺身や漬物やおひたしには濃い口の「たまり」を使ふが、あのねつとりとしたつやのある汁がいかにか陰翳に富み、闇と調和することか、又白味噌や、豆腐や、蒲鉾や、とろ／＼汁や、自身の刺身や、あゝ云ふ白い肌のものも、周囲を明るくしたのでは色が引き立たない。第一飯にしてからが、ぴか／＼光る黒塗りの飯櫃に入れられて、暗い所に置かれてゐる方が、見ても美しく、食欲をも刺戟する。あの、炊きたての眞つ白な飯が、ぱつと蓋を取つた下から燦かさうな湯氣を吐きながら黒い器に盛り上つて、一と粒一と粒眞珠のやうにかゞやいてゐるのを見る時、日本人なら誰しも米の飯の有難さを感じるであらう。かく考へて來ると、われわれの料理が常に陰翳を基調とし、闇と云ふものと切つても切れぬない關係にあることを知るのである。

○
私は建築のことについては全く門外漢であるが、西洋の寺院のゴシック建築と云ふものは屋根が高く／＼尖つて、その先が天に沖せんとしてゐるところに美觀が存するのだと云ふ。これに反してわれ／＼の國の伽藍では建て物の上に先づ大きな甍を伏せて、その庇ひさしが作り出す深い廣い蔭の中へ全體の構造を取り込んでしまふ。寺院のみならず、宮殿でも、庶民の住宅でも、外から見て最も眼立つものは、或る場合には瓦葺き、或る場合には茅葺きの大きな屋根と、その庇の下にただよふ濃い闇である。時とすると、白晝と雖も軒から下には洞穴のやうな闇が繞つてゐて戸口も扉も壁も柱も殆んど見えないことすらある。これは智恩院や本願寺のやうな宏壯な建築でも、草深い田舎の百姓家でも同様であつて、昔の大概な建て物が軒から下と軒から上の屋根の部分とを比べると、少くとも眼で見たところでは、屋根の方が重く、堆く、面積が大きく感ぜられる。左様にわれ／＼が住居を營むには、何よりも屋根と云ふ傘を擴げて大地に一廓の日かげを落とし、その薄暗い陰翳の中の家造りをする。もちろん西洋の家屋にも屋根がない譯ではないが、それは日光を遮蔽するよりも雨露をしのぐための方が主であつて、蔭はなるべく作らないやうにし、少しでも多く内部を明りに曝すやうにしてゐることは、外形を見ても領かれる。日本の屋根を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。而も烏打帽子のやうに出来るだけ鍔を小さくし、日

光の直射を近々と軒端に受ける。蓋し日本家の屋根の庇が長いのは、氣候風土や、建築材料や、その他いろ／＼の關係があるのであらう。たとへば煉瓦やガラスやセメントのやうなものを使はないところから、横なぐりの風雨を防ぐためには庇を深くする必要があつたであらうし、日本人とて暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違ひないが、是非なくあつたのでもあらう。が、美と云ふものは常に生活の實際から發達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれ／＼の先祖は、いつしか陰翳のうちに、美を發見し、やがては美の目的に添ふやうに陰翳を利用するに至つた。事實、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依つて生れてゐるので、それ以外に何も無い。西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、唯灰色の壁があるばかりで何の裝飾もないと云ふ風に感じるのは、彼等としてはいかさま尤もであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。われ／＼は、それでなくても太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むやうにする。われ／＼の座敷の美の要素は、此の間接の鈍い光線に外ならない。われ／＼は、此の力の無い、わびしい、果敢ない光線が、しんみり落ち着いて座敷の壁へ沁み込むやうに、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。土藏とか、厨とか、廊下のやうなところへ塗るには照りをつけるが、座敷の壁は殆んど砂壁で、めつたに光らせない。もし光らせたら、その乏しい光線の、柔かい弱い味が消える。われ等は何處までも、見るからにおぼ

つかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも餘命を保つてゐる、あの繊細な明るさを樂しむ。我等に取つては此の壁の上の明るさ或ひはほのぐらさが何物の裝飾にも優るのであり、しみ／＼と見飽きがしないのである。さればそれらの砂壁がその明るさを亂さないやうに唯一と色の無地に塗つてあるのも當然であつて、座敷毎に少しづつ地色は違ふけれども、何とその違ひの微かであることよ。それは色の違ひと云ふよりもほんの僅かな濃淡の差異、見る人の氣分の相違と云ふ程のものでしかない。而もその壁の色のほのかな違ひに依つて、又幾らかづつ各々の部屋の陰翳が異なつた色調を帯びるのである。尤も我等の座敷にも床の間と云ふものがあつて、掛け軸を飾り花を活けるが、しかしそれらの軸や花もそれ自體が裝飾の役をしてゐるよりも、陰翳に深みを添へる方が主になつてゐる。われらは一つの軸を掛けるにも、その軸物とその床の間の壁との調和、即ち「床うつり」を第一に貴ぶ。われらが掛け軸の内容を成す書や繪の巧拙と同様の重要さを裱具に置くのも、實にその爲めであつて、床うつりが悪かつたら如何なる名書畫も掛け軸としての價値がなくなる。それと反對に一つの獨立した作品としては大した傑作でもないやうな書畫が、茶の間の床に掛けてみると、非常にその部屋との調和がよく、軸も座敷も俄かに引き立つ場合がある。そしてさう云ふ書畫、それ自身としては格別のものでもない軸物の何處が調和するのかと云へば、それは常にその地紙や、墨色や、裱具の裂が持つてゐる古色にあるのだ。その古色がその床の間や座敷の暗さと適宜な釣り合ひを保つのだ。われ／＼

はよく京都や奈良の名刹を訪ねて、その寺の寶物と云はれる軸物が、奥深い大書院の床の間にかゝつてゐるのを見せられるが、さう云ふ床の間は大概畫も薄暗いので、圖柄などは見分けられない、唯案内人の説明を聞きながら消えかゝつた墨色のあとを辿つて多分立派な繪なのであらうと想像するばかりであるが、しかしそのぼやけた古畫と暗い床の間との取り合はせが如何にもしつくりしてゐて、圖柄の不鮮明などは聊かも問題でないばかりか、却つてこのくらゐな不鮮明さがちやうど適してゐるやうにさへ感じる。つまり此の場合、その繪は覺束ない弱い光りを受け留めるための一つの奥床しい「面」に過ぎないのであつて、全く砂壁と同じ作用をしかしてゐないのである。われが掛け軸を擇ぶのに時代や「さび」を珍重する理由は此處にあるので、新畫は水墨や淡彩のものでも、餘程注意しないと床の間の陰翳を打ち壊すのである。

○
もし日本座敷を一つの墨繪に喩へるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は、數寄を凝らした日本座敷の床の間を見る毎に、いかに日本人が陰翳の祕密を理解し光りと蔭との使ひ分けに巧妙であるかに感嘆する。なせなら、そこには此れと云ふ特別なしつらへがあるのではない。要するに唯清楚な木材と清楚な壁とを以て一つの回んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みの此處彼處へ朦朧たる隈

を生むやうにする。にも拘らず、われらは落懸おとしがけのうしろや、花活の周圍や、違ひ棚の下などを填めてゐる闇を眺めて、それが何でもない蔭であることを知りながらも、その空氣だけがシーンと沈み切つてゐるやうな、永劫不變の閑寂がその暗がりを領してゐるやうな感銘を受ける。思ふに西洋人の云ふ「東洋の神祕」とは、斯くの如き暗がりを持つ無氣味な靜かさを指すのであらう。われらと雖も少年の頃は、日の目の届かぬ茶の間や書院の床の間の奥を視つめると、云ひ知れぬ怖れと寒けを覺えたものである。而もその神祕の鍵は何處にあるか。種明かしをすれば、畢竟それは陰翳の魔法であつて、もし隅々に作られてゐる蔭を追ひ除けてしまつたら、忽焉としてその床の間は唯の空白に歸するのである。われらの祖先の天才は、虚無の空間を任意に遮蔽して自ら生ずる陰翳の世界に、いかなる壁畫や裝飾にも優る幽玄味を持たせたのである。これは簡單な技巧のやうであつて、實は中容易でない。たとへば床脇の窓の切り方、落懸の深さ、床框の高さなど、一つ一つに眼に見えぬ苦心が拂はれてゐることは推察するに難くないが、分けても私は、書院の障子のしろくとしたほの明るさには、ついその前に立ち止まつて時の移るのを忘れるのである。元來書院と云ふものは、昔はその名の示す如く彼處で書見をするためにあゝ云ふ窓を設けたのが、いつしか床の間の明り取りとなつたのであらうが、多くの場合、それは明り取りと云ふよりも、むしろ側面から射して來る外光を一旦障子の紙で濾過して、適當に弱める働きをしてゐる。まことにあの障子の裏に照り映えてゐる逆光線の明りは、何と云ふ

寒々とした、わびしい色をしてゐることか。庇をくぐり、廊下を通つて、やう／＼そこま
で辿り着いた庭の陽光は、もはや物を照らし出す力もなくなり、血の氣も失せてしまつた
かのやうに、ただ障子の紙の色を白々と際立たせてゐるに過ぎない。私はしば／＼あの障
子の前に佇んで、明るいけれども少しも眩ゆさの感じられない紙の面を視つめるのである
が、大きな伽藍建築の座敷などでは、庭との距離が遠いためにいよ／＼光線が薄められて、
春夏秋冬、晴れた日も、曇つた日も、朝も、晝も、夕も、殆んどそのほのじろさに變化が
ない。そして縦繁の障子の棧のひとコマ毎に出來てゐる隈が、恰も塵が溜まつたやうに、
永久に紙に沁み着いて動かないのかと訝しまれる。さう云ふ時、私はその夢のやうな明る
さをいぶかりながら眼をしばたたく。何か眼の前にもや／＼とかけろふものがあつて、視
力を鈍らせてゐるやうに感ずる。それはそのほのじろい紙の反射が、床の間の濃い闇を追
ひ拂ふには力が足らず、却つて闇に弾ね返されながら、明暗の區別のつかぬ昏迷の世界を
現じつゝあるからである。諸君はさう云ふ座敷へ這入つた時に、その部屋にただようてゐ
る光線が普通の光線とは違ふやうな、それが特に有難味のある重々しいもののやうな氣持
ちがしたことはないであらうか。或ひは又、その部屋にゐると時間の経過が分らなくなつ
てしまひ、知らぬ間に年月が流れて、出て來た時は白髪の老人になりはせぬかと云ふやう
な、「悠久」に對する一種の怖れを抱いたことはないであらうか。

○

諸君は又さう云ふ大きな建物の、奥の奥の部屋へ行くと、もう全く外の光りが届かなくな
つた暗がりの中にある金襴や金屏風が、幾間を隔てた遠い／＼庭の明りの穂先を捉へて、
ぼうつと夢のやうに照り返してゐるのを見たことはないか。その照り返しは、夕暮れの地
平線のやうに、あたりの闇へ實に弱々しい金色の明りを投げてゐるのであるが、私は黄金
と云ふものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思ふ。そして、その前を通り過ぎ
ながら幾度も振り返つて見直すことがあるが、正面から側面の方へ歩を移すに随つて、金
地の紙の表面がゆつくりと大きく底光りする。決してちら／＼と忙がしい瞬きをせず、巨
人が顔色を變へるやうに、きらりと、長い間を置いて光る。時とすると、たつた今まで眠
つたやうな鈍い反射をしてゐた梨地の金が、側面へ廻ると、燃え上るやうに耀やいてゐる
のを發見して、こんなに暗い所でどうしてこれだけの光線を集めることが出來たのかと、
不思議に思ふ。それで私には昔の人が黄金を佛の像に塗つたり、貴人の起居する部屋の四
壁へ張つたりした意味が、始めて領けるのである。現代の人は明るい家に住んでゐるので、
かう云ふ黄金の美しさを知らない。が、暗い家に住んでゐた昔の人は、その美しい色に魅
せられたばかりでなく、かねて實用的價值をも知つてゐたのであらう。なせなら光線の乏
しい屋内では、あれがレフレクターの役目をしたに違ひないから。つまり彼等はただ贅澤

に黄金の箔や砂子を使つたのではなく、あれの反射を利用して明りを補つたのであらう。さうだとすると、銀やその他の金属は直きに光澤が褪せてしまふのに、長く耀やきを失はないで室内の闇を照らす黄金と云ふものが、異様に貴ばれたであらう理由を會得することが出来る。私は前に、蒔繪と云ふものは暗い所で見て貰ふやうに作られてゐることを云つたが、かうしてみると、嘗に蒔繪ばかりではない、織物などでも昔のものに金銀の糸がふんだんに使つてゐるのは、同じ理由に基くことが知れる。僧侶が纏ふ金襴の袈裟などは、その最もいい例ではないか。今日町中まちなかにある多くの寺院は大概本堂を大衆向きに明るくしてゐるから、あゝ云ふ場所では徒らにケバケバしいばかりで、どんな人柄な高僧が着てゐても有難味を感じることはめつたにないが、由緒あるお寺の古式に則つた佛事に列席してみると、皺だらけな老僧の皮膚と、佛前の燈明の明滅と、あの金襴の地質とが、いかによく調和し、いかに莊嚴味を増してゐるかが分るのであつて、それと云ふのも、蒔繪の場合と同じやうに、派手な織り模様を大部分を闇が隠してしまひ、ただ金銀の糸がとき／＼少しづつ光るやうになるからである。それから、これは私一人だけの感じであるかも知れないが、凡そ日本人の皮膚に能衣裳ほど映りのいいものはないと思ふ。云ふ迄もなくあの衣裳には随分絢爛なものが多く、金銀が豊富に使つてあり、而もそれを着て出る能役者は、歌舞伎俳優のやうにお白粉を塗つてはゐるのであるが、日本人特有の根あかみがかつた褐色の肌、或ひは黄色味をふくんだ象牙色の地顔があんなに魅力を発揮する時はないのであつ

て、私はいつも能を見に行く度毎に感心する。金銀の織り出しや刺繡のある桂うきの類もよく似合ふが、濃い緑色や柿色の素襖、水干、狩衣の類、白無地の小袖、大口等も實によく似合ふ。たま／＼それが美少年の能役者だと、肌理のこまかい、若々しい照りを持つた頬の色つやなどがそのためにひとしほ引き立てられて、女の肌とは自ら違つた盪惑を含んでゐるやうに見える、成る程昔の大名が寵童の容色に溺れたと云ふのは此處のことだなど、合點が行く。歌舞伎の方でも時代物や所作事の衣裳の華美なことは能樂のそれに劣らないし、性的魅力の點にかけては此の方が遙かに能樂以上とされてゐるけれども、兩方をたび／＼見馴れて來ると、事實はその反對であることに氣が付くであらう。一寸見た時は歌舞伎の方がエロティックでもあり、綺麗でもあるのに論はないが、昔は兎に角、西洋流の照明を使ふやうになつた今日の舞臺では、あの派手な色彩がやゝともすると俗惡に陥り、見飽きがする。衣裳もさうなら、化粧とてもさうであつて、假りに美しいとしてからが、それが何處までも作つた顔であつてみれば、生地なまめの美しさのやうな實感が伴はない。然るに能樂の俳優は、顔も、襟も、手も、生地なまめのままに登場する。されば眉目のなまめかしさはその人本來のものであつて、毫もわれ／＼の眼を欺いてゐるのではない。故に能役者の場合は女形や二枚目の素顔に接してお座がさめたと云ふやうなことは有り得ない。唯われ／＼の感じることとは、われ／＼と同じ色の皮膚を持つた彼等が一見似合ひさうにもない武家時代の派手な衣裳を着けた時に如何にその容色が水際立つて見えるかと云ふ一事である。嘗

て私は、「皇帝」の能で楊貴妃に扮した金剛巖氏を見たことがあつたが、袖口から覗いてゐるその手の美しかつたことを今も忘れない。私は彼の手を見ながら、しばし膝の上に置いた自分の手を省みた。そして、彼の手がそんなにも美しく見えるのは、手頸から指先に至る微妙な掌の動かし方、獨特の技巧を罩めた指のさばきにも因るのであらうが、それにしても、その皮膚の色の、内部からぼうつと明りが射してゐるやうな光澤は、何處から來るのかと訝しみに打たれた。何となれば、それは何處までも普通の日本人の手であつて、現に私が膝の上についてゐる手と、肌の色つやに何の違つたところもない。私は再び三たび舞臺の上の金剛氏の手と自分の手とを見較べたが、いくら見較べても同じ手である。だが不思議にも、その同じ手が舞臺にあつては妖しいまでに美しく見え、自分の膝の上にあつては只の平凡な手に見える。斯くの如きことはひとり金剛巖氏の場合のみではない。能に於いては、衣裳の外へ露はれる肉體はほんの僅かな部分であつて、顔と、襟くびと、手頸から指の先までに過ぎず、楊貴妃のやうに面を附けてゐる時は顔さへ隠れてしまふのであるが、それでゐてその僅かな部分の色つやが異様に印象的になる。金剛氏は特にさうであつたけれども、大概の役者の手が、何の奇もない當りまへの日本人の手が、現代の服裝をしてゐては氣が付かれない魅惑を發揮してわれ／＼に驚異の眼を見張らせる。繰り返して云ふが、それは決して美少年や美男子の役者に限るのではない。たとへば、日常われ／＼は普通の男子の唇に惹き付けられることなどは有り得ないが、能の舞臺では、あの艶ずんだ赤みと、しめり氣を持つた肌が、口紅をさした婦人のそれ以上に肉感的なねばつこさを帯びる。これは役者が謠ひをうたふために始終唇を唾液で濡らす故でもあらうが、しかしそのせむばかりとは思へない。又子方の俳優の頬が紅潮を呈してゐるのが、その赤さが、實に鮮やかに引き立つて見える。私の經驗では綠系統の地色の衣裳を着けた時に最も多くさう見えるので、色の白い子方なら勿論であるが、實を云ふと色の黒い子の方が、却つてその赤味の特色が眼立つ。それはなせかと云ふと、色白な兒では白と赤との對照があまり刻明である結果、能衣裳の暗く沈んだ色調には少し効果が強過ぎるが、色の黒い兒の暗褐色の頬であると、赤がそれほど際立たないで、衣裳と顔とが互ひに照りはえる。澁い緑と、澁い茶と、二つの間色が映り合つて、黄色人種の肌がいかにもその所を得、今更のやうに人目を惹く。私は色の調和が作り出す斯くの如き美が他にあるを知らないが、もし能樂が歌舞伎のやうに近代の照明を用ひたしたら、それらの美感は悉くどきつい光線のために飛び散つてしまふであらう。さればその舞臺を昔ながらの暗さに任してゐるのは、必然の約束に従つてゐる譯であつて、建物なども古ければ古い程いゝ。床が自然のつやを帯びて柱や鏡板などが黒光りに光り、梁から軒先の闇が大きな吊り鐘を伏せたやうに役者の頭上へ蔽ひかぶさつてゐる舞臺、さう言ふ場所が最も適してゐるのであつて、その點から云へば近頃能樂が朝日會館や公會堂へ進出するのは、結構なことには違ひないけれども、そのほんたうの持ち味は半分以上失はれてゐると思はれる。

ところで、能に付き纏ふさう云ふ暗さと、そこから生ずる美しさとは、今日でこそ舞臺の上でしか見られない特殊な陰翳の世界であるが、昔はあれが左程實生活とかけ離れたものではなかつたであらう。何となれば、能舞臺に於ける暗さは即ち當時の住宅建築の暗さであり、又能衣裳の柄や色合は、多少實際より花やかであつたとしても、大體に於いて當時の貴族や大名の着てゐたものと同じであつたらうから。私は一とたびそのことに考へ及ぶと、昔の日本人が、殊に戦國や桃山時代の豪華な服装をした武士などが、今日のわれ／＼に比べてどんなに美しく見えたであらうかを想像して、ただその思ひに恍惚となるのである。まことに能は、われ／＼同胞の男性の美を最高潮の形に於いて示してゐるので、その昔戰場往來の古武士が、風雨に曝された、顴骨の飛び出た、眞つ黒な赭顔にあゝ云ふ地色や光澤の素襖や大紋や袴を着けてゐた姿は、いかに凜々しくも嚴かであつただらうか。蓋し能を見て楽しむ人は、皆いくらかづつ斯くの如き連想に浸ることを楽しむのであつて、舞臺の上の色彩の世界が嘗てはその通りに實在してゐたと思ふところに、演技以外の懐古趣味がある。これに反して歌舞伎の舞臺は何處までも虚偽の世界であつて、われ／＼の生地的美しさとは關係がない。男性美は云ふ迄もないが、女性美とても、昔の女が今のあの舞臺で見るやうなものであつたらうとは考へられない。能樂に於いても女の役は面を付け

るので實際には遠いものであるが、さればとて歌舞伎劇の女形を見ても實感は湧かない。これは偏へに歌舞伎の舞臺が明る過ぎるせゐであつて、近代的照明の設備のなかつた時代、蠟燭やカンテラで纔かに照らしてゐた時代の歌舞伎劇は、その時分の女形は、或ひはもう少し實際に近かつたのではないであらうか。それにつけても、近代の歌舞伎劇に昔のやうな女らしい女形が現はれないと云はれるのは、必ずしも俳優の素質や容貌のためではあるまい。昔の女形でも今日のやうな明煌々たる舞臺に立たせれば、男性的なトゲトゲしい線が眼立つに違ひないのが、昔は暗さがそれを適當に蔽ひ隠してくれたのではないか。私は晩年の梅幸のお軽を見て、此のことを痛切に感じた。そして歌舞伎劇の美を亡ぼすものは、無用に過剰なる照明にあると思つた。大阪の通人に聞いた話に、文樂の人形淨瑠璃では明治になつてからも久しくランプを使つてゐたものだが、その時分の方が今より遙かに餘情に富んでゐたと云ふ。私は現在でも歌舞伎の女形よりはあの人形の顔の方に餘計實感を覚えるのであるが、成る程あれが薄暗いランプで照らされてゐたならば、人形に特有な固い線も消え、てら／＼した胡粉のつやもぼかされて、どんなにか柔かみがあつたであらうと、その頃の舞臺の凄いやうな美しさを空想して、そぞろに寒氣を催すのである。

知つての通り文樂の芝居では、女の人形は顔と手の先だけしかない。胴や足の先は裾の長い衣裳の裡に包まれてゐるので、人形使ひが自分達の手を内部に入れて動きを示せば足りるのであるが、私はこれが最も實際に近いのであつて、昔の女と云ふものは襟から上と袖口から先だけの存在であり、他は悉く闇に隠れてゐたものだと思ふ。當時にあつては、中流階級以上の女はめつたに外出することもなく、しても乗物の奥深く潜んで街頭に姿を曝さないやうにしてゐたとすれば、大概はあの暗い家屋敷の一と間に垂れ籠めて、晝も夜も、ただ闇の中に五體を埋めつゝその顔だけで存在を示してゐたと云へる。されば衣裳なども、男の方が現代に比べて派手な割合に、女の方はそれ程でない。舊幕時代の町家の娘や女房のものなどは驚く程地味であるが、それは要するに、衣裳と云ふものは闇の一部分、闇と顔とのつながりに過ぎなかつたからである。鐵漿おぼろなどと云ふ化粧法が行はれたのも、その目的を考へると、顔以外の空隙へ悉く闇を詰めてしまはうとして、口腔へ迄暗黒を啣ませたのではないであらうか。今日斯くの如き婦人の美は、鳥原の角屋のやうな特殊な所へ行かない限り、全く實際には見る事が出来ない。しかし私は幼い時分、日本橋の家の奥でかすかな庭の明りをたよりに針仕事をしてゐた母の倅を考へると、昔の女がどう云ふ風なものであつたか、少しは想像出来るのである。あの時分、と云ふのは明治二十年代のことだが、あの頃迄は東京の町家も皆薄暗い建て方で、私の母や伯母や親戚の誰彼など、あの年配の女達は大概鐵漿を付けてゐた。着物は不斷着は覺えてゐないが、餘所行き

の時は鼠地の細かい小紋をしぼ／＼着た。母は至つてせいが低く、五尺に足らぬ程であつたが、母ばかりでなくあの頃の女はそのくらゐが普通だつたのであらう。いや、極端に云へば、彼女たちには殆んど肉體がなかつたのだと云つていい。私は母の顔と手の外、足だけはぼんやり覺えてゐるが、胴體については記憶がない。それで想ひ起すのは、あの有名な中宮寺の觀世音の胴體であるが、あれこそ昔の日本の女の典型的な裸體像ではないのか。あの、紙のやうに薄い乳房の附いた、板のやうな平べつたい胸、その胸よりも一層小さくくびれてゐる腹、何の凹凸もない、眞つ直ぐな背筋と腰と臀の線、さう云ふ胴の全體が顔や手足に比べると不釣合に瘦せ細つてゐて、厚みがなく、肉體と云ふよりもすんどうの棒のやうな感じがするが、昔の女の胴體は押しなべてあゝ云ふ風ではなかつたのであらうか。今日でもあゝ云ふ恰好の胴體を持つた女が、舊弊な家庭の老夫人とか、藝者などの中に時々ゐる。そして私はあれを見ると、人形の心棒を思ひ出すのである。事實、あの胴體は衣裳を着けるための棒であつて、それ以外の何物でもない。胴體のスタッフを成してゐるものは、幾襲ねとなく巻き附いてゐる衣と綿とであつて、衣裳を剥げば人形と同じやうに不恰好な心棒が残る。が、昔はあれでよかつたのだ。闇の中に住む彼女たちに取つては、ほのじろい顔一つあれば、胴體は必要がなかつたのだ。思ふに明朗な近代女性の肉體美を謳歌する者には、さう云ふ女の幽鬼じみた美しさを考へることは困難であらう。又或る者は、暗い光線で胡麻化した美しさは、眞の美しさでないと言ふであらう。けれども前

にも述べたやうに、われ／＼東洋人は何でもない所に陰翳を生せしめて、美を創造するのである。「搔き寄せて結べば柴の庵なり解くればもとの野原なりけり」と云ふ古歌があるが、われ／＼の思索のしかたは兎角さう云ふ風であつて、美は物體にあるのではなく、物體と物體との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考へる。夜光の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば寶石の魅力を失ふ如く、陰翳の作用を離れて美はないと思ふ。つまりわれ／＼の祖先は、女と云ふものを蒔繪や螺鈿の器と同じく、闇とは切つても切れないものとして、出来るだけ全體を陰へ沈めてしまふやうにし、長い袂や長い裳裾で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけを際立たせるやうにしたのである。成る程、あの均整を缺いた平べつたい胴體は、西洋婦人のそれに比べれば醜いであらう。しかしわれ／＼は見えないものを考へるには及ばぬ。見えないものは無いものであるとする。強ひてその醜さを見ようとする者は、茶室の床の間へ百燭光の電燈を向けるのと同じく、そこにある美を自ら追ひ遣つてしまふのである。

だが、いつたいかう云ふ風に暗がりの中に美を求める傾向が、東洋人にのみ強いのは何故であらうか。西洋にも電氣や瓦斯や石油のなかつた時代があつたのであらうが、寡聞な私は、彼等に陰を喜ぶ性癖があることを知らない。昔から日本のお化けは脚がないが、西洋

のお化けは脚がある代りに全身が透きとほつてゐると云ふ。そんな些細な一事でも分るやうに、われ／＼の空想には常に漆黒の闇があるが、彼等は幽霊をさへガラスのやうに明るくする。その他日用のあらゆる工藝品に於いて、われ／＼の好む色が闇の堆積したものなら、彼等の好むのは太陽光線の重なり合つた色である。銀器や銅器でも、われらは鍍の生ずるのを愛するが、彼等はさう云ふものを不潔であり非衛生的であるとして、ピカピカに研き立てる。部屋の中も成る可く隈を作らないやうに、天井や周囲の壁を白つぽくする。庭を造るにも我等が木深い植ゑ込みを設ければ、彼等は平らな芝生をひろげる。斯くの如き嗜好の相違は何に依つて生じたのであらうか。案ずるにわれ／＼東洋人は己れの置かれた境遇の中に満足を求め、現状に甘んじようとする風があるので、暗いと云ふことに不平を感せず、それは仕方のないものとあきらめてしまひ、光線が乏しいなら乏しいなりに、却つてその闇に沈潜し、その中に自らなる美を發見する。然るに進取的な西洋人は、常により良き状態を願つて已まない。蠟燭からランプに、ランプから瓦斯燈に、瓦斯燈から電燈にと、絶えず明るさを求めて行き、僅かな陰をも拂ひ除けようと苦心をする。恐らくさう云ふ氣質の相違もあるのであらうが、しかし私は、皮膚の色の違ひと云ふことも考へてみたい。われ／＼とても昔から肌が黒いよりは白い方を貴いとし、美しいともしたことがあつた。けれども、それでも白哲人種の白さとわれ／＼の白さは何處か違ふ。一人々々に接近して見れば、西洋人より白い日本人があり、日本人より黒い西洋人があるやうだけれども、そ

の白さや黒さの工合が違ふ。これは私の経験から云ふのであるが、以前横濱の山手に住んでゐて、日夕居留地の外人等と行樂を共にし、彼等の出入する宴會場や舞踏場へ遊びに行つてゐた時分、傍で見ると彼等の白さをさう白いとは感じなかつたが、遠くから見ると、彼等と日本人との差別が、實にはつきり分るのであつた。日本人でも彼等に劣らない夜會服を著け、彼等より白い皮膚を持つたレディーがあるが、しかしさう云ふ婦人が一人でも彼等の中に交ると、遠くから見渡した時に直ぐ見分けがつく。と云ふのは、日本人のはどんなに白くとも、白い中に微かな翳りがある。そのくせさう云ふ女たちは西洋人に負けないうやうに、背中から二の腕から腋の下まで、露出してゐる肉體のあらゆる部分へ濃い白粉を塗つてゐるのだが、それでゐて、やつぱりその皮膚の底に澱んでゐる暗色を消すことが出来ない。ちやうど清冽な水の底にある汚物が、高い所から見下ろすとよく分るやうに、それが分る。殊に指の股だとか、小鼻の周圍だとか、襟頸だとか、背筋だとかに、どす黒い、埃の溜つたやうな隈が出来る。ところが西洋人の方は、表面が濁つてゐるやうでも底が明るく透きとほつてゐて、體ぢゆうの何處にもさう云ふ薄汚い蔭がささない。頭の先から指の先まで、交り氣がなく冴え／＼と白い。だから彼等の集會の中へわれ／＼の一人が這入り込むと、白紙に一點薄墨のしみが出来たやうで、われ／＼が見てもその一人が眼障りのやうに思はれ、あまりいゝ氣持ちがしないのである。かうしてみると、亞米利加あたりで有色人種を排斥する心理が領けるのであつて、白人中でも神經質な人間には、社交場

裡に出来る一點のしみ、一人か二人の有色人さへが、氣にならずにはゐないのであらう。さう云へば、今日ではどうか知らないが、昔黒人に對する迫害が最も激しかつた南北戦争の時代には、彼等の憎しみと蔑みは單に黒人のみならず、黒人と白人との混血兒、混血兒同志の混血兒、混血兒と白人との混血兒等々にまで及んだと云ふ。彼等は二分の一混血兒、四分の一混血兒、八分の一、十六分の一、三十二分の一混血兒と云ふ風に、僅かな黒人の血の痕跡を何處々々までも追究して迫害しなければ已まなかつた。一見純粹の白人と異なるところのない、二代も三代も前の先祖に一人の黒人を有するに過ぎない混血兒に對しても、彼等の執拗な眼は、ほんの少しばかりの色素がその眞つ白な肌の中に潜んでゐるのを見逃さなかつた。で、斯くの如きことを考へるにつけても、いかにわれ／＼黄色人種が陰翳と云ふものと深い關係にあるかが知れる。誰しも好んで自分たちを醜惡な状態に置きたがらないものである以上、われ／＼が衣食住の用品に曇つた色の物を使ひ、暗い雰圍氣の中に自分たちを沈めようとするのは當然であつて、われ／＼の先祖は彼等の皮膚に翳りがあることを自覺してゐた譯でもなく、彼等より白い人種が存在することを知つてゐたのではないけれども、色に對する彼等の感覺が、自然とあゝ云ふ嗜好を生んだものと見る外はない。

われ／＼の先祖は、明るい大地の上下四方を仕切つて先づ陰翳の世界を作り、その闇の奥に女人を籠らせて、それを此の世で一番色の白い人間と思ひ込んでゐたのであらう。肌の白さが最高の女性美に缺くべからざる條件であるなら、われ／＼としてはさうするより仕方がないのだし、それで差支へない譯である。白人の髪が明色であるのにわれ／＼の髪が暗色であるのは、自然がわれ／＼に闇の理法を教へてゐるのだが、古人は無意識のうち、その理法に従つて黄色い顔を白く浮き立たせた。私はさつき鐵漿おほくろのことを書いたが、昔の女が眉毛を剃り落したのも、やはり顔を際立たせる手段ではなかつたのか。そして私が何よりも感心するのは、あの玉蟲色に光る青い口紅である。もう今日では祇園の藝妓などでさへ殆んどあれを使はなくなつたが、あの紅こそはほのぐらい蠟燭のはためきを想像しなければ、その魅力を解し得ない。古人は女の紅い唇をわざと青黒く塗りつぶして、それに螺鈿を鏤めたのだ。豊艶な顔から一切の血の氣を奪つたのだ。私は、蘭燈のゆらめく蔭で若い女があゝの鬼火のやうな青い唇の間からとき／＼黒漆色の齒を光らせてほ／＼笑んでゐるさまを思ふと、それ以上の白い顔を考へることが出来ない。少くとも私が腦裡に描く幻影の世界では、どんな白人の女の白さよりも白い。白人の白さは、透明な、分り切つた、有りふれた白さだが、それは一種人間離れのした白さだ。或ひはさう云ふ白さは、實際には存在しないかも知れない。それはたゞ光りと闇が醸し出す悪戯であつて、その場限りのものかも知れない。だがわれ／＼はそれでいい。それ以上を望むには及ばぬ。こゝで

私は、さう云ふ顔の白さを想ふ半面に、それを取り圍む闇の色について話したいのだが、もう數年前、いつぞや東京の客を案内して島原の角屋で遊んだ折に、一度忘れられない或る闇を見た覚えがある。何でもそれは、後に火事で焼け失せた「松の間」とか云ふ広い座敷であつたが、僅かな燭臺の灯で照らされた廣間の暗さは、小座敷の暗さと濃さが違ふ。ちやうど私とその部屋へ這入つて行つた時、眉を落して鐵漿を付けてゐる年増の仲居が、大きな衝立の前に燭臺を据ゑて畏まつてゐたが、疊二疊ばかりの明るい世界を限つてゐるその衝立の後方には、天井から落ちかゝるやうな、高い、濃い、唯一と色の闇が垂れてゐて、覺束ない蠟燭の灯がその厚みを穿つことが出来ずに、黒い壁に行き當つたやうに撥ね返されてゐるのであつた。諸君はかう云ふ「灯に照らされた闇」の色を見たことがあるか。それは夜道の闇などとは何處か違つた物質であつて、たとへば一と粒一と粒が虹色のかゞやきを持つた、細かい灰に似た微粒子が充滿してゐるものやうに見えた。私はそれが眼の中へ這入り込みはしないかと思つて、覺えず眼瞼をしばだいた。今日では一般に座敷の面積を狭くすることが流行り、十疊八疊六疊と云ふやうな小間を建てるので、假りに蠟燭を點しても斯かる闇の色は見られないが、昔の御殿や妓樓などでは、天井を高く、廊下を廣く取り、何十疊敷きと云ふ大きな部屋を仕切るのが普通であつたとすると、その屋内にはいつもかう云ふ闇が狭霧の如く立ち罩めてゐたのであらう。そしてやんごとない上臈たちは、その闇の灰汁あかにとつぶり漬かつてゐたのであらう。嘗て私は「倚松庵隨筆」

の中でもそのことを書いたが、現代の人は久しく電燈の明りに馴れて、かう云ふ闇のあつたことを忘れてゐるのである。分けても屋内の「眼に見える闇」は、何かチラチラとかげろふものがあるやうな氣がして、幻覺を起し易いので、或る場合には屋外の闇よりも凄味がある。魑魅とか妖怪變化とかの跳躍するのは蓋しかう云ふ闇であらうが、その中に深い帳を垂れ、屏風や襖を幾重にも圍つて住んでゐた女と云ふものも、やはりその魑魅の眷屬ではなかつたか。闇は定めしその女達を十重二十重に取り巻いて、襟や、袖口や、裾の合はせ目や、至るところの空隙を填めてゐたであらう。いや、事に依ると、逆に彼女達の體から、その齒を染めた口の中や黒髪の前から、土蜘蛛の吐く蜘蛛のいの如く吐き出されてゐたのかも知れない。

○

先年、武林無想庵が巴里から歸つて來ての話に、歐洲の都市に比べると東京や大阪の夜は格段に明るい。巴里などではシャンゼリゼエの真ん中でもラムプを燈す家があるのに、日本では餘程邊卑な山奥へでも行かなければそんな家は一軒もない、恐らく世界ぢゆうで電燈を贅澤に使つてゐる國は、亞米利加と日本であらう、日本は何でも亞米利加の眞似をしたがる國だと云ふことであつた。無想庵の話は今から四五年前、まだネオンサインなどの流行り出さない頃であつたから、今度彼が歸つて來たらいよいよ明るくなつてゐるのに嘸かし吃驚するであらう。それから此れは「改造」の山本社長に聞いた話だが、嘗て社長がアインシュタイン博士を上方へ案内する途中汽車で石山のあたりを通ると、窓外の景色を眺めてゐた博士が、「あゝ、彼處に大層不經濟なものがある」と云ふので譯を聞くと、そこらの電信柱が何かに白晝電燈のともつてゐるのを指さしたと云ふ。アインシュタインは猶太人ですからさう云ふことが細かいんでせうね」と、山本氏は註釋を入れたが、亞米利加は兎に角、歐洲に比べると日本の方が電燈を惜し氣もなく使つてゐることは事實であるらしい。石山と云へばもう一つをかきなことがあるのだが、今年の秋の月見に何處がよからう此處がよからうと首をひねつた揚句、結局石山寺へ出かけることに極めてゐると、十五夜の前日の新聞に石山寺では明晩觀月の客の興を添へるため林間に擴聲器を取り付け、ムーソライトソナタのレコードを聴かせると云ふ記事が出てゐる。私はそれを讀んで急に石山行きを止めてしまつた。擴聲器も困り物だが、さう云ふ風ではきつとあの山の方々に電燈やイルミネーションを飾り、賑々しく景氣を付けてはゐないかと思つたからである。前にも私はそれで月見をフイにした覺えがあるのは、或る年の十五夜に須磨寺の池へ舟を浮かべてみようと思ひ、同勢を集め重詰めを持ち寄つて繰り出してみると、あの池のぐるりを五色の電飾が花やかに取り巻いてゐて、月はあれどもなきが如くなのであつた。それやこれやを考へると、どうも近頃のわれわれは電燈に麻痺して、照明の過剰から起る不便と云ふことに對しては案外無感覺になつてゐるらしい。お月見の場合なんかはまあ孰方で

もいゝけれども、待合、料理屋、旅館、ホテルなどが、一體に電燈を浪費し過ぎる。それも客寄せのために幾らか必要であらうけれども、夏など、まだ明るいうちから點燈するのは無駄である以上に暑くもある。私は夏は何處へ行つても此れで弱らせられる。外が涼しいのに座敷の中が馬鹿に暑いのは、殆んど十が十まで電力が強過ぎるか電球が多過ぎるか、のせいであつて、試しに一部分を消してみると俄かにすうつとするのだが、客も主人も一向それに氣が付かないのが不思議でならない。元來室内の燈し火は、冬は幾らか明るくし、夏は幾らか暗くすべきである。その方が冷涼の氣を催すし、第一蟲が飛んで來ない。然るに餘計に電燈をつけ、それで暑いからと云つて扇風器を廻すのは、考へただけでも煩はしい。尤も日本座敷だと熱が傍から散つて行くのでまだ我慢が出来るけれども、ホテルの洋室では風通しが悪い上に、床、壁、天井等が熱を吸ひ取つて四方から反射するので、實にたまらない。例を擧げるのは少し氣の毒だが、京都の都ホテルのロビーへ夏の晩に行つたことのある人は、私の此の説に同感してくれないであらうか。彼處は北向きの高臺に據つてゐて、比叡山や如意ヶ嶽や黒谷の塔や森や東山一帶の翠巒を一眸のうちに集め、見るからすが／＼しい氣持ちのする眺めであるが、それだけになほ惜しい。夏のゆふがた、折角山紫水明に對して爽快の氣分に浸らうと思ひ、樓に滿つる涼風を慕つて出かけてみると、白い天井の此處彼處に大きな乳白ガラスの蓋が嵌め込んであつて、ドギツイ明りが中でかつかつと燃えてゐる。それが、近頃の洋館は天井が低いので、直ぐ頭の上に火の玉がくるめいてゐるやうで、暑いことと云つたらない。體のうちでも天井に近い所ほど暑く、頭から襟頸から背筋へかけて炙られるやうに感じる。而もその火の玉が一つあつたらあれだけの廣さを照らすには充分なくらゐるのであるのに、さう云ふ奴が三つも四つも天井に光つてゐて、その外にも小さな奴が壁に沿ひ柱に沿うて幾つとなく取り附けてあるのだが、そんなのはただ隅々に出来る隈を消してゐる以外に、何の役にも立つてゐない。だから室内に蔭と云ふものが一つもなく、見渡したところ、白い壁と、赤い太い柱と、派手な色をモザイクのやうに組み合はせた床が、刷りたての石版畫のやうに眼に沁み込んで、これが又相當に暑苦しい。廊下からそこへ這入つて來ると、溫度の違ひが際立つて分る。あれではたとひ涼しい夜氣が流れ込んで來ても、直ぐ熱い風に變つてしまふから何にもなるまい。彼處は以前たび／＼泊まりに行つたことのあるホテルで、なつかしく思ふところから親切氣で忠告するのだが、實際あゝ云ふ形勝な眺望、最適な夏の涼み場所を、電燈で打ち壊してゐるのは勿體ない。日本人には勿論のこと、いくら西洋人が明るみを好むからと云つて、あの暑さには閉口するに違ひなからうが、何より彼より、一遍明りを減らしてみたら靦面に諒解するであらう。だがこれなどは一例を擧げた迄であつて、あのホテルに限つたことではない。間接照明を使つてゐる帝國ホテルだけは先づ無難だが、夏はあれをもう少し暗くしてもよかりさうに思ふ。何にしても今日の室内の照明は、書を読むとか字を書くとか、針を運ぶとか云ふことは最早問題でなく、専ら四隅の蔭を消すことに費されるやうに

なつたが、その考へは少くとも日本家屋の美の觀念とは兩立しない。個人の住宅では經濟の上から電力を節約するので、却つて巧く行つてゐるけれども、客商賣の家になると、廊下、階段、玄關、庭園、表門等に、どうしても明りが多過ぎる結果になり、座敷や泉石の底を淺くしてしまつてゐる。冬はその方が暖かで助かることもあるが、夏の晩はどんな幽邃な避暑地へ逃れても、先が旅館である限り大概都ホテルと同じやうな悲哀に打つかる。だから私は、自分の家で四方の雨戸を開け放つて、眞つ暗な中に蚊帳を吊つてころがつてゐるのが涼を納れる最上の法だと心得てゐる。

此の間何かの雑誌か新聞で英吉利のお婆さんたちが愚痴をこぼしてゐる記事を読んだら、自分たちが若い自分には年寄りを大切にして勞はつてやつたのに、今の娘たちは一向われわれを構つてくれない、老人と云ふと薄汚いものゝやうに思つて傍へも寄りつかない、昔と今とは若い者の氣風が大變違つたと歎いてゐるので、何處の國でも老人は同じやうなことを云ふものだと思ひ感心したが、人間は年を取るに従ひ、何事に依らず今よりは昔の方がよかつたと思ひ込むものであるらしい。で、百年前の老人は二百年前の時代を慕ひ、二百年前の老人は三百年前の時代を慕ひ、いつの時代にも現状に満足することはない譯だが、別して最近文化の歩みが急激である上に、我が國は又特殊な事情があるので、維新以來の變

遷はそれ以前の三百年五百年にも當るであらう。などといふ私が、やはり老人の口眞似をする年配になつたのがをかしいが、しかし現代の文化設備が専ら若い者に媚びてだん／＼老人に不親切な時代を作りつゝあることは確かなやうに思はれる。早い話が、街頭の十字路を號令で横切るやうになつては、もう老人は安心して町へ出ることが出来ない。自動車で乗り廻せる身分の者はいゝけれども、私などでも、たまに大阪へ出ると、此方側から向う側へ渡るのに渾身の神経を緊張させる。ゴーストツプの信號にしてからが、辻の眞ん中にあるのは見よいが、思ひがけない横つちよの空に青や赤の電燈が明滅するのは、中々に見つけ出しにくいし、廣い辻だと、側面の信號を正面の信號と見違へたりする。京都に通巡査が立つやうになつてはもうおしまひだどつくづくさう思つたことがあつたが、今日純日本風の町の情趣は、西宮、堺、和歌山、福山、あの程度の都市へ行かなければ味は、れない。食べる物でも、大都會では老人の口に合ふやうなものを搜し出すのに骨が折れる。先達も新聞記者が來て何か變つた旨い料理の話をしると云ふから、吉野の山間僻地の人が食べる柿の葉鮓と云ふものゝ製法を語つた。ついでに此處で披露しておくが、米一升に付酒一合の割りで飯を焚く。酒は釜が噴いて來た時に入れる。扱飯がムレたら完全に冷えるまで冷ました後に手に鹽をつけて固く握る。此の際手に少しでも水氣があつてはいけない、鹽ばかりで握るのが秘訣だ。それから別に鮓のアラマキを薄く切り、それを飯の上に載せて、その上から柿の葉の表を内側にして包む。柿の葉も鮓も豫め乾いたふきんで充分

に水氣を拭き取つておく。それが出来たら、鮭桶でも飯櫃でもいゝ、中をカラカラに乾かしておいて、小口から隙間のないやうに鮭を詰め、押蓋を置いて漬物石ぐらゐな重石を載せる。今夜漬けたら翌朝あたりからたべる事が出来、その日一日が最も美味で、二三日は食べられる。食べる時に一寸蓼の葉で酢を振りかけるのである。吉野へ遊びに行つた友達が餘り旨いので作り方を教はつて來て傳授してくれたのだが、柿の木とアラマキさへあれば何處でも拵へられる。水氣を絶對になくすることゝ飯を完全に冷ますことさへ忘れなければいゝので、試しに家で作つてみると、成る程うまい。鮭の脂と鹽氣とがいゝ鹽梅に飯に滲み込んで、鮭は却つて生身のやうに柔かくなつてゐる工合が何とも云へない。東京の握り鮓とは格別な味で、私などには此の方が口に合ふので、今年の夏はこればかり食べて暮らした。それにつけてもこんな鹽鮭の食べかたもあつたのかと、物資に乏しい山家の人の發明に感心したが、さう云ふいろゝの郷土の料理を聞いてみると、現代では都會の人より田舎の人の味覺の方がよつぽど確かで、或る意味でわれゝの想像も及ばぬ贅澤をしてゐる。そこで老人は追ひ追ひ都會に見切りをつけて田舎へ隱棲するものもあるが、田舎の町も鈴蘭燈などが取り附けられて、年々京都のやうになるので、さう安心してゐる譯に行かない。今に文明が一段と進んだら、交通機關は空中や地下へ移つて町の路面は一と昔前の静かさに復ると云ふ説もあるが、いづれその時分には又新しい老人いぢめの設備が生れることは分りきつてゐる。結局年寄りには引つ込んでゐると云ふことになるので、自分の家

にちちこまつて手料理を肴に晩酌を傾けながら、ラヂオでも聞いてゐるより外に所在がなくなる。老人ばかりがこんな叱言を云ふのかと思ふと、満更さうでもないと思つて、頃來大阪朝日の天聲人語子は、府の役人が箕面公園にドライブウエーを作らうとして濫りに森林を伐り開き、山を淺くしてしまふのを嗤つてゐるが、あれを讀んで私は聊か意を強うした。奥深い山中の木の下闇をさへ奪つてしまふのは、あまりと云へば心なき業である。此の調子だと、奈良でも、京都大阪の郊外でも、名所と云ふ名所は大衆的になる代りに、だん／＼さう云ふ風にして丸坊主にされるのであらう。が、要するにこれも愚痴の一種で、私にしても今の時勢の有難いことは萬々承知してゐるし、今更何と云つたところで、既に日本が西洋文化の線に沿うて歩み出した以上、老人などは置き去りにして勇往邁進するより外に仕方がないが、でもわれゝの皮膚の色が變らない限り、われゝにだけ課せられた損は永久に背負つて行くものと覺悟しなければならぬ。尤も私がかう云ふことを書いた趣意は、何等かの方面、たとへば文學藝術等に、その損を補ふ道が残されてゐるはしまいかと思ふからである。私は、われゝが既に失ひつゝある陰翳の世界を、せめて文學の領域へでも呼び返してみたい。文學といふ殿堂の檐を深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内裝飾を剥ぎ取つてみたい。それも軒並みとは云はない、一軒ぐらゐさう云ふ家があつてもよからう。まあどう云ふ工合になるか、試しに電燈を消してみるのだ。

現代口語文の缺點について

明治の中葉以後に始まつて今あるやうに發達した日本文の形式——いはゆる言文一致體、或ひは口語體と稱する文體は、現在では殆んど完成の域に行き着いたといつていい。しかしながら私のやうに日常文筆を以て世渡りをしてゐる者は、自分が始終此の文體を使ひこなしてゐるだけに、實際の經驗上から、いろいろの缺點にも氣が付き、まだいくらでも改良すべき餘地があることを、しみじみ感じさせられる。人人の口から口へ話される言葉は、人爲的に改良しようとしても到底出來ないことだけでも、文章の方は社會一般がその心がけになり、教育家や著述家などが少しその方に眼を開けてくれたら、必ずしも改良は不可能でない。一例を挙げれば、今の口語體は一通りのことを記述するには結構間に合つてゐるものの、少しく精密な、たとへば哲學の理論を表現したりするには、とかく晦澁に陥り易い。早い話が西洋哲學の翻譯書で、敢て名文と云はない迄も、意味がはつきり分るやうに書いてあるものは甚だ少い。英語もしくは獨逸語の書について、コツコツ字

引を引きながらも拾ひ讀みをした方がまだ呑み込めると云ふ場合が多い。これは翻譯者の罪と云ふよりも、現代の國文そのものに何等かの缺點があるを見ていい。古い時代の語法でも現代に活用出来るものは生かして使つたらよささうなものだが、私の信ずる所では、今の口語體は國語の持つ特有の美點と長所とを悉く殺してしまつてゐる。云ふ迄もなくこれを研究することは、社會一般を利益するところが大であるから、茲に私は自分の仕事の上に就いて感じたことを世間の識者の參考までに記してみる。學術的に、秩序を立てて検討するのは國學者の任であつて、私の柄にないことだから、矢張りいつもの隨筆風に、思ひつくままを次ぎ次ぎに述べて行くであらう。

○
口語體と云ふものは明治以後の産物のやうに思はれてゐるけれども、必ずしもさうであるまい。源氏物語の文章なども矢張りあの當時に於いては、一種の口語體であつたであらう。嘗て學校の教室で教はつたところでは、口語と文章語とが分れて來たのは平安朝の末ごろであつたやうに聞いてゐる。すると鎌倉時代以後の和漢混交體を経て、明治に至つて王政の復古と共に國文も亦口語體の古に復つたのである。つまり我が國に假名文字が發明されてから後の國文の發達は、大體に於いて平安朝と、鎌倉以後と、明治以後との三段に分けていい譯である。

ところが、私が自分でも日常それを使つてゐながらしばしば不思議に感ずることは、現在の口語體の「のである」と云ふ云ひ廻しである。かりに私はこれを「のである口調」と名づけるのである、のであつた、あつたのであらう等、さういふ云ひ廻しの凡べてを含んでゐるものと解して貰ひたい。いつたい此の「のである」と云ふ口調は何處から始まつたか。われわれが實地に口で話をする時に「のである」と云ふ言葉はめつたに使はない。演壇に立つて公衆を相手にする時には使ふけれども、その場合その人は口語でしやべつてゐるのでなく、文章語でしやべつてゐるのであつて、演説や講義でも多少碎けて物を云ふ時は、あります口調かございませう口調になる。今日の標準語は東京語に律つてゐるのだから、うだが、「のである口調」は絶対に東京の口語でない。従つて江戸つ兒の言葉でもない。或ひは舊幕時代の武士の用語であつたかとも思つたが、どうもさうでもなささうである。そこで思ひ出すのは、故大隈重信侯が存生の頃、例の「あるのである」と云ふ侯の口真似が、しばしば當時の新聞紙上を賑はしたことがある。私はまのあたり故侯に會つたことがないから分らないが、新聞の口真似がほんたうだとすれば、侯は日常の會話に「のである口調」を用ひたのであらうか。それとも又、ああ云ふ地位の人だから新聞記者や訪客などに接する時は、自然と演説口調になつたのであらうか。これは私の想像であるが、演説口調で物を云ふのが習慣になつて、知らず知らず日常の會話にもそれを使ふやうになつたのではないか。もちろん家族の人たちと話をするやうな、餘程打ち解けた時は兎に

角、さうでない時、いくらか袴かましもをつけた氣分になる場合は、おのづと「のである口調」が出る。——侯に限らず、凡そあの頃の政客、主として薩長土肥の人たちはみんな多少ともさう云ふ癖があつたのではないか。ここで一足飛びに私の獨斷を云つてしまふと、「のである口調」はどうもあの頃の四國人や九州人が東京へ持つて來たやうな氣がする。彼等のお國言葉のうちさう云ふ云ひ廻しがあつたかどうかはよく知らない。けれども恐らくは、お國言葉を避けるために、田舎訛りの謗りを免れるために、一種中立のああ云ふ言葉を使ひ出したのではないか。それと動機は違ふだらうが、今の陸軍では兵士に「であります」と云ふ口調を使はせてゐる。それは特殊の陰影や地方色のある言葉を避けて、簡單明瞭に、達意を主にするために採用したのであらうが、「のである口調」もいくらかさう云ふ必要から起つたとも見られる。昔は百人一首のかるたはいろいろの書體で書いてあつたのが、今では活字體の標準かるたと云ふものが出來た。「のである口調」はちやうどその活字にあたる。今でもよく、たとへば琉球とか、青森とか、邊陲の地から都會へ出て來る人たちは、教育のある者である程、「であります口調」や新聞雜誌の文體に近い口語體で、切り口上で物を云ふのはしばしば見受けるところである。但し、維新當時の「のである口調」は、徳川時代の禮儀正しい、今から見れば寧ろ卑屈な、階級的な言葉づかひが残つてゐたあの頃の東京に於いては、いくらか權柄づくに、敗殘の御家人や町人を相手に威張つて物を云ふ心持ちもあつたであらう。即ちあ

の當時には活字以上の役目を果たしてゐたであらう。

なほもう一つ思ひ出すことは、嘗て東京の府立第一中學に在學の時分、或る年學校の記念日に、當時麻布中學の校長をしてをられた故江原素六翁が來賓として出席され、講堂で訓話をされたことがあつた。私は翁が維新の豪傑の一人であり、當時も有名な政客であり、高潔な人格者であることを聞いてゐたから、子供にありがちな英雄崇拜の心持ちを以て翁の演説に耳を傾けたが、意外にもその言葉づかひは自分の學校の校長や教師の「のである口調」でなく、實にキビキビした江戸辯であつた。「おらア知らねえ」とか、「仕方がねえ」とか、翁はさう云ふ言葉をさへ交へた。人も知る通り、江原翁は徳川氏の遺臣であり、生粹の江戸文化の中に育つた人であるから、演説にもその持ち味が出ずにはゐなかつたのであらう。徳川の末期になると、旗本の武士も市井の町人と殆んど變らないサバケた口調を使つたもので、翁の言葉を聞いてゐると全く私の親父なぞの話しふりと同じであつた。私は後にも先にも、こんな氣持ちのいい、カラリとした演説を聞いたことはなかつた。少しも袴を着けてゐないで、翁の颯爽たる人格が言外に溢れてゐた。勝海舟翁などの話しぶりも恐らくさうでなかつたであらうか。

ふ。

何にせよ此の口調は、地方的、乃至は歴史的特色がないだけ萬人向きのするものであるから、これを標準にすることに私は異存があるのではない。既に紅葉漱石の如き江戸人ですら此の文體で立派な作品を遺してゐる以上、過去に於いても相當の効績を認めなければならぬし、況んや現在では、善いにも悪いにも、動かすことは出来なくなつてしまつてゐる。

しかしながら、簡單明瞭とか、達意とか云ふこと以外に、美の表現を目安に入れる小説に於いては、さう一も二もなく此の文體にきめてしまふこともなからうかと思ふ。尤も今日でも「のである」の外に、「だ」と云ふ口調、「であります」と云ふ口調の文體も多少は行はれてゐなくもない。中里介山氏の「大菩薩峠」の如きは「であります口調」で書かれた作品中での雄篇と云ふべきであらう。簡單と云へば「だ」止めが簡單であり、力も強いが、その代り音がキタナイ。「であります」は冗長のきらひがあるけれども、優しみがあつて、親しみ易くもあり、實際の口語に近くもあり、何處かに傳統的な和文と共通なひびきもある。「のである」は、何んと云つても政治家の演説口調から出たものだけに、四角張つた、多少取りつくりつたやうな、ギョチない感じを起させる。殊に此の頃のやうな政界の有様

では、議會の速記録を想はせるだけでもあまりいい氣持ちはしない。餘計なことを云ふやうだが、此の間前大臣が裁判所へ呼ばれた時に所懐を記した文句に、「雲はやがて晴れるものである」と云ふのがあつたが、あれを讀んでから「のである」が變に不愉快になつた。

それに、文章に苦心する程の人は誰でも氣がつくことであらうが、「のである」の文體だと、不必要に「のである」を重複させ、濫用する弊に陥り易い。たとへば、「行つた」と書けば濟むところを、「行つたのである」とする。甚しきは大隈侯の如く「あるのである」とする。私なども、此處へ「のである」を附けるのは無駄だと思ひながら、どうも附けないと落ち着きが取れず、据わりが悪いやうな氣がして、結局附けてしまふ場合がある。「あつたのであつた」「ないことはないのである」などと云ふ語法は、耳馴れてゐるからさほどに感じないやうなものの、考へて見ると随分をかしい。そしてそんなことのために、「あります口調」より却つて冗長になり易い。「あります口調」なら、「ありますのであります」、「ありましたのであります」、「ありませんことありませんのであります」などとはめつたに書くまい。

現代に於いて、漢文くづしの文體で、自由に、有効に、古人の名文にも劣らないほどの美

しさと力強さを以て表現することの出来る人は、幸田露伴先生を措いては殆んど一人もなくなつてしまつた。大谷光瑞氏なども書くことは書くが、どう云ふものか此の頃發表されるものは以前のもの程整つてゐない。その他の人々のは私が書いても書けさうな程度のものばかりである。が、それならあふ云ふ廻しは亡びてしまつたかと云ふのに、案外さうでなく、今の口語體の中に情勢を残してゐるやうに思へる。

「あるのである」、「あつたのであつた」、「ないことはないのである」等々の不思議な云ひ廻しは、それぞれ漢文くづしの文體の、「ある也」、「なる也」、「ありし也」、「なりし也」、「たりし也」、「あらざるなき也」、「なきにあらざる也」等の變化ではないかと、私は見てゐる。明治維新の頃に演説でもしようと思ふ豪傑氣取りの人たちの頭は、たいがい漢文くづしの文體で固まつてゐた。その證據には、あの當時の政論などの文體を見るとよく分る。即ち「のである口調」は漢文くづしをそつくりそのまま口語に移したものであらう。現に此の頃でも徳富蘇峰大人の文章などはその生きた標本ではないか。一般の人はあれほど極端ではないけれども、多かれ少かれ文章軌範的の云ひ廻しの餘勢を受けてゐるのである。まさか當節の人の頭に十八史略や八大家文の口調がこびり着いてゐる筈もないが、それでも高山樗牛あたりの銜學的論調が何等かの感化を及ぼしてゐないことはあるまい。それに釣られて、全く漢文の影響を脱し切つてゐる青年たちまでが、無意識のうちに引きずられてゐるのであらう。

今日、夕刊の三面などに載つてゐる講談の筆記を讀むと、ずるぶん自由な云ひ廻しをしてゐる。「のである」「あります」「ございます」等をちやんぼんに使ひ、名詞止めもあれば、動詞止め、「てにをは」止めもあり、少しも囚はれたところがない。あれは餘程參考になると思ふ。「のである口調」の一つの大きな缺點は、いかにも彈力がなからぬことである。「たりし也」「たらざる也」の漢文口調にはピンとした響きがあり、語勢を強める効果があつたのに、「あるのである」になつて來ると、べたべたと莖蕪でも踏んづけるやうな氣がする。それにいつたい、今の人の書く物は一つのセンテンスが短かく、十中の八九まで動詞を以て終るものだから、(此のことに就いてはいづれ後段で詳しく述べる。)従つて「る」と「た」が一層重複する。試みに座右にある現代作家の著作をひろげて、一つ一つの文章の終りの字を見ると、「る」か「た」でないものは殆んどない。日本語と云ふものはもつと融通が利く筈であるのに、これでは餘り堅苦し過ぎる。さしあたりもう少し實際の口語に近く、思ひ切つて碎けてみたらどうか知らん。日常の會話に、「さうでせうね」とか、「さうかえ」とか、「あるんだよ」とか云ふ一種の捨て字、「ね」「え」「よ」「わ」「や」「な」「さ」「わい」「わよ」の類、——文法上は何の品詞に入るものかよく知らないが、——あれなど男女老若の區別をするのに重寶な日本語獨特のものであるが、小説中の會話だけで

なく、地の文にも使つてみたらいいであらう。親しみもあり、語勢を強める働きも、「る」止め「た」止めの頻出を避けることも出来るではないか。

さて、以上は大體論であつて、これから少しく別な方面を考察しよう。

此の間左團次一行が露西亞へ行つた時、あちらで歌舞伎劇の紹介に勤めたレニングラードのコンラド君が二三年前に來朝した折、コンラド君、同夫人、及び關西に在住する日本文學通の露人プレトネル君、ネフスキ君、及び私と、奈良ホテルに會合したことがあつた。その時のコンラド君の話に、今の露西亞で私の「愛すればこそ」を譯してゐる人があるのだが、第一に此の標題の翻譯に困つてゐる。「愛すればこそ」は一體「誰」が「愛する」のですか、「私」が「愛すればこそ」なのですか、「彼女」がですか、それとも「世間一般の人」がですか、要するに主格を誰にしているかが明瞭でないと云ふのであつた。私はそれに答へて云つた、「愛すればこそ」の主格は此の戯曲の筋から云へば「私」とするのが正しいやうである、だから英譯では「ビコース・アイ・ラヴ」となつてをり、佛譯では「ピュイク・ジュ・レイム」となつてゐる、しかしながら、本當を云ふと「私」と限定してしまつ

ては少しく意味が狭められる、「私」ではあるが、同時に「彼女」であつてもいいし、「世間一般の人」でも、その他何人であつてもいい、それだけの幅と抽象的な感じを持たせるために、此の句には主格を置かないのである、それが日本語の特長であつて、歐洲語では主格を入れないと語を成さない場合でも、日本語ではそれを必要としない、曖昧だと云へば曖昧だけれども、具體的である半面に一般性を含み、或る特定の物事に關して云はれた言葉がそのまま格言や諺のやうな廣さと重みと深みとを持つ、だから出来るならば露西亞語に譯すのにも主格を入れない方がいいと。

これは日本語ばかりでなく、漢文についても同じことが云へる。たとへば李白の玉階怨を取つて見よう。――

玉階白露生 夜久侵羅襪

却下水晶簾 玲瓏望秋月

此の詩の起句と承句とは白露が主格であるけれども、轉句と結句とには主格がない。却レイテ水晶簾ヲ下シテ、玲瓏秋月ヲ望ム。者は誰であるとも斷つてない。これは帝王の寵愛の衰へた宮廷の美姫の閨怨を詠じたものには違ひないが、此の詩に何か悠久な美しさがあるやうに感ぜられるのは、主格を入れてないためである。かりに歐洲語であつたら、承句の「羅襪」と云ふ名詞の前にも「彼女の」と云ふ代名詞が必要であらう。それから結句の「玲瓏」と云ふ語も何を形容したものか、玲瓏たるものは月の光であるか、水晶簾の内に

ある美姫の容顔であるか、恐らくその兩方に取つてよからう。ここに於いて此の「玲瓏」と云ふ言葉は非常に生きて働いてゐる。一つの情景を叙すると同時に、その蔭にある他のもう一つの情景を連想させる。日本の枕ことばや掛けことばなども決して單なる駄じやれではなく、矢張りさう云ふ働きを持つてをり、二度に云ふことを一度に済ます役目をしてゐる。就中俳句はかう云ふ表現法の極致を示したものだと思ふ。

○

私は、殊に近頃、英文の小説を読む毎にいつも感じることなのであるが、西洋人と云ふものは分り切つた手順を馬鹿でいねいに記して行くので、そのために非常にまどろっこしい。日本文ならこんな所はアツサリ片附けるのと思ふと、讀んでゐてもぢれつたくなる。西洋人は「あなたは鉛筆をお持ちですか？」と云ふ場合に、「あなたと一緒に、――」
「ウイズ・ユー」と云ふ言葉を加へる、それでなければ「今そこにお持ちですか」と云ふ意味が通じないものだ、中學時分に教へられたことがあつたが、まさか實際はそれほどでないにしても、兎に角さう云ふ云ひ方をしたがることは事實であつて、彼等の國語の性質上、自然さうなるのだと思ふ。獨逸へ行つた私の友達が、ポニーに湯をくれると云ふ時、「ハイス・ワツセル」と云つたところがどうしても通じない、何度くり返しても分らないのでやうやう氣が付いて、「ハイス・ワツセル」と云つたら、「ああ、さうですか」と直

ぐに通じた、「ハイス・ワッセル」でも大概察しが付きさうなものだのに、さつぱりさう云ふ氣轉が利かない、教育のない者ほど尙呑み込みが悪いと云ふ話であつた。萬事がそんな調子であるから、小説の描寫なども不必要に念が入り過ぎ、細か過ぎる傾きがあつて、そのために却つて鮮明を缺き、印象が稀薄になる。これは「饒舌録」の中でも言及したことであるが、元來うそをほんたうらしく感じさせるのには、成るべく簡単に書くのに限る。くどく説明すればするほどうそが一層うそらしくなる。たとへばここに「Aと云ふサラリーマンがあつた」と書くだけで済むものを、「歳はいくつで、何處の學校を出て、何何と云ふ會社に勤めて、いくらいくら月の給を貰つて、……」と、さう書くのと却つて拵へごとじみる。必要がなければ人物の名前なども記さない方がよく、伊勢物語の「昔男ありけり」で澤山である。現代の日本の作家で、ほんたうらしく書く點に於いては徳田秋聲氏を第一とするが、さすがに同氏は此のコツをよく心得てゐる。西洋でも近頃ポール・モーランあたりは大分書き方が東洋風で、思ひ切つて筆を省略してゐる。モーランの物はあまり唐突で分りにくいと云ふ批評があるのは、いつの間にか讀者の頭が西洋物にカブレてゐるのである。

だから、哲學とか科學とか、理詰めで正確を期する記述には西洋流の方が勝れてゐるけれども、文學に於いては必ずしもさうとは云へない。日本の詩や歌や謠曲などを英譯する場合、もしほんたうに原文の味を出さうとするなら、文法的にはどうであらうともサブジェ

クトのないセンテンスを使ふより外にないと思ふ。いくら西洋人だつて日常の會話にいつも必ずサブジェクトとプレディケートを伴ふ譯でもあるまい。半分口の内でも云つただけでも用が足りる場合の方が、實際には多いであらう。現に電報の文句など主格を略するのが常ではないか。

人はよく、日本語はヴォキャブラリーに乏しいと云ふ。私なども青年時代にはしばしば痛切にそれを感じ、口にしたこともあるのだが、さうして事實、乏しいには違ひないのだが、さう云ふ國語にはそれを補ふに足るだけの長所があることを忘れてはならない。

今の中學校や専門學校で教へる國文法と云ふものはどうなつてゐるのか、私たちが學生時代に教はつたのと大して違つてゐないのであらうか。

明治年間は何事につけても西洋文物の模倣時代であつたから、文法迄が英語や佛語の直譯に終つたのは是非もないけれども、私たちの習つたやうな文法が今も教へられてゐるのだとしたら、全く有害にして無益なものである。その後さつぱり用がないので文法の本などついぞ覗いたこともないから何んとも云へないが、もう今日は獨創的な國文法が行はれてゐてもいい頃である。

英語では全然必要のない場合でさへ、體裁のためにサブジェクトを置かないと承知しな

い。これに反して日本語に於いては、少くとも詩や小説の文章には主格を置かないのが普通であつた。平安朝の昔から徳川時代まで、西洋の眞似の流行らない時代はさうであつた。今こころみに雨月物語の「白峰」の冒頭を見ると、

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山のみぢ見すごしがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、……なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葦がちる難波を経て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行く行く讃岐の眞尾坂の林と云ふにしばらく筈を停む。……

と、ここ迄が一つのセンテンスであつて、此の中に主格にあたる言葉は何處にもない。随つて此の長い道中をした主人公が誰であるかは讀者の想像に任せてあるので、「圓位」と云ひ「西行」と云ふ名が出て来るのは、われわれの原稿用紙なら三四枚も先へ行つてからである。尤も國文學の素養のある者なら讀んで行くうちに次第に見當がつくやうに書いてあり、そこに奥床しさがあるけれども、同時に又、主格がないために此れを讀む者は自分がそれらの名所古蹟を見て廻つてゐるやうな感じを起す。主人公の西行の境涯と讀者のそれとが一層切實に結び着けられる。作者がそこ迄を意識して書いてゐようともゐまいとも、かう云ふところが日本文の特長なのである。西鶴などの文章は最も顯著に此の筆法を用ひてゐる。源氏物語の「桐壺」から「花の宴」迄を調べて見ても、冒頭のセンテンスに主格のあるのは、「桐壺」、「帚木」、「紅葉賀」の三篇だけで、その他の五篇は悉く省略してゐる。

思へどもなをあかざりし夕がほの、露にをくれし程の心ちを、年月ふれどおぼしわすれず、こころもかしこも、うちとけぬかざりのけしきばみ、心ふかきかたの御いどまじさに、けちかくなつかしかりしあはれに、似る物なう戀ひしく覺え給ふ。……

と、此れが「末摘花」の書き出しである。もう一つ「空蟬」の冒頭を引くと、
ねられ給はぬままに、われはかく人に憎まれてもなほはぬを、こよひなんはじめて憂しと世をおもひしりぬれば、はづかしうて、ながらふまじくこそ思ひなりぬれなどのたまへば、涙をさへこぼして伏したり。いとらうたしとおぼす。……

此處では「ねられ給はぬままに」から「こぼして伏したり」迄が一つのセンテンスで、「いとらうたしとおぼす」は又別のセンテンスである。ところで最初のセンテンスには、隠されてゐる主格が二つある。即ち「ねられ給はぬままに」……ながらふまじくこそ思ひなりぬれなどのたまふ」者は源氏であつて、「涙をさへこぼして伏す」者は從者の小君でなければならぬ。それから次ぎの「いとらうたしとおぼす」者は再び源氏になつてゐる。源氏物語の文章が今の人に分りにくいのは、かう云ふ風に一つのセンテンスに二つ以上の主格が出て来る時でさへもそれを省略するせいであつて、もし學校の綴り方の時間に生徒がこんな文章を口語體で書いて出したら、必ず訂正されるであらう。しかしながら、それが日本文である限り、口語體であらうと昔の和文體であらうと、此の書き方は文法的に正しいのである。主格を入れても勿論誤まりではないが、どちらかと云へば入れない方が美しいの

である。そんならどうして二人の人を區別するか、一つが源氏の動作であり、一つが小君の動作であることが何處で分るかと云へば、動詞で分る。源氏の方は「ねられ給はぬ」と云ひ、「のたまふ」と云ひ、「おぼす」と云ひ、ちやんと敬語が使つてある。小君の方はただ「伏す」となつてゐる。

さう考へると敬語は單に儀禮上の言葉ではない。文法上立派に一つの働きを持つてゐるのである。

羅典語は主格がなくても、動詞の變化で分るやうに出来てゐる言葉ださうだが、日本語に於いても、敬語を使ふ場合には主格を略すべきであり、そのための敬語と考へていい。禮儀から云つてもその方が正しい。恐れ多いたとへではあるが、「行幸」と云ひ、「行啓」と云ふやうな言葉は、元來主格たるべき御方の御名を口にするのが勿體ないために出来たものではなからうか。

「給ふ」と云ふ動詞は、昔は二た通りに變化した。「給はん、給ひ、給ふ、給へ」と變化する時は、高貴の人の動作を敬まふ言葉になり、「給ひ、給ふる、給ふれ」と變化する時は、高貴の人の前へ出て、自分の動作を卑下して云ふ言葉になつた。これなどは、ちよつと聞くと随分面倒な區別のやうで、學校で教はつた時分には昔の人は厄介な使ひ分けをしたも

んだと思つただけだが、よく考へると、なかなか重寶な役目をしてゐる。なせなら、此の使ひ分けに依つて、「主人が曰く」、「家來が曰く」と、一一斷る必要もなければ、二人の關係を説明する手數も省け、ただ對話を記すだけで双方の身分が分るやうに出来てゐる。かう云ふ風な便利な言葉はその外にもまだ澤山あつた。「御邊」と云ひ、「おん身」と云ひ、「それがし」と云ひ、「妾」と云ひ、「まる」と云ふやうな人稱代名詞も矢張りさうであつた。これらは凡べて、便利と云ふことを目的にして生れたのではないとしても、實際の文章の上では何程か言葉の省略に役立つてゐた。

「給ふ」と云ふ語の第二の變化は、今日では既にすたれてしまつたし、それだけでなく、階級的差別の撤廢されつつある現代に於いて、昔のやうな敬語を復活することは不可能でもあり、好ましくないには極まつてゐるが、しかし今でも「おつしやつた」、「いらした」、「遊ばした」、「せられた」、「なさつた」と云ふ程度の敬語は生きてゐるのだし、「給ふ」だつて第一の變化の方はまだすたれた譯ではない。第二の變化の方も、それに代つて自分を卑下する言葉はある。「僕」と云ふのを「わたくし」と云ひ、「はい」と云ふのを「へい」と云ひ、「です」と云ふのを「ございます」と云ふ類は皆さうである。だからそれが使はれてゐる限りに於いて、主格を略すことが出来る。

「私」と云ふのに「アイ」と云ふ言葉しかなく、「はい」と云ふのに「イエス」と云ふ言葉しかない英語は、便利で簡単なやうだけれども、小説などを書く時には却つて不便な場合

が多い。

私は日本の文法の書に、性の區別、ジェンダーの項が設けてあるのを見たことがない。少くとも私の學生時代には、「彼女」「彼女等」と云ふ直譯の代名詞を除いては、日本語にはジェンダーがないもののやうに教へられてゐた。

けれども昔は「妾」と云ひ、「御許」と云ひ、「御前」と云ひ、それらがさう規則的に使はれてゐなかつたにせよ、兎に角代名詞にジェンダーがあつた。現代に於いても歐洲語のやうに一つ一つの單語に性はないけれども、男の話す話と、女の話す話とは、實際にはちやんと區別が附く。小説の中の會話を讀んでも、男が云ふのか女が云ふのかは直ぐに分る。それは主として前段に述べたやうに、「ね」、「わ」、「わよ」、「だわよ」、「てよ」、「の」、「のよ」等の捨て字に依つて分るのであるが、その外にも「しない?」「しなくつて?」等の女性特有の云ひ方がある。「下さい」と云ふ時に、女だつたら「くれない?」「と、か、「頂戴」とか、「頂戴な」とか云ふのが普通である。食物の味を形容する「うまい」と云ふ言葉は關西地方では女は決して使はない。女なら必ず「おいしい」と云ふ。女が「うまい」と云へば「巧み」と云ふ意味に限られてゐる。尤も歐洲語に於けるジェンダーは、たとへば獨逸語で太陽が女性だつたり月が男性だつた

りするやうに、必ずしも人間の男女の區別ばかりには使はれてゐない。それはそれで、澤山の代名詞が重なつたりする時に、それらの代名詞の指示する物を互ひに區別することが出来、さう云ふ點で役に立つてゐるけれども、會話に性の分ちがないのは、小説家に取つて此の上もなく不便である。恐らく此れは世界中で日本語だけが持つ特長ではないだらうか。支那語にだつて多分かう云ふ區別はあるまい。

従つて西洋の小説では、「と、彼女が云つた」「と、彼が云つた」と斷らなければ分らなくなる。彼の國の作家は此の「云つた」の頻出を避けようとしていろいろ違つた言葉を置き換へるのに苦心するらしく、嘗て何かの英字新聞にそのパロディーが出てゐたのを見たことがあつた。それを讀むと、「ヒー・セツド」、「ヒー・アンサード」、「ヒー・リプライド」、「ヒー・コンフェツスド」、「ヒー・プロテステツド」、「ヒー・リトートツド」と、あらゆる言葉

を並べてあるが、さうすればする程、苦心のあとが餘計眼について耳觸りになる。のみならず、會話の間に「云つた」を挟むと、喧嘩口論の場面のやうな急迫した情景は死んでしまふ。英語ではよく、一人が云ふ言葉を二つに分けて、「と、彼は云つた」を間へ挿入するやうにする。――

「はい、私もさう思ひます。」

と彼は云つた。

と書くべきところを、

現代口語文の缺點について

「はい、」

と彼は云つた。

「私もさう思ひます。」

と云ふ風に分ける。思ふにかうすると受け答へる間に地の文が這入らないで、いくらか應酬ぶりが生き生きとするからであらう。

會話をする者が二人に限られてゐる時はまだ始末がよいけれども、よく彼の國の小説にある晩餐會などの場面、大勢の淑女紳士たちがサロンに集まつて、彼方の隅や此方の隅から警句が飛んだり、舌戦が挑まれたりするやうなところになると、西洋の作家はそれを明瞭に書き分けるために随分忙しい思ひをするらしい。全體さう云ふ賑かな席の雑談の空氣を生き生きと描寫することは、いづれにしても相當に作家的修業を要する仕事ではあるが、日本語のやうに男と女の區別がつき、「僕」、「わたくし」、「わし」と云ふやうな代名詞に依つて年齢や身分の相違を現はすことの出来る國語は、そんな場面に餘程面倒が省ける譯である。

尙ついでながら、普通われわれは小説の中の會話と地の文とを分つために「」の印、カギを用ひる。これは英語の第一第二クォーテーション・マークにあたるものだが、此の

ギも日本語に於いては實はそれほど必要はない。

徳川時代の作品にもカギはしばしば用ひられ、そのカギの肩へ、しやべつてゐる人の名前の頭字を入れたのがある。たとへば小春と治兵衛の會話なら、小へとして小春の言葉を書き、次ぎに治へとして治兵衛の言葉を書くやうにする。けれども此れは會話と地の文とを區別するためと云ふよりも、むしろ話し手と話し手とを區別するためのものであつた。當時は話し手が變る毎に行を改めることをしないで、ずっと書き綴ける習慣になつてゐたから、會話が幾つもつながる場合にはカギを入れないと分りにくかつた。が、それに反して會話から地の文へつながら場合には、口語と文章話とが截然と分れてゐた時代であるから、そんな印を使ふ必要はなかつたであらう。

今日われわれの作品に於いては、會話は話し手が變る毎に一行を改めるのが通例になつてゐる。その上口語と文章語との區別も、昔ほどハッキリとはしてゐないものの、「」のである口語を用ひる限りはまだまだ相當に隔たりがあつて、たとひ續けて書いたにしてもそんなに紛れ易くはない。「」のである口語はその點に於いて、「あります」「や」「ございます」「口調に比べて、たしかに小説の文體としては便利である。私は歐洲語の實際をよく知らないからあまり口幅つたいことも云へないけれども、思ふに西洋の口語と文章語との距離は、われわれの現代の作品に於けるそれよりも一層近く、紛らほしいのではなからうか。さうだとすれば此處でも日本の作家の方が得をしてゐる勘定である。

現代口語文の缺點について

以上に述べたやうな日本語及び日本文の長所は、誰よりも先にわれわれ小説家が最もよく心得てをり、それを充分に活用してゐなければならぬ筈である。然るに不思議にも事實は反對なのである。

一つの新しい時代が來れば、藝術の上でも舊套を脱しようとする運動が起り、在來の傳統を破つた若若しい手法が生れるのは言を待たない。明治の文人が維新以來の時勢に應じて口語體と云ふ自由な文體を創めたことは、平安末期の和漢混交體と共にたしかに文學史上に於いて特筆される功績であつた。さうして又、それと同時に西洋風の調子の云ひ廻しを取り入れたことも、當時に於いては必ずしも無益な努力ではなかつた。それはあの頃に於ける歐米模倣の一般風潮に捲き込まれた結果ではあらうが、さうだとしても、一度は通つて來なければならぬ道程であつたかも知れない。鹿鳴館の舞踏會のやうな、たわいのない、笑ふべき模倣ではなかつたかも知れない。私はここで懺悔をしなければならぬが、有りていに云ふと、われわれの口語體が最も西洋臭くなつたのは自然主義勃興前後の時代、ちやうど私などが文壇へ出かかつてゐた時分からであつて、紅葉や美妙齋の頃には、まだ雅俗折衷體の臭味が脱け切つてはゐなかつた。その證據には、今でもあの頃の文體を守つてをられる鏡花氏などの作品を見れば、思ひ半ばに過ぎるであらう。即ち年代から云

へば、明治の末期、或ひは大正の初期頃から顯著に西洋風になり始め、その後は日に日にその傾向が急激になつて遂に今日の狀態を來たしたもので、私なども多かれ少かれ勢ひを助けてゐるであらう。が、その功罪は兎も角もとして、最早や今日では、明治以來歐化の方向のみを辿つて來た文體に何等かの變化を生じてもいい時期ではあるまいか。ここらでわれわれの國語の性質を考へ、その長所を生かすやうに努めても、まさか時勢が逆返りする心配はあるまい。

もともと西洋と日本では言葉のジニアスが違ふのであるから、模倣したところで程度は知れたものである。そして模倣すればする程、日本文としては醜くなり、分りにくくなる。早い話が翻譯物を見てもさうではないか。西洋の作品をわれわれの口語體に直すと、大概の場合原文よりは冗長になるので、日本語と云ふものは不便な國語だ、歐洲語と同じ事を表現するのに餘計言葉數を費しながら意味は却つて不明瞭になると、よくそんなことを云ふ人があるけれども、一つの國語を直譯風に他のもう一つの國語に移せば、何處の國の言葉でもさうならざるを得ないのである。まだしも歐洲語を日本語に直すのだつたら曲りなりにも意味は通じるが、その反對の例を考へてみるがいい。和歌や俳句の英譯がいかにか長たらしく、原文の二倍三倍の文字を費しながら、殆んど内容が違つたものになつてゐるのは、われわれのよく知つてゐることではないか。さう云ふ場合、日本語のやうな簡便な云ひ廻しを持たない歐洲語では、直譯しようにもする道がないので、結局パラフレーズす

るより外はなく、翻譯と云ふよりは一種の註釋のやうになつてしまふ。もしわれわれが西洋物を譯するのに、直譯體に依らないで純然たる日本風の表現法を取るとしたら、むしろ原文より短かいくらゐになることは、鷗外漁史の「即興詩人」などを見ても分る。

これを要するにわれわれの書く口語體なるものは、名は創作でも實は翻譯の延長と認めていい。故有島武郎氏は小説を書く時しばしば最初に英文で書いて、然る後にそれを日本語に直したと聞いてゐるが、われわれは皆、出來たらそのくらゐなことをしかねなかつたし、出來ない迄もその心組みで筆を執つた者が多かつたに違ひない。それは努めて表現を清新にするための手段でもあつたけれども、正直のところ、美しい文章、ひびきのいい文章、——と云ふことよりも、先づ第一に西洋臭い文章を書くことがわれわれの願ひであつた。斯く云ふ私なぞ今から思ふと何んとも恥かしい次第であるが、可なり熱心にさう心がけた一人であつて、有島氏のやうな器用な眞似は出來なかつたから、その反對に自分の文章が英語に譯し易いかどうかを始終考慮に入れて書いた。西洋人はかう云ふ云ひ廻しをするだらうか、西洋人が讀んだらどう思ふだらうか、と、それがいつも念頭にあつた。

誰であつたかが、幸田露伴氏は非常に長いセンテンスを書く、時とすると一ページもつづく程のがあると云つてゐたが、これは私も夙に氣が付いてゐたことで、露伴先生の文章と

云へば、層層壘壘と句を重ね、言葉を疊み、いかにも呼吸の長い、息の深い感じを起させるのは、主としてそのためであつて、現存の作家中長いセンテンスを書く點に於いては恐らく先生を随一とするであらう。その外には泉鏡花氏、里見弴氏、宇野浩二氏などが長い方だが、概して大正期以後の作家の物は、一つ一つのセンテンスが短かい。若い人ほどさうのやうである。

私の見る所を以てすれば、これは關係代名詞と云ふ重寶なものない日本語を以て、歐洲文の組み立てを模倣した結果であると思ふ。英語のセンテンスの最も簡單なる形、——

何何ハ何何デア

と云ふ語法が、何處迄もわれわれの口語體に附いて廻つてゐて、而も此の形式を備へた一つのセンテンスと、他の一つのセンテンスを結びつける言葉がない。尤も全然ない譯ではなく、「何何が何何シタ時ニ、何何が何何シタ」と云ふやうなのは云へるけれども、「何何ハ、何何が何何シタトコロノモノヲ、何何シタ」と云ふやうな、英文法で云ふ從屬的クローズが附く文章は、云つて云へなくはないにしても明瞭を缺き、そんなクローズが二つ三つも重なつて來たら到底分らなくなつてしまふ。だからさう云ふ文章を日本語に譯さうとすると、いかに忠實な翻譯者でも一つのセンテンスには譯し切れないで、二つにも三つにも分けることになる。(岩波から出てゐる久保勉氏譯の「ケイベル博士論文集」は原文の關係代名詞を生かすやうにしてありながら、明晰さを失つてゐない。あれなどは先づ例外

の名譯と云つてよからう。譯者の苦心が思ひやられる。かう云ふ場合、昔の日本語では前に引用した源氏の「空蟬」の一節がいい例であるが、ああ云ふ風に幾つものクローズの中にある不必要な主格を略してしまひ、時に依つては極く肝心な主格だけを入れるので、却つて意味がハッキリするし、どんなに長いセンテンスでも割りに紛糾を來たすことなく續けられる。そのみならず掛け言葉と云ふものがあつて、二つの主格、——或ひは主格と目的格、その他いろいろの場合、——を一つの動詞又は形容詞で受けることが出來、關係代名詞よりもつと便利な働きをしてゐた。ところが西洋流に「何何ハ……」「何何ガ……」と一つ一つ主格を入れると、「ハ」だの「ガ」だのが徒らにめまぐるしいばかりで、澤山の動詞がそれらの孰れを受けてゐるのだから見分けがつかない。そこで仕方なくクローズを獨立させて、別のセンテンスにするやうになる。

英語でも規則動詞の過去の形には必ず語尾に *ed* の音がつく。しかしながら、日本語のやうに動詞がセンテンスの終りへ來ることは稀であるから、それほど耳ざはりではないけれども、われわれの口語では、殊にセンテンスの短かいものでは、どうしても「る」止め「た」止めの頻出を免れられない。

私は敢て「た」止めの多い文章が悉く悪文だと云ふのではない。少くとも「た」の音や「る」の音の繰り返しは、音樂に於ける鉦や太鼓と同じやうに拍子を取るようになる譯だから、表現にテムポを與へようとする時は、「た……た……た……た」と行くのは悪くはない。實際「た」止めの文章の持つ魅力の大半は、此のリズムの感じから來る。名文家と云はれる人は此のリズムを非常に生かして使つてゐる。「る」止めでも同様な譯であるが、「た」のやうに齒切れがよくないので、効果が薄い。「た」の方を太鼓とすれば、「る」の方は木魚ぐらゐにしか響かない。

今日は何事もテムポの世の中であるから、拍子入りの文章が然く盛んに行はれるのも或ひは偶然でないかも知れない。兎に角「た」止めの文章は齒切れがよく、爽快、新鮮、剛健と云つたやうなものには適するが、繊細なもの、優婉なもの、暗示的なもの、象徴的なものを云ひ現はさうとするには、決してふさはしい文體ではない。

前にもちよつと觸れて置いたやうに、日本語の表現の美しさは、十のものを七つしか云はないところ、言葉が陰影に富んでゐるところ、半分だけ物を云つて後は想像に任せようとするところにあつて、眞に日本的なる風雅の精神と云ふものはそこから發してゐるのである。尤もかう云ふと、それだから日本語は不完全な國語だ、十のものを七つしか云はないのでは舌足らずがしやべるやうで、到底歐洲語のやうに、説いて委曲を盡すことは出來な

い、と云ふ人があるかも知れない。それは人々の考へやうだから、一概には片附けられな
いけれども、私に云はせると、全體人間の言葉なんてさう思ひ通りのことを細大洩らさず
表現出来るものではないのだ。手近な例が料理法の本だとか、手品の説明書などを讀んで
も、それが日本文であらうと英文であらうと、圖解でも這入つてゐなかつたら中々分るや
うには書いてゐないではないか。言葉と云ふものはそれほど不完全な、微細な敘述になつ
て來ると一切實用にならないものなのだ。試みに鰻をたべたことのない人に鰻の味を分ら
せるやうに説明してみろと云つたつて、何處の國の言葉でもそんな場合の役には立つま
い。然るに西洋人と云ふものは、なまじ彼等のヴォキヤブラリーが豊富なために、さう云
ふ説明の出來得べくもないことを、何とか彼とか有らん限りの言葉を費して云ひ盡さうと
して、そのくせ核心を掴むことは出來ずに、愚かしい努力をしてゐるやうに私には見え
る。獨逸語は哲學の理論を述べるのに最も適してゐるのださうだが、それにしても作者自
らが此れで充分と思ふ程には決して云ひ盡せはしないであらう。現にシヨウペンハウエル
が「意志と現識の世界」の序文で、「自分の本は一字一句が全體に關連してゐるから、正
しくは二度讀んでくれないと理解されない」と云つてゐるやうに、言葉を費せば費すほど、
全面を同時に具象的に云ひ表はすことが至難になる。さう云ふ點を考へると、少くとも文
學に於いては、日本語のやうに言葉の云ひ表はし得る限界を守つて、それ以上は暗示する
だけに止めた方が、賢いやり方ではないであらうか。

だが、さうは云ふものの、日本語にしても今日の翻譯體を改めて、その本來の傳統的な語
法を復活しさへしたら、ずるぶん細かい心の働きや物の動きを表現することが、——或ひ
は氣分に依つてでも感じさせることが、——出来るのである。それも和文の云ひ廻しが今
日の口語體に全く應用出來ないのなら仕方がないが、いくらでも活かして使ふ道があるこ
とは、既に上來述べて來たところで大體明かになつたと思ふ。

私の知つてゐる限りに於いて、今日の作家で古い手法を上手に活かして使つてゐる人は、
泉鏡花氏のやうな老大家を除いては里見弴氏と久保田万太郎氏の二人である。それが、近
頃のことでなく兩氏とも可なり若い時代からずつとその心がけでゐたらしいのは敬服に値
ひする。さうして而も面白いのは、同じく古法を守りながら兩氏の行き方が全然違つてゐ
ることである。里見氏の方は、思ふに鏡花氏の文章なぞからコツを覺えたものらしく、盛
んに主格を省略してあり、その結果として筆が極めて自由自在に、何處迄でも腰が伸び、
云はんと欲して云ひ得ることなく、殆んどおしやべり過ぎる程に迄、痒い所へ手が届く
やうに行き互つてゐる。久保田氏の方はそれと反對に、出来るだけ言葉數を慎しみ、云は
ないで済むことは成るだけ云はないやうにして、守錢奴が錢を吝むやうに一語一語を惜し
みつつ暗示的に使つてゐる。メーテルリンクの行き方などと稍趣を一にしてゐるが、あれ

で久保田氏が、狭少な下町情調の世界のみでなく、もつと多趣多様な方面にまであの語法を押しひろげることが出来たら、私は文句なく頭を下げるであらう。が、何んにしても此の二人の文章は、日本語の積極的な長所と消極的な長所とを、先づ遺憾なく代表してゐると云つていい。

今の若い人たちの眼からは、里見氏の文體も久保田氏の文體ももう古くさいであらうが、何も此の兩氏のスタイルをそつくり真似ろと云ふのではない。古い語法も活用の方法次第では却つて非常に新しくなる。むしろ現在の口語體の方が、今では一種の型に囚はれてしまつてゐる。さういつ迄も「彼は云つた」「それはあつた」ばかりで押して行くこともなからうではないか。西洋でもアンリ・ド・レニエの文章は、何處が始まりで何處が終りだか分らないやうな書き方だと聞いてゐる。ジョウヂ・ムーアの此の頃の物も、會話に行を改めず、クオーテーション・マークを施さず、地の文の中へ、一つセンテンスに書き込んでゐるところは昔の日本の小説と同じである。殊に近來はジェームス・ジョイスなどと云ふ奇抜な作家が飛び出して來る世の中だから、今に西洋の方が一と足お先に失敬して、主格のない文章なんかを書くやうなことになるかも知れない。

われわれ創作家の心がけもさる事ながら、私は今の小中學校の教師、——就中文法、綴り

方、古典文學を擔當する人人や、教科書の編纂者あたりがもう少し此の點に氣を付けてくれたらどうかと思ふ。云ふ迄もなく、國語の傳統的精神を發揚することは、東洋思想を尊重することである。徒らに左傾思想の取り締まりをするよりは、此の方がすつと有効ではないか。

取り分け私は、今の女學校の先生たちに忠告したい。近頃の女子は綴り方でも手紙の文章でも、全く男子と區別がないやうな書き方をするが、あれは學校がさう云ふ方針で教へてゐるらしい。女子と男子が平等であると云ふことは、女子を男子にしてしまふこと、女性の美點をなくしてしまふことでない以上、そして日本文には、立派にジェンダーの差別が設けてある以上、その折角の國語の機能を亡ぼしてしまふ必要が何處にあらうか。ほんたうを云ふと、もつと高級な小説や論文でも、女性の筆に成るものは一見して男子と區別されるやうに書いたら、随分讀み物に變化が出來て面白いと思ふ。假りに男子の「のである口調」に對して、女子が「あります口調」を使ふのなぞも一つの方法ではないか。さうして此れは、繰り返して云ふが、ひとりわれわれの國語に於いてのみ實行出来ることなのである。

私は自分が小説家であるから主として小説の文體について得失を考へて來たのであるが、

普通日常の實用文で小説の中に含まれてゐないものはないから、私の論旨は殆んど凡べての口語文に當て箴められるものと思ふ。ただ餘程専門的な學術上の論文とか、哲學的の理論とかは、私には畑違ひであるから自信のあることは云へないけれども、あれも何んとかもう少し分り易く、親しみ易く、日本風に云ひ現はせる方法があるに違ひない。一般的にどう云ふ風に改良しろとは云へないながら、獨逸哲學の翻譯書などを讀んで見ても、此處をかう云ふ工合に云つたらもつとハッキリするだらうと思ふやうな所がザラにあつて、一字一句に就いてなら幾らでも缺點を指摘し得る。蓋し西洋哲學の翻譯は翻譯中の難事であつて、理想を云へば翻譯者が原著者と同程度の頭腦を持ち、原著者の思想を悉く消化し盡してから、然る後に全然自分の物として、原文の字句に囚はれることなく表現するに越したことはないであらう。尤もたまには「ケール博士論文集」のやうな例外もないではないが。

但し、ここに、誰でも氣がつく筈であり、早速改良しようと思へばなし得る缺點が一つある。それは用語、テクニクに就いてである。

此の間近松秋江氏が何かの雑誌に、「近頃新聞紙上に現はれる若い人たちの評論は何を云つてゐるのやらサツパリ分らない、新渡戸博士のやうな人が、矢張りあれを讀んでみて分ら

ないと云つてゐた。なせあんなものを始終掲載するのか、新聞紙の見識にかかはる」と云ふやうな氣焰を擧げてゐた。秋江氏の云ひ方は少し極端ではあるが、所謂評論家の文章が讀みづらいことはたしかである。われわれのやうにその方面に馴染みを持つてゐる者が、成るだけ親切に意味を汲み取るやうにして讀めば、まさか分らないことはないけれども、全くのしろうと、殊に新渡戸博士のやうな老人だつたら、いくら學者でも分らないと云ふのが本當であらう。つまり文壇では通用しても一般には通用しないのである。それが論戰などの場合、急ぎ込んで筆を走らせたりしたのは尙更分らなさ加減がひどい。近松氏は此の弊害を、評論家の頭腦の問題に歸してゐるかのやうであつたが、——さうして事實、頭のよしあしにも依るには依るが、——半分以上は用語の撰擇に原因するところがあると思ふ。どう云ふ譯か若い人になればなる程、創作にはわれわれよりもやさしい言葉を使ひながら、論文の場合には馬鹿に澤山の漢字を列ね、何何的何何的と云ふ風に幾らでも四角張つた文字を積み上げ、殆んど語を成してゐないのが多い。そしてそれ程の必要もないのに殊更哲學上の熟語を用ゐる。大衆に向つて呼びかけてゐる人程さうなのは甚だをかしい。

全體日本に於ける漢學と洋學とは、兩極端のやうであつて實は思ひの外縁に近い。今日のわれわれの口語文に於いても、眞に日本的なる和文の文脈こそ廢れてしまつたが、漢文口

調は未だに潜勢力を保つてゐることは前に述べた通りである。そのみならず、明治になつてから、西洋流の物の云ひ方が輸入されたと同時に、漢語や漢字の使用量も徳川時代よりは却つて殖えた。その證據には、明治以後に於ける諸官省の公文書、新聞雜誌等の記事文と、徳川期のそれらに該當するものとを比較して見れば直ちに分る。役人の名前にしては、御老中、若年寄、町奉行、目付、岡ツ引、お小姓、お小姓頭、組頭、お側用人、お馬廻り、勘定方、賄ひ方などと云ふのと、今の内閣總理大臣、總督、長官、知事、參事官、祕書官、刑事、警部、巡査などと云ふのと、どつちがより日本的であるか説明する迄もないだらう。

蓋し漢語風な役人や役所の稱呼はその由來する所が久しく、唐制を模倣した王朝時代に端を發してゐるのであるが、鎌倉幕府になつてからそれが始めて日本風な呼び方に改められ、徳川時代迄すつとさうであつたのが、明治維新と共に、漢字や漢語の使用までが王政の古へに復つたのである。しかしながら、官吏の稱呼を改めることは、人心を新たにすための政策であつたとしても、何故かうまで支那や朝鮮臭くする必要があつただらうか。

それと云ふのは、漢語はいかに日本語に同化されたと云つても元來外國語であるから、西洋の熟語に當て箴める場合に、純粹の大和言葉よりはエキゾチックな感じを出し易く、何

となくハイカラに聞えるせゐであつたに違ひない。たとへばコンサーンと云ふ英語を、「係はり」「係り合ひ」「氣がかり」などと譯したのでは一向耳新しくないが、「干與」とか「關心」とか云ふと變に西洋臭く、意味ありげにひびく。即ち漢語は明治の歐化熱の機運に乗じて、計らずも洋語と握手したのである。

尙もう一つの理由は、日本には昔から科學らしい學問がなく、醫學、天文學、本草學等をすべて支那から學んだ結果、それらの學術上の熟語も漢語をそつくり使つてゐたのが、明治以後に於ける科學思想の勃興と共に、そのまま新來の西洋の熟語へ應用された關係もあらう。しかし漢語でもさう云ふ風に昔からあるものを使つてゐるうちはまだよかつたが、追ひ追ひ學者たちが勝手に漢字を組み合はせて、思ひ思ひに新奇の熟語を作るやうになつてからは、漸くその煩に堪へられなくなつた。そして一時は、新しい熟語を使ひさへすれば新しい思想家であるかのやうに見せかけることが出来たので、此の弊害は今でも全く終熄したとは云ひ難い。私の知つてゐる範圍でも、「觀念」の代りに「理念」などと云ふ随分不思議な哲學上の言葉が出来たのは、つい近年の事のやうに記憶してゐる。「觀念」と「理念」と、學者に云はせたらいくらか感じが違ふのかも知れないけれども、一字か二字の漢字の中へ思想的内容を盛り込まうとするのは無理な話で、さう云ふ人たちは一字一字が意味を持つてゐる漢字の性質に禍され、言葉は符牒に過ぎないことを忘れてゐるのである。

○
 ハイカラな近代的熟語のやうに見えても、案外古い言葉もある。「舞蹈」と云ふ語は枕の草紙に出て来るし、「觀念」と云ふ語は元は佛教の方の言葉で、方丈記の中にも使つてある。その他「藝術」、「文藝」などと云ふ言葉も、今と多少は意味が違つてゐるにもせよ、明治以前にないことはない。そんな譯で、すでに成語として通用するものは改める迄もないけれども、此れから新しく作る熟語、或ひは翻譯する熟語は、もつと日本語らしいものにしたらうであらう。漢語に直すくらゐなら西洋に原語のあるものは寧ろそのままを使つた方が、まだしも此れからの世の中には分り易く、便利ではなからうか。漢字は一字一語であるから、ちよつと考へると簡單に用が足りるやうだが、昔なら知らず、今後の時勢では、殊に四聲の區別を持たない日本人に取つては、——澤山の漢語が重なつて來ると、ただ無意味なる音の累積としか感ぜられなくなるであらう。

○
 イギリス人はアイディアと云ふ言葉を哲學の熟語としても使へば、普通の會話の中にも使ふ。さう云ふ風にわれわれの哲學も、われわれが日常口にするやうな碎けた言葉で云ひ現はすことは出来ないだらうか。況んやそれ程嚴密なる敘述を必要としない、新聞紙上に現

はれる評論の如きにおいておやである。

「觀念」、「概念」等の厄介な言葉を使はないでも、大概な場合は「考へ」と云ふだけで済むことである。然るに多くの評論家は、「知つてゐる」で済むところを「意識してゐる」と云ひ、「餘り」「差引き」「さや」で済むところを「剩餘」と云ひ、萬事がさういふ行き方で、ことさらに漢字を多く使ふ。就中最も眼につくのは「的」の字の亂用である。あれはただ「の」の字に書き換へて差し支へのない場合が非常に多い。たとへば「思想的背景」は「思想の背景」で、「社會主義的文學」は「社會主義の文學」で澤山である。(現在の支那語に於ける「的」の字は「の」の字程にしか使はれてゐない。)それも程度問題であるが、いかなる漢語にでも「的」の字を加へて強ひて形容詞の働きをさせ、それを幾個となく積み重ねるに至つては、先にも云つたやうに音の連續になるばかりで、意味を追ひかけて行くのに骨が折れるから、到底晦澁になることを避け得られない。

○
 純然たる日本語で熟語を作ると、長たらしくなり、纏まりがつかなくなると思ふ人は、農夫、漁師、大工、左官、指物師、塗師屋等の間に使はれてゐる用語を見るがいい。實際、今日眞の日本語らしいテクニクが生きて使はれてゐるのは、彼等の階級に於いてのみである。彼等が日常それで結構用を足してゐる愛すべき言葉、——働きのひろい、細かい、

簡單で氣の利いた言葉は、遠く室町時代頃からの正しい傳統を引き繼いでゐるのである。私は、漢字制限よりもローマ字採用よりも、何よりも先づ用語の矯正と、「新しい言葉の作り方」の改良とが急務であると思ふ。それからでなければ漢字制限もローマ字採用も實行出来る筈がない。

○
かう云ふことは、凡そ筆を執る程の人がみんなで氣を揃へてくれなければ、私一人が突如として異を樹ててみても一向實効のないことである。恐らく世間には私と同様の意見を持ちながら、仕方なしに大勢に引きずられてゐる人が多いであらう。何んとかならないものであらうか。

私の見た大阪及び大阪人

○
銀座に道頓堀のカフェ街が出現して大阪式經營法で客を呼んだり、法善寺横丁の「鶴源」がその裏通りに開業すると云ふ時勢になつては、東京人が上方に對してケチな反感を抱いても追つ付かなくなつてしまつたが、明治の末年頃、少くとも私の青年時代には、あの何んとか云ふ上方見物の落語にあるやうな江戸つ兒のプライドが東京人の間に残つてゐた。今の東西松竹の社長、白井、大谷兩君が歌舞伎座の株を買ひ占めて故田村成義氏を追ひ出さうとした時、當時の世紀末的江戸つ兒が魚河岸の兄哥連を先頭に立てて大反對を唱へ、松竹の野心に一頓挫を來たさしめたことがあつたのは、私の記憶に尙新なる所である。然るに今日では、江戸つ兒のプライドは勿論のこと、江戸つ子それ自身が東京に居なくなつてしまつたのだから世話はないが、しかしやつぱり江戸生粹の傳統が幾分か餘命を保つてゐる社會では、それが全然跡を絶つたとは云はれない。例へば左團次や菊五郎がめつたに上方の劇場へ來ることがなく、たまにあつても京都や寶塚や神戸あたりの舞臺に出るだけ

で、道頓堀の小屋にかかるとが殆んどないのは、どう云ふ譯か。此の兩人は決してコセコセした料簡の人ではないが、東京の歌舞伎俳優中で趣味や氣質が最も江戸つ兒的であるから、恐らく關西の地方色なり人情風俗なりが彼等の潔癖に觸れるのであらう。彼等は人氣商賣であるから口に出して明白には云はないけれども、私は自分の経験から推して大凡そ想像がつくのである。

東西歌舞伎俳優の交換は徳川時代にも普通に行はれたやうであるが、江戸の文人にして關西へ歸化した者が幾人ぐらゐあつたか、それともなかつたか、私はそのことをよく知らない。が、私の知友の範圍では、逆に此方から東京へ行く者の多いのに反して、向うから此方へ移住した者は殆んど數へる程しかない。一番手近な所では、志賀君が若い時分に京都の衣笠村に家を持たれたことがあり、關東震災の前年あたりに再び京都へ来て粟田口に住み、今は人も知る奈良に新邸を構へてをられる。その他楠山正雄君が南禪寺畔に、故小山内薫君が六甲苦樂園や大阪天王寺邊に、それぞれ移住されたことがあるけれども、孰れも長く續かなかつた。殊にあの震災の直後は、われわれの仲間が一時續々と京阪に安住の地を求め形勢が見えたが、それもほんのその時だけの避難に過ぎず、關東の餘震が未だ全く靜まらない間に早くも一人減り二人減りして、皆いつの間にか引き揚げてしまつた。だから今のところ此方に踏み止まつてゐる關東人は志賀君と私と二人だけだと云つていい。その志賀君も、「歳を取つたら矢張り東京が戀ひしくなるだらうね」と、嘗てさう云つてを

られたのを思ふと、甚だ心細い氣がするのである。

われわれの仲間が關西の地を見捨てるのは、東京に居なければ作家の生活を営みにくいといふ事情が重なる原因であつて、昔の江戸つ兒のやうな反感が動いてゐる譯ではなからう。が、關東生れの人間が此方へ移り住んだ當座、少くとも此方の人の肌合ひに同化するまで五年か十年ぐらゐの間、「居心地が悪い」と云ふ程度の不愉快さを忍ばなければならぬことは、今日も尙否み難い事實である。斯く云ふ私自身も四五年前の「文藝春秋」に「阪神見聞録」なる稿を寄せて、大阪の「人間」に對する反感を露骨に述べ、爲めに土地の人の憎みを買つたことを今に忘れない。ただ私の場合には、幸ひにして此方の氣候と食物とが最初から東京よりも自分の體質や嗜好に合つてゐた。私の叔父や親戚なぞの中には、たまに此方へ遊びに来ても白い刺身に箸を付けず、煮物の水つぼいのが物足らず、醬油の仇鹽あだじほつ辛いのが氣に入らずと云ふやうな頑固な江戸つ兒があるが、私は味覺の點に於いては初めから關西好みであつた。そして今では所謂「贅六氣質」に對してさへ何等の不愉快を感じないのみか、むしろ一種の親しみを覺えるやうになつてしまつた。正直のところ、私も此方へ一家を擧げて移つて來た當座は正に罹災民であつて、東京が復興する迄の腰かけのつもりだつたのに、その私をして斯くの如く此の土地に根を生やさせてしまつたのは何んであらう。私は昨冬六甲山麓の岡本の山莊を賣り拂ひ、借家住まひの身の上になつたけれども、それでも上方を離れようと云ふ氣はない。出來得べくんば今後も永久に此の地に腰を

据ゑ、やがては兩親の墓をさへ、分骨して此方のお寺へ持つて來ようと考へてゐるくらゐである。私のやうな純粹の東京者がさうまで此の土地と關係を結ぶやうになつたことを思ふと、不思議な因縁と云はざるを得ないが、それと同時に關西の風土人情に對して、善いにつけ悪いにつけ、私の愛情が日増しに深くなつて行くのは甚だ自然の道理である。で、私が茲に大正十二年以來足掛け十年の觀察に基づいて上方文化の批評をするのも、あの「阪神見聞録」を書いた時のやうな皮肉な興味からでなく、今や第二の故郷たらんとする京阪の地への愛情からであることを斷つておきたい。蓋し私はいつ迄たつても東京人たる本來の氣質を失はないであらう。従つて私の觀察は、やはり何處迄も「東京から移住した者」の眼を以てすることになるであらう。しかしたまたま京阪人の缺點に向つて辛辣な惡口を飛ばすことがあるとしても、それは長年厄介になつてゐる土地の人への老婆心であり、忠告であるから、特に關西の讀者諸君はその積りで讀んで頂きたい。

由來、東京人の上方に抱く反感のうちでも、大阪に對するそれが最も強い。上方嫌ひの左團次や菊五郎も、京都迄は來るけれども、大阪のまん中へは容易に來ない。ほんたうに京阪の様子を知らない東京人がたまに此方へ旅行してみた感じでは、京都なら住む氣になれるけれども、大阪はとて鼻持ちがならないやうに考へる。これは一應當然なことで、昔

から「京大阪」とは云ふものの、「京都は大阪の妾である」と云ふ言葉もあるやうに、眞に東京に拮抗する實力を持つた大都會は大阪以外にないのであるから、何んと云つても大阪が眼の敵にされる譯である。京都は古來王城の地であり、あらゆる古典的文化の淵藪である關係上、いくら鼻ツ柱の強い江戸人でも多少の尊敬となつかさを感じたであらうし、それに又、京都人の性質と云ふものが頗る消極的であるから、ちよつと旅行者が通り過ぎたぐらゐでは、彼等のイヤ味や缺點がさう著しく眼に付かない。然るに大阪となるると、昔から素町人の都であり、何より先に金が物を云ふ土地柄であり、住民の氣象も、活動的、進取的である一面に、すべてがあくどく、エゲツなく出來てゐるのだから、その缺點が積極的に迫つて來る。故に東京人のやうなアツサリした肌合ひの間人は、梅田の驛へ下りたばかりで直ぐに何かしら贅六式の臭味に襲はれ、一遍で參つてしまふのである。どうも肌合ひの相違ばかりは理窟で説明のしやうもないが、大阪式のイヤ味を諒解するのは、あの寶塚少女歌劇の女優たちの藝名を見るのが一番早分りであると思ふ。たとへばあの中のアタの名前に、天津乙女、紅千鶴、草笛美子、などと云ふのがある。かう云ふ名前の附け方はいかにも大阪好みであつて、ここらが最も東京人から見て大阪人の感覺が一本抜けてゐるやうに思はれる所である。兎に角東京の女優にはこんな垢抜けのしない、源氏名のやうな、千代紙のやうな、有職模様のやうな、そして又一と昔前の新體詩のやうな、上ツ調子の藝名を持つてゐる者は一人もあるまい。假りにどんな名女優でも、東京

でこんな名前を付けてゐたら、そのために人氣の幾割かを損すること請け合ひである。私は此方へ来た當座、寶塚ファンの中學生や青年どもが斯う云ふ名前を持って嘯すのを見て、實に變な氣がしたものだつた。あんな齒の浮くやうな名前を氣耻かしくもなく、よくも口に上せたものだと思つた。

私が今云つたことは藝名に就いての批難であつて、素よりその名の持ち主たる女優諸嬢のよしあしを云ふのではないが、それにしてもあの少女歌劇には、ちやうどそれらの藝名が示すやうなイヤ味が付いて廻つてゐるのは事實である。尤もそれも「モン・パリ」などを上演し出してから次第にアクが抜けて來たし、現に私などもレヴュウの變り目毎に見に行く程のファンになつてしまつたが、願はくは今一と息の洗練が欲しい。殊に此の頃のやうにしばしば東京へ進出するのでは、尙更その必要がありはしないか。私は東京のは知らないけれども、大阪の松竹樂劇部に比べると、寶塚の方が美人が多く、粒もよく揃ひ、技藝もずつと上手であり、衣裳や舞臺裝置などにも中々金が掛けてあつて絢爛眼を奪ふものがあるが、臭味と云ふ點になると、寶塚の方が餘計に臭い。元來此處では男の役までも女にやらせるのだから、そこに非常な無理がある。どうしても藝者のお浚ひじみ、三崎座じみる。そこへ持つて來て關西の婦人は音聲が甲高いから、セリフの多い芝居になると、上ずつたキイキイ聲ばかり耳について甚だ聞き辛い。それが「モン・パリ」や「セニヨリタ」のやうなレヴュウになつても、三枚目などが出て來て活躍する時は、藝が達者であればあ

る程騒々しく、おまけにそんな女優たちは「少女」とは云ひ條相當な年増であるから、いよいよ以て三崎座じみることになる。東京人だと、見てゐる方が冷汗を掻くやうな氣がする場合があるけれども、大阪人はかう云ふ點に憶面がないのである。

本場のものを知らない私には聞いた風なことも云へないが、レヴュウの起りは時勢を諷刺する劇の意味であるさうだから、いくらかピリリとした辛味があつていい筈である。搖籃時代の觀音劇場や日本館のオペレットは、非常に粗野であり、幼稚であり、貧弱であつたけれども、多少さう云ふ小氣味のいい所もあつたし、有職模様や三崎座式の臭味などは全くなかつた。寶塚には岸田君の如き江戸つ兒もあることだから、勿論こんな缺點は私が指摘する迄もなく夙に氣が附いてゐるであらう。聞けば今年の春あたりから男女共演の出し物を間へ挟むさうであるから、さうすれば追ひ追ひ見直すやうになるに違ひない。何んにしてもあのデレデレした、シヤナラシヤナラしたイヤ味だけは、我が愛する寶塚のために是非共矯正して貰ひたいと思ふ。

あまり寶塚ばかりを槍玉に上げるのは氣の毒だけれども、筆のついでにもう少し書かして貰ふことにする。

寶塚の歌劇部では、あの豪華絢爛なるレヴュウ舞臺へ出演する女優たちを、歌劇學校の女

生徒と見做して、決して「女優」とは呼んでゐない。だからスタアでもワンサガールでも皆等しなみに「生徒」なのである。で、阪急電車に乗ると、銘仙の衣類にオリヅ色の袴を、裾から脚が二三寸覗くらゐにつんつるてんに穿いて、白足袋に、大概は下駄で、(たまには草履もあるが、靴を穿いたのは一人もない。)お下げ、もしくは束髪に結つて、若いのは十六七歳、年を取つたのは三十歳近くの、女工とも、女學生とも、さればと云つて令嬢ともつかない一種異様な婦人たちが、二三人或ひは四五人づつ連れ立つてゐるのに乗り合はせることが屢々ある。あの沿線に居住する者は誰でも知つてゐることだが、此れが歌劇の生徒の外出時に於ける制服であつて、今では阪急電車情景の一要素となつてゐる。彼女たちのさう云ふ野暮くさい服装を見ると、その下にあの均整の取れた四肢や胴體や素晴らしい脚線美が隠れてゐようとは一寸想像し難い程だが、それにしても、あのくらい又「大阪」の特色を濃厚に出してゐるものはない。思ふに寶塚では、彼女たちを出来るだけ少女歌劇の生徒らしく、可憐に、お上品に、純潔に育てようとして、わざと斯う云ふモツサリした風をさせるのであらうが、——さうして事實彼女たちはその質素な制服の故に衣裳持ち物に贅を競ふ必要がなく、而も比較的待遇がいいので、他の劇團の「女優」等よりは品行方正に違ひないが、——東京でこんな氣の利かぬ服装をさせたら、第一人氣にも係はるだらうし、少し生意氣なスタアだつたらとても我慢してはゐないだらう。かう云ふ所に上方の婦人の素直で、おとなしくて、オットリとした性質がよく現はれてゐるやうに思

へる。元來彼女たちはレヅユウの踊り兒や唄ひ手であるから、大いにスマートで、シツクであるべき筈だけれども、それは舞臺に出た時の扮装や姿態の感じだけに止まり、此の、モダン味を全く缺如した殺風景な制服が、却つて何處か似つかはしいやうにも考へられる。

さう云へば、私は今ふつと氣がついたのだが、そのオリヅ色の袴を穿いた彼女たちの顔だちは、大體に於いて雛人形の官女の首によく似た感じがするのである。大勢の生徒の中であるから、クララ・ボウ式の潑刺とした圓顔もないではなからうが、どちらかと云へば中高の、面長の、國貞描くところのお姫様のやうなのが多い。と云ふことは、つまり上方では今でも繪に畫いたやうな古典的の美人を珍重してゐる證據で、關西に於ける女流スポーツ界第一の美人と云はれるテニスのア嬢などの顔を見るとそれがよく分る。ア嬢は私も一面の識があつて美人たることに異議はなく、そしてお姫様らしいのがその境遇に似合つてもゐるが、新舊兩社會、ハイカラ風昔風を通じて、いつたいにああ云ふ美人が多く、さうでない顔でもさう見せるやうに作る。だから寶塚の生徒なども、舞臺へ出るときは鼻筋へ特に白くおしろいを塗つて顔を少しでも餘計中高に見せようと苦心する。日本物の場合はそれで差支へないが、西洋物のレヅユウの時でも矢張りさうするので、佛蘭西人形の胴體へ官女の首をすげたやうになる。私が住野さへ子を最負にするのは、肢體の美に加へて顔の輪廓に異色のある點を買つたのだが、そのさへ子でさへ鼻を濃く塗る癖があるのは甚

だ賛成しない。上方にだつて丸ぼちやの美人もゐるのだから、さう云ふ型の顔の人は遠慮なく個性美を發揮して貰ひたいものである。

友人長野草風氏の説に、京都の町を歩いてゐると、昔の繪卷物に描かれてゐる庶民の顔にそつくりの顔をしばしば見受ける、繪卷物の繪が如何に忠實な寫生であるかが此の一事でも分ると云ふ話であつたが、これは草風氏のやうな畫家でなくとも、少しく注意して觀察すれば誰しも氣が付くところであらう。東京人と、京都人と、一人々々を取り立ててみたのでは別段相違もないやうであるが、關西の土地へ來て、往來を歩いてゐる市民たちの風貌をみると、いかにも東京には見られないと思ふやうな顔に打つかる。假りに彼等の羽織や、インパネスや、背廣服を脱がして、烏帽子狩衣や直垂を着せ、女には市女笠を被らせ、或ひは頭を下げ髪にさせたなら、宛として伴大納言や一遍上人繪卷中の街頭の光景が現出するであらう程に、その風貌は數百年以前の佛を傳へてゐる。京都に比べると大阪はそれ程でないけれども、前者をお能の面とすれば、後者にも文樂の人形の首ぐらゐの古さはある。京都人の顔に王朝乃至鎌倉期の匂ひが残つてゐるものなら、大阪人のそれにも、慶長元和、或ひは元祿時代程度の非近代味が感ぜられなくもない。

さう云ふことが原因かどうかは分らないが、大阪の婦人の洋装は何んとなくスマートな感

じが乏しい。近來心齋橋筋や梅田邊を歩いてゐると、時々衣裳持ち物に五分の隙もない素晴らしいモガを見ることがあるが、そんなのは大概東京から遊びに來た旅行者が多いやうである。關西に於ける最もハイカラな區域と云へば阪急の夙川から御影に至る沿線であつて、あの邊に住んでゐる若夫人や令嬢たちは、随分洋服の眼も肥えてゐるし、趣味も進んでゐるし、金に不自由はないのだから、毛皮、手袋、ハンドバックの好み迄ソツのあらう筈はないのだけれども、それでゐて何處かスツキリとしない。さうかと云つて、勿論田舎臭いのも安つばいのものもない。品のいいことは飽くまでいいのだが、つまり前に云ふ寶塚の少女と同様に、シヤナラシヤナラして、お嬢様が洋服をお召しになつたと云ふ感じが、どうしても抜け切れないのである。いつたい和服の色合ひでも關西の方が關東よりも派手であつて、阪神沿道の暖國的風景、——濃い青い空、翠緑の松林、白い土の反射に、そのケバケバしい色彩が非常によく調和することは事實であるが、その和服の派手な好みをそつくりそのままクレプ・ド・シンのドレスなどに持つて來るのは一寸考へ物だと思ふ。彼女たち自身はそんなつもりでないかも知れないが、今も云つた氣候風土の關係で無意識のうちにならざるであらう。兎に角私などが見ると、阪神婦人の洋装には友禪模様の振袖の情趣が最後まで附いて廻つてゐる。綺麗で、きらびやかなことは無類だけれども、それが餘りに纖弱に過ぎ、優美に過ぎて、縮緬の長襦袢を着たのと撰ぶ所なく、最も肝心な洋服の「精神」とでも云ふべきものが缺けてゐるやうに思はれる。きれ地は質素な紺サ

ジでも、神戸あたりの混血児のオフィス・ガールの方が矢張り本當の洋装をしてゐる。これは色合ひばかりでなく、彼女たちの骨格や動作などが餘程關係してゐるに違ひない。關東の方は昔から野蠻な氣風があり、女でもキビキビしたのが喜ばれたのだから、それが現代のフラツパアの心意地と比較的容易に合致して、座作進退や表情法などもヤンキー式に同化する可能性が多いのに反し、關西の方は服装ばかり取り換へても、體のこなしに數百年來のしとやかな習慣が沁み込んでゐるのではあるまいか。東京の下町では、婦人の洋装なぞと云ふものが絶對に見られなかつた私の幼少の時分、若い女が夏になるとよく腕まくりをしたもので、私の母なぞは浴衣の兩袖を肩の上までたくし上げて團扇を使つてゐたことがある。それが芳年の錦繪にもあるやうに二十臺三十臺の婀娜な年増のすることなので、肉づきのいい二の腕の肌を誇示する氣持ちもあつたらしいから、丁度現代の婦人がワンピースの夏服を着て發達した筋肉美を見せびらかすのと變りはない。蓋しかう云ふいなせな風は辰巳藝者などから始まつて次第に堅儀な商家の婦女子までが眞似るやうになつたのだらうが、恐らく京大阪では、「御料人さん」や「いとはん」は勿論、藝者でもそんなアラレもない様子をする者はなかつたらう。従つて女學校時代から洋服で育てられた今の大阪の婦人たちも、家庭に於ける母や姉たちの物腰恰好に知らず識らず感染してゐて、洋装の場合にも自然とその癖が出るものと見える。元來若い女性の洋装と云ふものは、その服の下に豊艶なる肉體の詰まつた感じ、たつぷりとしたスタツフが一杯になつて

か、くもくしてゐる心持ちが見えなければならぬ。近頃流行の「イット」と云ふ言葉に當て嵌まるものは即ちそれなのだが、關西の上流婦人にはその感じが少しもない。脚や踝は流石に美しく、大根のやうなのは殆んどないけれども、その代り、腰から臀へかけての線が、いかにもきやしやで、淋しくて、而も歩く度毎に腰の關節がヒョロヒョロして、上體がしなな波を打つて、胸が前の方へ遊び出るのである。西洋の婦人の歩く後ろ姿を見ると、左右の臀の肉が交互に出たり這入つたりするのがハッキリと分つて、その大きな骨盤の上に胴體がシツカリ戴つかつてゐるが、彼女たちの臀部にはスカアトがひらひらしてゐるばかりで、殆んど肉の感じが無い。これは體格が纖弱な上に足の運びが小刻みのせゐるからであらう。そのくせ彼女たちは、昨日は錦紗の訪問服にフェルトの草履、今日は佛蘭西絹の夜會服に踵の高い舞踏靴と、毎日のやうに扮装を換へて、和服の時と洋服の時とは歩き方にも區別をつけると云ふ風な苦心を拂ふらしいけれども、たとへば踵の運動などが妙になよなよとしなを作つて、外輪に歩いてはゐるものの、何んとなか間伸びがして、日本臭い。要するに彼女たちの洋装の姿態は、何處までも上品ではあるが、ケバケバしく、うすつべらで、ヒョイと突けば倒れるやうな脆い感じがするのである。

反對に又、女學生の洋服姿の無作法で薄汚いことは誠に驚くばかりである。私は近年の東京の女學生風俗をよく知らないが、いかに紺づくめの制服を着せられてゐても、東京の女學生は矢張り何處か垢抜けがしてゐたやうに思はれるのに、大阪の方のは、二三の特殊な

女學校を除いては、殆んど田舎の女學生と撰ぶ所はない。彼女たちが洋服を着るのは、長屋のかみさんやおさんどんがアツパツを着るのと同じく、唯もう便利と實用の一點張りで、全然女の身だしなみと云ふことを度外視してゐるやうに見える。學校時代からおしやれをするには當らないけれども、今少し手入れと着こなしに注意して型を崩さないやうに努め、靴下に皺が寄つたのなどは氣を付けて直すやうにしたらどうであらう。少くともブレッシングやブラッシングの方法ぐらゐは、新時代の婦人のために學校の當事者が教へてやる必要がありさうに思ふ。少女の時分にあんな風で、卒業してから急に粹な洋服を着ようとする所に無理が起るのではあるまいか。

私は、大阪人と東京人との肌合ひの相違を、何よりも彼等が話す「聲」に於いて強く感じる。言葉の相違よりも聲の相違の方に東西の差別がハッキリ出てゐる。將來交通がますます頻繁になるに従つて上方辯と東京辯との隔たりは次第になくなるかも知れないが、彼等の咽喉から發せられる聲色の相違は、恐らく此の兩地方の空氣や地質や溫度等と關係があるであらうから、容易に消滅しないであらうと考へる。

長らく關西に住んでゐる私がたまに東京へ出かけて行つて、眞つ先に「東京だなあ」と云ふ感じを受けるのは、あの、東京人の話すカサカサした、乾涸らびたやうな聲である。斯

く云ふ私自身の聲も多分東京風なのであらうが、始終此方にて大阪人の話しごゑを聞き馴れた耳には、東京人の發音は、ちやうど名物の空ッ風のやうに、ガサツで、つやがなく、頗る殺風景に聞える。男の場合にはそれでも齒切れのいい味があるけれども、女がああ云ふ聲を出すと、非常に荒んだひびきを帯びて、聲の主までが肌理の粗いガサツな人間のやうに思へて來る。

東京の俳優のうちで、菊五郎の藝が(その舞踊を除いては)最も京阪の人に親しみにくく、理解されにくいのは、彼の純江戸風な發聲法に因る所が多いのではあるまいか。東京で割りに人氣のない宗十郎が、上方ではさうでもないらしいのは、確かに彼の聲のせりである。あの粘つこい、齒切れの悪い、ねちねちした聲は、東京人には嫌はれるけれども、上方人にはそのイヤらしさが分らないに違ひない。幸四郎、吉右衛門、猿之助等も東京人にはあるが、それぞれ聲の出し方に誇張があり、左團次のも線の太い荒削りの所に特色があるけれども、菊五郎の世話物などに使ふセリフの聲は、全く市井の江戸つ兒が日常に用ふるそのままの聲であつて、ちよつと聞いたところでは、いかにも無愛想で、取り付きにくい。羽左衛門のも可なりぶつきらぼうだけれども、それでも菊五郎程でない。あれは無技巧のやうに見えてその實菊五郎でなければ企て及ばない技巧を凝らしてあるのだが、大阪人には容易にあの味は分らないであらう。尤もああ云ふ聲は淡白で素つ氣ないだけであるが、大阪人の聲は往々ドスが利き過ぎるので、東京人が聞くと、たまらない不愉快が込み

上げて来て、胸糞が悪くなることがある。いつぞや坪内先生が何かの雑誌で曾我廼家五郎の藝風を批難してをられたのを讀んだことがあつたが、——そして私もその論旨に同感を禁じ得ないのだが、——あの五郎の芝居が東京人にあくどく感ぜられるのは、半ば以上、あの悪く底力のある、濁つた、破れた、太い、粘り強い、映畫説明者や浪花節語りのそれを想はせる聲に原因してゐると思ふ。試みにあの聲を新派の喜多村などの聲と比較してみるといい。後者は、冴えて、テキパキして、りんりんと澄み渡つてゐるのに反し、前者にはゲーゲー云ふ野卑な音おんがあつて、あれを聞いてゐると、絶えず地響きのやうな呻りが耳の奥の方でビンビン云つてゐる。ひとしきり五郎が故十郎と共演してゐた時代には、十郎の聲が比較的アツサリしてゐてセリフ廻しが輕妙洒脱であつたために、五郎のあくどさが一層目立つて實にイヤ味な役者に見えた。その外落語の春團治などもあの地響きのする聲を出す。文樂の太夫などはさすがにあの聲を美化する術を知つてゐて、さう聞き辛いことはないが、しかし大概の大阪人が皆あの聲を持つてゐる。普通に話をする時は十人十色であるけれども、議論や喧嘩の場合、言葉に力を入れる時は不思議にああ云ふ聲になる。色の生つ白い年の若い優男などで、不斷は女のやうな細い聲で語る者が、何かのはずみに矢張りあの聲を出すのを聞いてひどく不調和な氣がすることがある。いや、實を云ふと男ばかりではない、驚いたことには女でもあれを出すのだ。私はしばしば妙齡の婦人のなまめかしい咽喉から、あの色消しな太い聲が飛び出したのを聞いてビツクリした。

さう云へば大阪には、婦人で太棹の藝者のやうな地聲の人が珍しくない。顔を見てゐると玉を轉ばす嬌音の持ち主かと思はれる美人が、話をさせると鶯鳥のやうな聲を出すので、何んだか大變その人が氣の毒に思へることがある。現に私はさう云ふ婦人を二三人知つてゐる。東京にも搜したらないことはなからうが、ちよつと思ひ出せないところを見ると、非常に稀なのに違ひない。

それから、巻き舌と云ふものは江戸辯の特長のやうに思はれてゐるけれども、實はさうでない。京都人の使ふのは聞いたことがないが、大阪人はよく使ふ。そして、東京のべらんめえ口調は威勢のいい割りに毒氣がないが、大阪人が「ガン」と一つ行つたらか「など」と云ふ時に使ふ巻き舌は、へんに聲が地這ひをして蛇のやうに絡み着いて来る。私などには此の方がすつと凄く聞える。

○
前項に於いて大阪人の聲の缺點ばかりを挙げたが、長所も無論大いにある。そして私は、全體から云ふと、東京人よりも大阪人の聲の方をより美しく感ずる。公平に見て、男は五分五分だとしても、女に關する限り、大阪の方に軍配を上げる。

女でもさつき云つた鶯鳥のやうな地聲や、浪速節式の太い聲は困るが、しかしそんなのばかりではない。十人のうち七人までは美しい聲の持ち主だと云つていい。私は劇場で俳優

のセリフを聴く時以外に日本語の發音の美しさなどに注意したことはなかつたのだが、大阪へ来て日常婦人の話し聲を耳にするやうになつてから、始めてそれをしみじみと感じた。京女の言葉づかひが優しいことは昔から知られてゐるが、京都よりも大阪の方が一層いい。京都人の發音は、東京に比べればつやがあるけれども、大阪ほど粘つくくない。だから例のドス聲を出すやうなイヤ味もない代りに、それだけ魅力にも乏しい。私に云はせると、女の聲の一番美しいのは大阪から播州あたり迄のやうである。あれから西や南の方へ行くと又變な訛りや濁音が這入つて汚くなる。此の十年間に大阪から九州に至る國々の娘が幾人もなく私の家へ奉公に來たので、私は彼女等の聲を聞いた經驗に依つてさう感ずる。それについて思ひ出すのは、曾て岡本の家に攝州今津生れの女と、東京の近縣生れの女とが奉公してゐたが、二人を一緒に置いてみると、關東女の聲のスカスカして味も素つ氣もないのが異様に耳に附いて聞き辛かつたばかりでなく、しまひには何んの科もないその女までが嫌ひになつたことがあつた。

東西の婦人の聲の相違は、三味線の音色に例を取るのが一番いい。私は、長唄の三味線のやうな冴えた音色の器樂が東京に於いて發達したのは誠に偶然でないと思ふ。東京の女の聲は、良くも悪くも、あの長唄の三味線の音色であり、又實にあれとよく調和する。キレイと云へばキレイだけれども、幅がなく、厚みがなく、圓みがなく、そして何よりも粘りが無い。だから會話も精密で、明瞭で、文法的に正確であるが、餘情がなく、含蓄がな

い。大阪の方は、淨瑠璃乃至地唄の三味線のやうで、どんなに調子が甲高くなつても、其の聲の裏に必ず潤ひがあり、つやがあり、あたたか味がある。西洋の樂器にたとへれば、東京はマンドリンで、——ひどいのは大正琴で、——大阪はギターである。座談の相手には東京の女が面白く、寢物語には大阪の女が情がある、と云ふのが私の持論であるが、つまり性的興味を離れて、男に對するやうな氣持ちで舌戰を闘はす時は、東京の女は大膽で、露骨で、皮肉や揚げ足取りを無遠慮に云ふから張り合ひがあるけれども、「女」として見る時は大阪の方が色氣があり、魅惑的である。つまり私には、東京の女は女の感じがないのである。

しかし、それは大阪の女が姪蕩であるとか、野卑であるとか云ふ意味でない。東京の方が、アケスケで、お俠きやくで、蓮つばき葉であるだけに、何んもなく擦れつ枯らしの感じがして、却つて下品だ。山の手あたりの、今も京都の風が残つてゐる堂上華族階級は知らないが、所謂上流社會でも近頃はわざと平民振つた言葉を使ふので、ますます優美さや上品さがなくなりつつある。話が「聲」から「言葉」の問題に外れたが、ついでに云ふと、私は東京のあの「遊ばせ言葉」と云ふものが分けても嫌ひだ。「遊ばせ」も程々にすればいいけれども、一つ一つの動詞に悉く「遊ばせ」をつけて、その廻りくどい云ひ廻しを早口に性急にべらべらとしやべり立てるに至つては、沙汰の限りだ。あのくらゐ物々しく、わざとらしく、上品振つてゐてその實上品とは最も遠い感じのするものはない。あれに比べれば大阪

の船場言葉や祇園の里言葉の方が風雅で品のいい響きを持つてゐる。恐らく昔は「遊ばせ言葉」もあんなイヤ味な、偽善的なものではなかつたのだらうが、あれをあんな風に墮落させたのは女流教育家などの罪ではなからうか。大阪で氣持ちのいいことは、どんな上流階級でもあれを殆んど聞かないことである。たまに使ふ者があれば、それは東京からの移住者か、東京かぶれした学校の先生ぐらゐである。

上方婦人の聲のいいことは、琴唄などを謡はせてみるとよく分る。私は東京にゐる時分、琴唄ぐらゐ單調で無味乾燥なものはないと思つたが、それは一つには東京の女のせゐであつた。都々逸や端唄に向く聲で古典的な樂器の音色に合はせるのだから、映りが悪いのは云ふまでもない。あれを大阪の女が謡ふと、單調な中にも絃の音色と肉聲とが微妙な諧調を保つて、淡いながらも空焚きの香の薫りを嗅ぐやうな情趣が湧いて来る。殊に聲の美しい人のを聞いてゐると、成る程昔の姫御前は玉簾たまだれの奥に垂れ込めてああ云ふ聲で謡つたのであらうと思はれて、襦袢うちかけを着た高貴な上臈の姿が髣髴として浮かんで来る。聲の性質からみると、やはり大阪の婦人の體内には傳統の血が濃厚に流れてゐるのである。

○
自分のことを云ふのは烏滸がましいが、元來私は若い時分から聲自慢で、聞き覚えの端唄や長唄を呻つては相當お座敷でもてた方だが、近頃地唄を習つてみると、どうも聲が思ふ

やうに出ない。高い所へ來るとかすれてしまひ、低い所へ來るとへんに力んだ聲になる。おほかた年のせゐであらうとも思つたけれども、江戸唄を謡ふと、今でも昔のやうに自由に聲が使へる。それで、江戸唄と上方唄とは聲の出所でどころが違ふのだと云ふことを痛切に感じた。安來節とか、串本節、あんなちよつとした民謡でも、西國の唄を東京人が謡ふと、節廻しは確かでも、お茶漬けを搔つ込むやうにサラサラとしてしまつて情味が足りない。あの、上方風の、舌にもつれるやうなネチネチした聲でなければ、ああ云ふものはどうしてもしけない。大阪の藝者の江戸淨瑠璃や歌澤などについても、同様のことが云へる譯で、節に間違ひはないのだから何處が悪いと云つて指摘することは出来ないけれども、齒切れが悪く、突つ込み方が足りなくつて、何んとなく江戸前の氣分にならない。東京人でありながら津太夫の跡を襲はうとしてゐる小鞆太夫は唯一の例外であるが、あれなども聽く人が聽いたら物足りない所があるのかも知れないし、假りに紋下まで行けるとしても、攝津とか越路とか云ふやうな大名人の域に達することはむづかしいであらう。私がかんなことを云ふのは外でもない、近頃江戸の音曲が關西を風靡して、生田流の琴曲や地唄など、地元の藝術を習はうとする者が少いのはどう云ふ譯か。私の住んで居る近所でも、長唄や清元の三味線の音は彼方此方に聞えるが、琴や太棹の音を聞くことは殆んどない。長唄は聲の出し方が素直であるからまだいいとして、昨今はまた小唄が流行り出しでゐる。あれは江戸唄の中でも殊に江戸的特色の濃いもので、最も末梢的、廢頽的な感じ

のものだ。ああ云ふものは東京人にも一般向きがしないと云ふのが本當で、長唄を和歌とすればあれは俳句だ。あれを大阪人が器用に謠ひこなしたり、その情調を充分に味出したる出来る筈がない。舞踊についても、山村や井上流の「舞ひ」がすたれて、藤間や花柳の「踊り」に壓倒されて行くのは甚だ慨かましい。敢て郷土藝術などと云ふやかましい問題を持ち出すまでもなく、關西人と關東人とは、生理的に、體質的に、越えがたい差異のあることを思つて、特に大阪方の一考を煩はしたい所以である。

○

嘗て武林無想庵が久しぶりに佛蘭西から歸つて來たときに、「巴里人の生活には一つの極まつた定式ちやうじきがあるけれども、東京の市民にはそれが無い、實に亂脈だ」と云つてゐたことがある。成る程、さう云はれてみれば、私の少年の頃までは東京人の生活にも或る定式があつたけれども、今は殆んどなくなつてしまつたと云つていい。

生活の定式とは何かと云へば、一つの家庭、一つの社會に於いて長い間に自ら出來上つた一定のしきたり——年中行事である。正月には門松を飾り、三月には雛を祭り、五月には幟を立て、春秋の彼岸には親類縁者の間に萩の餅の贈答をする等々のこと。これを家庭について云へば、朝起きる時間、夜寝る時間、朝に夕に先祖の位牌を禮拜する時間、三度三度の食事の時間、又その時の家族達の席順等から始めて、四季の移り變りにつれ、食膳に

上る魚類や野菜なども毎年その時になれば同じやうなものが繰り返される。その外祝儀不祝儀の衣裳、挨拶の云ひ方、祭禮の部屋飾り、屏風、毛氈、幔幕等は云はずもがな、東京ならば春は向島か飛鳥山、秋は團子坂か瀧野川と云ふ風に、花見菊見紅葉狩り等の遊山までも、家庭によつて毎年行く所が極まつてゐたもので、團子坂の歸りには上野の「松源」、向島の歸りには仲店の「萬梅」と、歸りに晩飯を食ふ料理屋までが判で押したやうに定つてゐた。そしてさう云ふときに着る父や母の晴れ着などもいつも同じものであつて、だからその着物を見、その移り香を嗅いだだけでも、なつかしい行樂の思ひ出があざやかに浮かんで來る。恐らく巴里の市民なども、外來の客は別として、何十年となく其處に住んでゐる人々は吝嗇で、勤勉で、つつましかで、衣類などもめつたに新調することはなからうから、帽子外套手袋の末に到るまで衣更への度毎に年々同じものを着換へ、日々の通勤や散策の道筋、立ち寄るカフェ、レストーラン等すべて極まつてゐるのであらう。

私はかう云ふ生活の定式が善いとか悪いとか云ふのでない。今日のヤング・ゼネレーションの人々は、明治時代のブルジョア趣味として必ずやさう云ふものに反感を抱くであらう。が、兎も角も、現在の東京にはそれが亡びてしまつてゐる。残つてゐるのは正月の松飾りぐらゐなもので、雛祭りの行事さへもしない家庭の方が多いに違ひない。これは一つには、關東は關西に比べて文化が若く、その上しばしば破壊的な地震に見舞はれる土地柄であるから、一定の習慣がしつかりと根を据ゑる暇がないのもあらう。けれども、生活

の定式と云ふものは何も明治時代のブルジョアに限つたことはない。舊來のしきたりがイヤならば新しい定法ぢやうはふを作ることゝ出来る。由來東京人は外來の思潮や流行に對して大阪人よりも敏感であるから、西洋風の習慣を取り入れてゐる方面もあるらしいけれども、それが各家庭バラバラであつて、或る者は佛蘭西風、或る者は亞米利加風と云ふ工合で、而もほんの一時の氣紛れだから長續きがせず、始終いろいろに變るので、社會全體に互る一つの規準と云ふものが成り立たないばかりか、却つてますます亂雜になり、めいめいが好き勝手な眞似をする。クリスマスの行事なども、基督教國民でもないものがあんなことをするのは滑稽だと云ふ理窟は別として、あれが一般の習慣になれば又それも情趣があると思ふけれども、あれがいつまで續き、何處まで廣まるかは怪しいものである。服裝についても東京人は随分滅茶苦茶だ。嘗ては文學青年や俳優の間にルバシカが流行つたことがあり、そのうち支那服を着て歩く者が澤山あつたが、又此の頃ではそんなものも影をひそめてしまつた。

ところで關西には、此の生活の定式と云ふものが今も一と通りは保存されてゐる。京都や大阪の舊市内は云ふ迄もないとして、赤瓦の住宅の多い阪神地方でも、あの邊に住んでゐる人々の生活は決してその建て物の外觀が示すやうにハイカラでない。それと云ふのが、あの邊の人は昔は船場とか島の内とか云ふ舊市内の目貫きの所に住んでゐたものが移つて來たか、さうでなければ地着きの素封家や豪農等が大部分であるから、一面に於いて近代

風の邸宅に住まひ、それにふさはしい暮らし方をしてゐるやうでも、他の一面に於いて舊家らしいしきたりを今も捨てないでゐるのである。これはちよつとした例であるが、手紙の遣り取りをするにも、定紋の附いた文箱に入れて、小間使ひに持たせたりして寄越すやうなことが、あの沿線の家庭間では今も普通に行はれてゐる。それが舊弊な老人のすることとでなく、ダンス場入りをする若奥様や令嬢などが、中味はよしや香料入りのエンヴェロップに包んである萬年筆の水莖の痕であらうとも、容れ物だけは蒔繪の漆塗りの箱に收めて持たせて寄越す。私などもさう云ふ手紙をしばしば貰ふ。その外盆や正月の贈答、奉公人への付け届け等も、きちんきちんとは行はれてゐる。嘗て私の娘が小學校の先生の家へ何か御祝ひ物を持つて行つたところが、その先生が娘に三十錢の御祝儀をくれたことがあつた。東京ならば「失敬な」と云ふところだけでも、關西ではかう云ふ場合、たとひ僅かでも使ひの者に祝儀を與へるのが定式であるらしい。そして、その祝儀も使ひの者に直接手渡すのでなしに、五十錢なり一圓なりを祝儀袋に包んで、返事の手紙とか文箱とかに收めて、一旦先方の主人へ届け、主人の手から奉公人へ渡すやうにするなど、さう云ふ手續きはなかなか念が入つてゐる。

せんたい大阪は町人の都であるから、武士階級に於けるやうな煩鎖な儀禮は發達しなかつたかと云ふと、事實はさうでないらしい。町人にして大名に拮抗する意氣と實力とを持つてゐた豪商どもは、矢張り大名と同じやうに威儀を張り、主従のけぢめをつけ、本家だと

か分家だとか云ふ關係が非常にやかましかつたらしい。それで今でも「家の格式」を重んずる風習が残つてゐて、それが冠婚葬祭の場合に一々附き纏ふ。大阪の古い商店では、番頭が何年間か勤め上げると主人から暖簾を分けて貰つて支店を出す。するとその支店は主家に對して分家のやうな位置に立ち、主家は代々その支店の面倒をみてやつて、婚禮の費用などまでも負擔することがあると云ふ。さう云ふしきたりも近代の商業組織が發達するに隨つて追ひ追ひ亡び行くには違ひないが、しかし現在の大阪には、個人經營のしつかりした老舗が東京よりも多いやうであるから、實際にはまだ相當にその習慣が生きて働いてゐる。私の知つてゐる或る舊家では、その家を本家と仰ぐ分家が二十軒もあると云ふ。そして正月の元日には、その二十軒の分家どもが本家に集まつて大廣間へズラリと居並ぶ。本家の主人はそのとき上席に就いて年頭の賀辭を受け、順々に彼等へ盃を廻す。又正月の十五日には本家の女房と分家の女房どもの間に同じやうな儀式が行はれる。そのとき分家の女房達は本家の奥様から頂いた黒七子の紋附きに黒襦子の丸帯を締める。その本家は近年大阪の市内から阪神地方に轉居したのであるが、それでも去年までは毎年それが繰り返されてゐた。聞く所に依ると、さう云ふ點で最も保守的なのは藤田男爵家であると云ふ。何んでも男爵家に奉公する上女中は、つい最近まで日本髪に結つてお曳きすりにしてゐたさうである。

阪神地方で面白いのは、舊大阪市の延長としてさう云ふ町家の習慣が行はれてゐる一方に、昔からあるあの邊の田舎の行事が今も見られることである。田園都市の膨脹につれて年々狭められて行く田甫道や畦道を行くと、ふと七夕の笹の棒が捨ててあつたり、茅葺き屋根に菖蒲が挿してあつたりするのは、あはれとも亦なつかしい氣がする。

○
 藝人の社會や花柳界には古い習慣が長く残つてゐるものである。私は中學の三四年の頃一葉女史の「たけくらべ」に刺戟されて吉原を中心とするあの界限の空氣にあこがれ、仁和賀だとか夜櫻だとか花魁の道中だとか云ふ催しのある度毎に、そつと家を抜け出して見物に行つたものだが、東京に於けるああ云ふ行事が亡びてしまつたのは多分震災の年よりもすつと以前のことであらう。近年都踊りに倣つて吾妻踊りと云ふものが新橋に始まつたさうだけれども、矢張り祇園の踊りのやうに人氣が立たない。何分まだ「行事」と云ふ程に年代を経ないせゐるもあらうし、それに東京では、市民と花柳界との關係が大阪の如く密接でないためでもあらう。そこへ行くと都踊りなどは、單に祇園の行事となつてゐるばかりでなく、あのお團子の提灯が花見小路の角に吊るされると、京都の町へ一時に春が來たやうに市民全體が何んとなく浮かれたやうな氣分になる。大阪の蘆邊踊り、浪花踊り等も、都踊りのやうな譯には行かないが、それでも市民に春の來たことを知らせ、郷土のなつかしみを覚えさせるだけの魅力は持つてゐる。さう云ふ時に、市民は自分たちの住んでゐる

町が一つの大きな家族であるやうに感じ、今更のやうに郷土を愛する念が生じる。だからさう云ふ催し物は、どのくらゐその土地の人心を和らげ、市民相互の親しみを増させてゐるか知れない。

いつたい「東京人に故郷なし」と云はれる所以は、東京の市街が徒らにだだ、廣くつて町全體の親しみが薄いせゐるでもある。たとへば大阪なら船場島の内、——心齋橋筋から道頓堀界限、——京都なら四條京極から石段下に至る近邊と云ふ風に、京阪の都市にはそれぞれ一つの中心があるが、東京にはそれが無い。強ひて求めれば、銀座、新宿、神樂坂、淺草と云ふ風に、中心が幾つもある。これは東京の町が大きいからかも知れないが、今日の如くも四方八方に散らばつてゐる。これは東京の町が大きいからかも知れないが、今日の如く四通八達の幹線道路を有し、圓タクを驅れば端から端まで二三分もあれば行けると云ふ現狀であるのに、一つの中心がないと云ふことは、家庭にしてみたら一家團欒の食堂がないやうなものである。擴張以後の大阪市は人口に於いても面積に於いても東京を凌ぐ程でありながら、矢張り中心地は昔のまま、見物にも買ひ物にも市民たちは結局そこへ流れて行き、一年中の行事、練りものなども、主してあの邊で行はれる。花柳界も、新町、堀江、南地、北の新天地と分れてはゐるが、半哩に足らぬ半徑で圓を描けば皆その中に這入つてしまふ地帯にあつて、散歩にちやうどいい程の距離の間に散在してゐる。従つて藝者の外出歩きの姿や、色里の催しものなどが都市の情景の一つを成し、丁稚でも、守りッ兒でも、娘でも、内儀でも、直接花柳界に關係のない人々までが親愛の眼を以て彼女等を眺める。

さう云ふ風だから大阪の此の社會に於ける年中行事が今も尙盛んに行はれ、それが市民の四季の行樂と離るべからざるものになつてゐることも、訝しむに足りない。若し正月九日の寶惠籠のやうな催しを廢止したならば、大阪市民の曆の面はどのくらゐ淋しくなることであらう。殊に私は、あの年末の餅搗きの行事を此の上もなくなつかしく思ふ。大勢の藝者があの賑やかな三味線につれて地唄の十二月を唄ひながら餅を搗くと云ふ光景は、いかにばかり年の暮れの氣分をそることだらう。ああ云ふものを持つてゐる大阪に、久保田万太郎君のやうな文人がゐないと云ふのは、返す返すも惜しいことである。若し大阪に一人でも立派な作家が住んでゐたら、明治大正の間に「たけくらべ」や「隅田川」に匹敵するやうな作品が一つや二つは生れてゐたであらうに、それらしいものさへないと云ふのは、此れだけの大都市の耻辱であると云つていい。それにつけても凡べての作家が郷土を捨てて東京へ志すのは、大きく云へば日本文學の損失であると考へられる。

大阪人が左様に舊慣を重んずることは、親讓りの財産に對しても亦執着が強いことを意味する。私などその邊のことは一向不案内だけれども、東京方面の小市民階級が時勢の波に

押し流されて續々轉落するらしいのに、大阪にはまだまだ根強く持ちこたへてゐる中流資産家がザラにあるやうに思はれる。船場あたりの古風な狭い町筋を歩いてみても、滔々たる大資本主義の風潮に抗して個人經營の商賣をしてゐる家が多いのに氣が付く。

東京の下町には、所謂「敗殘の江戸つ兒」と云ふ型に當てはまる老人がしばしばある。私の父親などもその典型的な一人であつたが、正直で、潔癖で、億劫がり屋で、名利に淡く、人みしりが強く、お世辭を云ふことが大嫌ひで世渡りが拙く、だから商賣などをして、他國者の押しの強いのはとても太刀打ちすることが出来ない。そんな工合で親讓りの財産も擦つてしまひ、老境に及んでは孫子や親類の厄介になるより外はないが、當人はそれを少しも苦にしない。無一文の境涯になつたのを結句サツパリしたくらゐに思つて、至つて吞氣に餘生を楽しんでゐる。さう云ふ老人は大概瘦せてゐて、脚が強く、日に一里二里の道を歩くことを苦にせず、五十錢か一圓も小遣ひをやればそれを持つて淺草あたりへテクつて行つて、活動を見るとか、鮪の立ち食ひをするとかして、半日を愉快に過す。酒も好きだが多く嗜まず、一合の晩酌に陶然として酔へば機嫌よく世間話をし、直きにすやすやと寝てしまふ。ハタから見ると何を樂しみに生きてゐるのか分らないと云ひたいが、當人は天成の樂天家であるから、決して世を拗ねたり他人の幸福を嫉んだりしない。自分は勿論、骨肉の者の死に遇つても騒がず嘆かず、何事も定命としてあきらめる。その代り親類間の争ひとか、一家内の不和とかに關係することをうるさがり、自分だけはいつ

も超然として誰とでも調和する。従つて子供たちにも親類にも邪魔にされず、又他人の迷惑になるやうな無心も云はず、ほんの僅かなあてがひ扶持を貰ふことさへ氣の毒がつて、小學校や區役所の小使ひをして、あひまに將棋をさしたり碁會所へ通つたりするのもある。さう云ふ老人が東京の古い家なら、一家一門の間に必ず一人ぐらゐるはゐるものだ。私の父親程度の年配には殊に多いが、近いところでは辻潤などもまあそのタイプだと云つていい。悪く云へば生存競争の落伍者であつて、彼等が落伍したのはぐうたらで働きがないと云ふ缺點にも依るのだけれども、見やうに依つては市井の仙人とでも云ふべき味があつて、過去は兎も角も、そこまで到達した彼等に接すると、大悟徹底した禪僧などに共通な光風霽月の感じを受けることがある。ところで私は、大阪へ來てからかう云ふ老人に出遇つたことがない。此方の友人に聞いてみても、さう云ふ性格は關西には甚だ稀であると云ふ。

此方には「慾惚け」と云ふ言葉があるが、これは東京にはない言葉だ。つまり大阪には儲けよう儲けようとおせつた結果、慾に眼が眩んで料簡がさもしくなり、根性が卑しくなり、遂には世人の爪弾きを受けて落伍する、と云ふやうなのがが多いのであらう。實際大阪人が「無一文になる」と云ふことを恐れる程度は到底東京人の想像も及ばないものがある。東京人は自分が無一文になることを欲しないまでも、前に云つた老人のやうな境地を理解する餘裕があるが、大阪人には全く分らないらしい。彼等はさう云ふ境涯に落ちるの

がただもう一途に恐ろしく、たまたまそんな老人に遇へば馬鹿か氣違ひ扱ひにして、相手にしないらしい。

十九世紀の佛蘭西の寫實小説を讀んだ方々は、佛蘭西人がいかに財産と云ふものを重要視してゐるか御承知であらう。バルザックやフロロベルやゾラの如き大作家は、必ず作中の人物の經濟状態を書くことを忘れない。たとひ浪漫的なる戀愛物語であらうとも、その主人公なり女主人公なりを紹介するに方つては、父の遺産が幾ら幾ら、伯母の遺産が幾ら幾ら、それから上る利息が年に幾ら幾ら、だから一箇月幾ら幾らの収入があつて、そのうち此れ此れの方面に幾ら幾らの支出があつて、差し引き幾ら幾らの餘裕があつて、……と云ふ風に、實に念入りに書き立てる。時には三四代も前に遡つて、何某伯爵の何萬何千フランの資産がその死後何萬何千フランだけ何某侯爵に譲られ、侯爵の死後何某に遺され、次いで何某の手に渡り、……と、遺産の歴史を、家重代の寶物の來歴のやうに細々と説明する。大阪人の「財産」に對する觀念が丁度それなのだ。分家は本家から幾ら幾らを分けて貰ひ、それを資本にして幾ら幾らの商ひをし、幾ら幾らの動産不動産を作り、その子供が、兄は幾ら幾ら、弟は幾ら幾ら、姉嬢の嫁入り支度が幾ら幾ら、と、中産階級の人々はそんなことばかり考へてゐるらしい。従つて少年少女の時代から損徳の計算に鋭敏であり、「金」についての神経が發達してゐることは驚くばかりで、東京の中學生や女學生はその點になると全く無能力者だと云つていい。此の間或る新聞に某百貨店員の談話として、

東京の婦人連はレヂスターの請け取り票を目もくれないでその場に捨てて行くが、大阪の婦人連は十中の八九まで大切に持つて歸る、と云ふ記事が出てゐたのは恐らく間違ひのない事實であらう。

○

頼山陽の未亡人梨影子の手紙に、山陽がその生前から死後の計を怠らず、自分の身にいつ萬一の事があつても妻子が食ふに困らぬやうに用意をしておいてくれたことを感謝してゐる一節がある。山陽のやうな慷慨憂國の詩人が金を溜めてゐたなどと聞くと、「やつぱりあれは中國者だ」と云ふやうな氣がして、急に卑しむ心が起るのは、東京人の潔癖であつて、志士文人と雖も妻子を路頭に迷はせていい譯はないのだから、用意のあるのに越したことはなからう。殊に今日では藝術家の清貧だの高潔だのが賣り物にならなくなり、又そんなことを鼻にかける者もないと云ふ時勢であつてみれば、われわれ、分けても私のやうなふしだらな人間は、大いに大阪人の心がけを見習ふ必要があるものであらう。兎に角此方では、有れば有るで湯水の如く浪費し、無くなると俄かにピイピイして明日が日にも差し支へると云ふやうなのを、藝術家にもあまり見かけない。彼等は、位置とか、技倆とか、才能とかに關係なく、一流でも二流でも皆押し並べて利殖の道に賢い。そして傑れた作家になると、さう云ふ心づかひが仕事の上に少しも悪い影響を及ぼしてゐないのは流石

である。その點に於いて、死んだ小出楯重君などは大阪に於ける最も模範的な藝術家であつた。故人はあの通りの愛嬌者で、何處かおどけたやうな所のある、巧妙な話術と、子供じみた素朴な態度とで如才なく人を魅し去り、而も裏面には、暮らし向きのことにも、製作のことにも、鋭い理智を働かせてゐたので、「小出はするい」と云ふ蔭口を聞くことが度度あつたが、しかしあれだけ立派な作品を遺して行つたところをみると、「するさ」や「如才なさ」のもう一と皮下の方に藝術家の眞骨頭、——仕事に對する弛みない精進、火の如き熱情が藏されてゐたことが分る。思ふに故人は生え拔きの大阪ッ兒で、おまけに町人の出であつたから、郷土人に特有な處世の才が生れつき備はつてゐたのであらう。けれどもこれは彼の罪でない。金錢に締めくくりをつけ、生計の用意を怠らないのが土地の人の常識であるとしたなら、彼にもその常識があつたことに不思議はない。まして故人は郷土に深い愛着をもち、一生大阪を離れなかつた人だから、實際上にもそれが必要だつたのであらう。小説家などは何處に住んでも取り引き先きは東京のジャーナリストだから始末がいいが、畫家、分けても洋畫家となると、周囲の人々との折れ合ひ等にも氣を配る必要があるに違ひない。が、私のやうな呑氣者にはさつぱり分らなかつたけれども、その方面に抜け目のない商家の主人などが「小出君は油斷がならない」と云つてゐたのをみれば、故人は商人相手の駆け引きに於いても、恰も彼の作品に於けるが如き機鋒の鋭いものがあつたのであらう。何んにしても、大阪人の特色と、藝術家の天稟とが、あのくらゐ巧く調和されてゐた人はなかつた。あれこそ眞に郷土の生んだ藝術家だと云ふ感じがした。

大阪人の處世訓の中に、「嫁を貰ふには京女がいい」と云ふ言葉がある。してみると京都の女は大阪人以上に世帯持ちがよく、家政の道に賢いのであらうが、私などの眼には、大阪の女もおさおさ京都に劣らないやうに思はれる。

嘗て私は府立女專出身の婦人を二人まで秘書に使つたことがあつたが、秘書と云つても私の仕事は不規則だから、時間を極めてオフィスへ通ふのではない、まあ家族同様に家に住み込んで貰つて、つめて仕事をするのは精々一と月に十日ぐらゐ、あとは毎日ぶらんぶらんしてゐるので、普通の職業婦人のやうに體が縛られてはゐないのである。ところで私が感心したのは、二人ながらめつたに家を空けたことがない。用があつてもなくつてもじつと家に引き籠つてゐる。だから従つて無駄費ひをする機會もない。活動とか、音樂會とか、物見遊山にも、私達が誘はなければ、決して自分の小遣ひでは行かない。良家の娘として當然のことかも知れないが、東京の文學青年や文學少女の氣風を知つてゐる私には、これはちよつと意外であつた。東京であつたら、假りにも専門學校で文學を學び、小説家の家庭に住み込んで、その土時間にも餘裕があり、多少の月給も貰ふとしたら、あんなにおとなしくしてゐる女は先づないであらう。暇さへあれば外へ交際を求めに行つたり、氣

の利いた洋服の一つも拵へて諸所をうろつき廻つたりして、ちつとも腰が落ち付かないのがあの年頃の女の常である。然るに私の使つてゐた人達は、さう云ふ點が少し意氣地がなさすぎるほど善良で、非活動的であつた。が、それなら一日机に向つて勉強でもするかと云ふのに、さうでもない。私の所には大した藏書もないけれども、それでも世間並みの家庭よりは文學書もあり、質問の便宜もあり、文壇關係の來客もあるのに、彼女等は學校を出たが最後、もはや文學などに何んの興味もないらしく、此の絶好の機會と刺戟とを利用してしようともしないのである。それで彼女たちのすることを見てゐると、低級な婦人雜誌を讀むとか、家族たちと一緒に家を手傳ふとか、裁縫をするとか、そんな様子は小間使ひと變りはない。要するに彼女たちは何處迄も家庭の女なのである。教育のあることを鼻にかけたり、家族と衝突したりするやうな心配はないので、家の中の治まりはいいが、少しはわれわれに喰つてかかるくらゐな氣概があり、學問藝術に對する野心があつてもよささうに思ふ。これはこの婦人の一人から聞いた話であるが、さう云ふ連中が學校を卒業して地方の教員の職にでもありつき、大阪を立つと云ふ日になると、同窓の友だちが梅田の驛へ見送りに行つて別れを惜しみ、立つ方も送る方も聲を擧げて泣くと云ふ。それが九州北海道の果てへでも赴任するのなら知らぬこと、東京ぐらゐの距離へ行くのでも矢張りさうであると云ふに至つては、實にイヂラシイことの限りではないか。しかし、そんな風だから、女房に持てば情が濃やかで、柔順で、家計の切り盛りが上手な

ことは凡そ想像に難くない。どんな金持ちの娘でも、百圓前後のサラリーマンの所へ片附いて世帯を遣り繰りして行くだけの覺悟と腕前とは持つてゐるらしい。中には又、未亡人や低能な夫を持つてゐる女で、堂々と店舖を張り、番頭や手代を驅使して、自ら商法を營んでゐる者も珍しくない。それ程でなくとも、亡夫の遺産を資本にして、ぼつぼつと小金を貸したりしながら子女を養つてゐると云ふやうなのは、私の知人のお母さんなどにも二人はある。東京で女相場師とか女金貸しとか云ふと、いかにも變り者のやうに思はれて忽ち世間の評判になるが、大阪では一向不思議がられてゐないやうである。

さう云ふ風だから、中流の大阪市民の家庭の内部と云ふものは、ちよつと東京人の想像も及ばない、暗い、さびしい、つめたい感じのものである。私の知つてゐる大阪人が京都人の吝嗇なことを罵つて、「京都では冬の寒い最中さなかに客があつても、螢の火のやうな炭火の這入つてゐる火鉢しか出さない」と云つてゐたが、大阪人の家庭のつましいこともほとほとそれに譲らない。私が日常交際をしてゐる人々は、大阪人のうちでもハイカラな階級に屬し、従つて東京かぶれしたものが多く、それでも東京の同程度の家庭に比べるとその勝手元の儉約なことは同日の談でない。第一、大阪で派手な暮らしをしてゐると、「あすこの家は東京風だ」と云つて付き合ひを厭ふ風があり、信用にも關係するらしいので、堅氣な

家ほど實力の何分の一かの生計を立てる。又東京風な派手な家庭と云つても、それが決して東京のやうでない。東京人のは裏も表もなく、派手なら何處迄も派手なのだが、此方は表が派手でも人の目に附かない裏の方できつと締め括りをつけてゐる。京阪人のしまりやの例を挙げたら際限もないが、私の目撃した一二を挙げると、嘗て京都の或る肉屋へすぎ焼きを食べに行つた時、連れの婦人が生卵の残つたのを袂に入れて歸つたことがある。而もその婦人と云ふのが、町方の女房でもあることか、一流のお茶屋の仲居なのだから驚かざるを得ない。それから、大阪で變な氣がするのは、夕方、阪神や阪急の終點に立つてゐると、そこへやつて来るサラリーマンがポケットから読み終つた夕刊を出して、スイと夕刊賣りの前に突きつける、すると夕刊賣りの小僧がそれを受け取つて他の新聞の夕刊と交換する、サラリーマンはその新しい夕刊を又急いでポケットに收めて行く。かう云つたのではまだ何んのことか東京人には分らないかも知れないが、大阪では云ふ迄もなく大朝大毎の夕刊が最も多く人に讀まれ、従つて最も早く賣り切れになり、他の夕刊は大概持ち腐れになつて、夜が更けると三枚で三錢とか五錢とか云ふ風に安くして賣つてゐる。(夕刊は大朝よりも大毎の方が早く賣り切れる。夕刊賣りの中にもなかなかこすいのがゐて、「朝日と毎日」と云つて買ふと、上に朝日か毎日載せて下に外の新聞を重ねて寄越す奴がある。)そこで、大朝か大毎の夕刊であれば、それを早く讀んでしまつて(但し、あまり皺苦茶にしないやうに鄭重に讀むことが肝心。)夕刊賣りに與へれば、喜ん

で他の新聞の一枚と交換する譯だ。つまり、大朝大毎二種の夕刊の代價をもつて四種の夕刊を讀むことが出来る! 大阪よりも實は上筒井の終點に於いて甚だしばしば見る光景なのだが、改札口を出て來た男がスイと新聞を差し出すと、夕刊賣りの方も心得たやうにスイと差し出す。多少氣まりが悪いのでもあらうが、毎夜のこととて兩者の間に契約でも出來てゐるかのやうに、その交換は迅速に行はれるのである。

で、家庭の内部を覗いてみても、此の神経が電球の明るさや食事の膳の上にもまでも働いてゐることに氣がつく。東京の家庭では、御飯のお菜はいくらか餘るぐらゐに拵らへるのが普通だが、大阪では人數きちきちに、少し足りない目くらゐに作る。さう云へばあの長州風呂と云ふ鐵の釜の風呂が關西に多いのは、恐らく燃料の節約から來てゐるに違ひない。東京風の箱風呂に馴れた者にはあれはまことに工合の悪いもので、私なども此方へ來たてには弱らせられたが、然し經濟の點から云ふと、ごみや芥を凡べて燃料に使へるし、沸き方も早いし、世帯を持つてみるとあのくらゐ便利なものはないのだ。少し大振りな釜を使へば、體が觸つて熱いやうなこともないので、私はあの原始的な風呂が却つて此の頃は好きになつた。

風呂で思ひ出したが、大阪の町家では、東京のそれと同じく、以前は家で風呂を沸かさずに大概錢湯に這入りに行つたものだと言ふ。そして主婦は五日に一遍ぐらゐしか這入らなかつたもので、だからたまに出かけて行くと一時間も二時間もかかつてごしごしこすつて

来たると云ふ。さう云ふ點から考へるのに、大阪人の家の内部が東京から見ても不潔な氣がするの、矢張りこれも經濟に關係のあることと思はれる。京都の民家の便所に例の三角の箱が置いてあるのは誰も知つてゐる通りだが、大阪の家庭の臺所、風呂場、厠等も相當に薄汚い。阪神間の洋風住宅で水洗式の設備のある所でも、何んの爲めの水洗だか分らないやうに汚いがある。江戸つ兒は襪褌を着てゐてもふんどしと履き物だけは新しいのを誇りとしたと云ふが、あれでみると大阪人の下着類は定めし不潔であらうと察せられる。尙ついでながら、關西人が足袋について江戸つ兒ほど神経質でなく、いつもぶくぶくなのを履いてゐるのは、あれも單なる無神経でなく、あまり足にぴつちりしたのは持ちが悪いと云ふ經濟から來てゐるのである。私などもそれを京都の藝者に聞いて始めて氣がついたのだが、とても迂濶な東京者などの思ひ及ばない所である。

嘗て祇園の茶屋に遊んだとき、夜が更けて急に空腹を感じた私は、座にある五六人の藝者を顧みて「何か食べないかね」ときいてみた。日頃顔馴染みの、遠慮する人たちではなかつたから、實際そのときは何處かで食べて來たあとで、欲しくなかつたのであらう、「君は、君は」と順に尋ねて行くと、みな首を振つて「いりません」と云ふ。すると最後に一番歳の若い兒の所へ來ると、ちよつと考へてから、「あとが出エへん」と、一と言きまり悪

さうに云つて笑つた。皆の中でその兒だけ一人腹が減つてゐたのだが、東京の藝者だとこんな場合に、「あとが出ないわ」とだけで済まないやうに思ふ。近頃とんと田舎者になつた私には此のへんのところに分らないが、東京なら、何んとかもう少し、前後に云ひ譯のおしやべりがつづくか、でなければアケスケに「あたし頂くわ」と云ひさうに思ふ。「あとが出エへん」とだけ口の内であらして唯ニヤニヤしてゐるのはいかにも上方の感じである。藝者に限らず關西の婦人は凡べてさう云ふ風に、言葉數少く、婉曲に心持ちを表現する。それが東京に比べて品よくも聞え、非常に色氣がある。おまけに前にも述べたやうにあの粘りつこい、潤ほひのある聲でやんわりと來るのだから、尙以て餘情と含蓄がある。今日東京の言葉は標準語となつてゐるくらゐだから、文法的には最も正確であり、表現法が緻密で自由であり、説いて委曲を盡すのには一番便利であるけれども、純日本風の奥床しい女の言葉としては甚だ不向きである。一と口に云へば東京の言葉はおしやべりに過ぎるやうに出來てゐる。上方にだつておしやべりの女は澤山あるが、それでも東京のおしやべりとは趣が違ふ。と云ふのは言葉が違ふからである。例へば大阪では「てにをは」を使ふことが少い。使つても東京ほど使ひ分けが神経質でない。これは適切な引例でないかも知れないが、東京語で「あたしは分らないわ」と云ふのと、「あたしでは分らないわ」と云ふのとは使ふ場合が違ふ。然るに大阪ではそんな區別がなく、恐らく孰方どっちの場合にも「うち分れへん」と云ふだけであらう。もし此の引例が間違つてゐたら訂正するが、大體に於い

て私の云はんとする所は間違つてゐない。小説「^{まんじ}出」を書く時に實は始めて氣が付いたのだが、大阪の言葉はさう云ふ點が妙に粗い。最初に東京語で書いて、それを大阪語に直さうとすると、二種類の表現に對して一種類しか表現法のないことがある。(ついでながら近頃小説に現はれる東京語には「てにをは」を略したのが多い。「僕そんなこと知らない」とか、「君あの本讀んだことある?」とか云ふ類など比々として然りであるが、あれは上方の影響であるのか、生粹の東京人は決してあんな風には云はない。「わっしやあ」とか「僕あ」とか云ふやうに却つて「てにをは」を伸ばしたものだ。假りに略してゐるやうに聞えても必ず自分では口の中で云つてゐるのだ。又クオーテーションのあとの「と」を省く。「何何」と仰つしやいました)と云ふ時に(「何々」云やはりましてん)と云ふ。(「谷崎」と云ふ人)と云はずに(「谷崎」云ふ人)と云ふ。東京語で「それなら」、「でございますなら」、「だ」といいたしますなら」等々の區別をつける時にも、大阪では「それやつたら」で大概済ましてしまふ。そして此の例がよく示してゐるやうに、丁寧な云ひ廻し、敬語法の種類が非常に少い。これは一寸上方として意外に思ふが、事實さうなのだ。東京には「遊ばせ言葉」を始めとして尊敬の程度、職業年齢階級等の複雑な變化に應ずる云ひ表はし方が實に豊富だ。「する」と云ふ言葉一つに對しても、「します」「なさる」「なさいます」「遊ばす」「遊ばします」「いたします」「するんです」「するのでございます」「しますんです」「いたすのでございます」「するの」「するのよ」「するわ」「するわよ」「するんだわ」「するんだわよ」

「してよ」「しやがる」——まあ思ひ出せるだけでもこんなにあつて、一つ一つ皆幾らかづつ氣分が違ふ。大阪語にはとてもこんな澤山はあるまい。單語の上へ「御」の字を付けることも東京の方が多いやうである。女學生に聞くと、「お友達」とはめつたに云はないで、「友達」が普通だと云ふ。「お召し物」「おみ足」歳を數へる時の「お三つ」「お四つ」「お十一」「お十二」——あんなのもあまり聞かない。で、兎に角さう云ふ風だから、大阪語には言葉と言葉との間に、此方が推量で情味を酌み取らなければならぬ隙間がある。東京の語のやうに微細な感情の陰までも痒い所へ手の届くやうに云ひ盡す譯に行かない。東京のおしやべりは何處から何處まで滿遍なく撫で廻すやうにしやべるが、大阪のは言葉數が多くて、その間にポツンポツン穴があいてゐる。言語としての機能から云へば東京語の方が無論優つてをり、現代人の思想感情を表はすにはこれでなければ用が足りないであらうが、しかし隅々までホジクリ返すやうに洗ひ浚ひ云つてしまふのは、何んとなく下品なものだ。東京語の方が餘計丁寧な云ひ廻しを使つて却つて品悪く聞えるのは、そのためなのだ。つまり自由自在に伸びるから、言葉に使はれる結果になる。せんたい「無言」を美德と考へる東洋にあつては、言語もその國民性に叶ふやうに出來てゐるのだから、その理想に背くやうに發達させると、少くともその言語に備はる美點は失はれてしまふ。今日こんなことを云つても一般には通用しないだらうが、さすがに關西の婦人の言葉には昔ながらの日本語の持つ特長、——十のことを三つしか口へ出さないで残りは沈黙のうちに仄か

にただよはせる、——あの美しさが今も傳はつてゐるのは愉快だ。

たへば、猥談などをして、上方の女はそれを品よくほめかして云ふ術を知つてゐる。東京語だとしても露骨になるので良家の奥さんなどめつたにそんなことを口にしたくないが、此方では必ずしもさうでもない。しろうとの人でも品を落さずに上手に持つて廻る。それが、しろうとだけに聞いてゐて變に色氣がある。金錢上の話をするにも、慾張つたことを實に巧妙に云つてのける。見え坊の東京人は心にもないことを云つて思はぬ損を招くけれども、大阪は土地柄が土地柄だし、そこへ持つて來て言葉が惚けたやうな云ひ廻しに適してゐるのだから、さう品悪くなく、相手を少しも怒らせないやうに、そのくせ自分の懐ろも痛まないやうに、柔く云ふ表現法が發達してゐるのは當然である。大阪の人は往來で行き遇ふと挨拶の代りに「近頃ボロイことがおまつか」と云ふと云ふ話が、よく引き合ひに出されるが、成る程男同士ではそんな場合もあらうけれども、女は決してそんな云ひ方はしない。腹の中では油斷なく珠算盤を取りながら、どんな時にも露骨には云はない。それでゐて借金の斷り、催促、その他義理の悪いやうなことを、厚かましいこと、貧乏なことをそれと云はずに知らせること、相手に恥を搔かせないやうにして蟲のよすぎることを諷すること、肯定するやうにして否定すること、前提だけ云つて結論を言外に示すこと等、ま

るで謎をかけるやうな遠廻しな云ひ方で、何處までも禮儀を失はずに體裁よく防禦し、或ひは攻撃し、それで目的を達するのだから恐ろしい。尤もこれは大阪人同士でなければ駄目で、一方が東京者だと、謎があまり婉曲すぎて飛んだ穿き違ひをしたり、わざと知らぬ振りをしてゐるやうに取られたり、結局執方どつちかが腹を立てるやうなことになる。私なども扱はさうだつたのかと後で氣が付いて、そのために大變氣の毒な思ひをしたり、又は腹が立つて來ることがしばしばある。これは東京人が大阪人を相手にする時に必ず心得ておくべきことで、いつでも金錢上のことは決して言葉通りに取つてはいけない。たとへば祝儀をやるのにも、たつて辭退するのを無理に懷ろへ押し込むやうにしなければ受け取らないが、そんなら欲しくないのかと云ふとさうではない。さう云ふ風にして受け取り、又受け取らせるのが、此方では常識になつてゐるのだ。(東京では近頃書生流になつて祝儀袋を使はないが、此方では祝儀に限らず、女同士の金の遣り取りにはたとへ一圓札一枚でも一寸半紙に包んで渡す。懇意な仲でもムキ出しにはしない。)假りに東京人が大阪人に無心に行くとする。ところが相手はいつまでたつても確答を與へないので腹を立てて歸る。しかし大阪人の方では實はちやんとイエスカノーかを雜談のうちにはほめかしたつもりなのだ。そのほめかし方が、土地の人同志なら立派に明答として通用するのだけれども、東京人はアケスケな言葉に馴れてゐるので、その謎を悟らない。私は、東京人が大阪人をズルイと云ふのはその邊の誤解が餘程手傳つてゐると思ふ。ズルイのではなく、それが大阪

人の禮儀なのである。大阪人にしたら、喧嘩ッ早い東京人を怒らせないやうに、なるだけ失禮に聞えないやうにと、一生懸命に苦心をして意志を表明してゐるのである。けれども私は大阪人に向つても忠告したい。東京人に對する時はもう少し明瞭に物を云ふことだ。でないと言人が知らない間に、輕蔑されたり憎まれたりする。金錢上のことでもなくとも、大阪の婦人は一體に愛想がよく、人をそらさないもので、それも善意から出てゐるには違ひないが、實に空々しい齒の浮くやうなお世辭を云ふ。東京人ははにかみやで人みしりが強いから、あまり巧い言を云はれると却つて此方が氣恥かしくなり、嬉しくもなんともないのである。のみならず、そんなお世辭を云ふ奴は卑劣な人間だと頭から極めてかかる。然るに大阪では、此の種の婦人でよく付き合つてみると正直な善良な人が多いのである。

○ 「東京から來て眞に大都會の感じがするのは大阪だけだ」と云ふのはこれも長野草風氏の説で、さう云へば京都人はユーモアのセンスがやや鈍いやうに思はれるが、大阪人はアレでなかなか滑稽を解する。その點は矢張り都會人で、男も女も洒落や諧謔の神經を持つてゐることは東京人に劣らない。滑稽談なども、東京のは輕妙洒脫、或ひは皮肉味が勝つてゐるが、此方のは反對に、感じが重々しくゆつくりと來る所に云ふに云はれない可笑味がある。自體あの空惚けたやうなボカシた云ひ方は、眞面目な話の時にでも東京人が聞くと

實にかしい。私は此方へ來たてに喜劇映畫の説明を聞いて、何んでもないことを云つてゐるのにそれが滑稽でたまらなかつたのを覚えてゐる。が、言葉そのものに備はる滑稽感に加へて、滑稽の感覺も發達してゐる。決して洒落の分るのは江戸つ兒ばかりに限つたこととはない。それは中國四國邊の人と大阪人とを比べてみると、その相違が實にはつきりしてゐる。

○ 東京の人が上方へ別荘でも持たうと思へば、誰でも先づ京都の嵯峨あたりへ眼をつける。しかし住んでみると、氣候も人氣も案外住みにくいことを發見する。いづぞや左團次君に聞いた話に、故高田實が或る時京都へ移住する目的で洛北衣笠村に地所を買ひ家を建てたが、一と月も住んだらもう辛抱がしきれなくなつて東京へ逃げて歸つたと云ふ。京都は冬は底冷えがして寒く、夏はまた恐ろしく暑い所だが、その代り春と秋とが素晴らしいから氣候は我慢するとしても、一軒家を持つてみると、出入りの商人の氣風、隣り近所の人の肌合ひ等、とかく東京者には腹の立つことが多い、心を許して付き合へる友人も出來ず、と云ふやうな譯で、西園寺さんや清浦さんのやうなのは別だが普通の人には長く居着けな

い。幸田先生が逃げ出されたのも恐らくそんなことが原因ではあるまいか。

想ひ起す、大正十二年の震災の時、私は箱根の山中であの地震に遭ひ、東京方面へは山路

が崩れてゐて出られないと云ふので、九月四日に沼津から大阪行きの特急に乗った。私の目的は神戸から船で横濱へ行くつもりだったが、一時證明書のない者は乗船を許さなかつたことがあつて、その期間三四日のあひだ、京都大阪神戸で暮らしたが、梅田、三宮、神戸の驛頭には關東罹災民を迎へる市民が黒山のやうに雲集し、出口に列を作つてゐてわれわれの姿を見ると慰問品を配り、停車場前には接待所などが設けられてあり、分けでも梅田驛頭の活況は眼ざましいものがあつたのに、驚いたことには、七條ステーション前の廣場は森閑として、平日と何んの異なる所もない。私はそれを見て實に異様な氣がしたものだつた。この時ぐらゐ京都の土地柄をまざまざと見せつけられたことはなかつた。當時上方へ遷都の噂が立つたことがあつて、その時分祇園のお茶屋の或る女將は、「そんなことになつて偉いお方が大勢京都へやつて來られたら私共はかなひません」と云つてゐたが、これが京都人の正直な氣持ちなのだ。自分の土地が再び王城になるのだから喜びさうなものなのに、高位高官が打ち揃つて移住されては、自分達はどんなことになるか分らない、まあそんな人たちは來てくれない方が觸らぬ神に祟りなしだと云ふ、つまり何處までも消極的に己れを守らうと云ふ考へである。だから進んで罹災民を慰問するよりも、退いて奢侈贅澤をつつしみ、ひたすら謹慎の意を表して警察に叱られたり新聞で叩かれたりしないやうにと、その方へばかり氣を付ける。そのため京都の町は却つて平素よりも活氣を失ひ、根もない流言などを恐れて早くから戸を締め、他人の救濟よりも先づ自警團を組織

して火の消えたやうに静まり返つてゐた。然るに阪神沿線の蘆屋などでは蓄音機がのどかに聞えてゐたくらゐで、大阪は救濟事業も盛んである一方、さう云ふ明るい氣分もあつた。

私など、職業柄京都の方が合ひさうであるが、矢張りさうでない。ビジネスの關係が全然ないために超然としてゐられるだけ、大阪の方が住みいい。市中に住んだことはないけれども、空氣さへよければ住んでもいいと思つてゐる。慾張りだとか金錢に汚いとか云ふけれども、此處は商人の都だ。商人が慾張りなのは當り前ではないか。京都人と違つてそれがはつきりしてゐるだけいいではないか。來たてには餘り東京と氣風が違ふのでムカムカするが、馴れてみると、その慾張りの中に自ら愛すべきところを見出だす。東京の青白いインテリゲンチヤ階級よりも、進出的で、男性的で、線が太いだけ、明朗な感じがするやうにも思ふ。

○

二三年前のことであつたか、汽車が嫌ひなためにまだ京阪を見たことのなかつた清方畫伯が、生れて始めて自動車で東海道を來られたことがある。その時の畫伯の感想を讀むと、途中畫伯は名古屋を見物して、あの町の情趣を大變面白く感じられた、何んでも東道の役をした者が平凡な町の中なんぞへ連れて行つたつて駄目だらうと云ふんで、なるべくそん

な所は見せないやうにしてゐたのが、偶然畫伯の眼に觸れて興味を惹いたのであると云ふ。私はそれを讀んで、成る程さもあるべきことだと思つた。案内をした人は、東京人に名古屋の町なんぞ見せたつてと思ふのも尤もだけれども、私など、名古屋は知らないが關西の都會の街路を歩くと、自分の少年時代を想ひ出してしみじみなつかしい。と云ふのは、今日の東京の下町は完全に昔の佛を失つてしまつたが、それに何處やら似通つた土藏造りや格子造りの家並みを、思ひがけなく京都や大阪の舊市街に見出すのである。東京の近縣には横濱があなつてしまつてから、都會らしい都會が一つもないので、舊日本の町の光景が偲ばれるやうな所は、なくなつてしまつたと云つていい。が、京都の室町邊、大阪の谷町、高津、下寺町邊へ行くと、「ああ東京も昔はこんなだつたなあ」と思ひ、忘れてゐた故郷を見付けたやうな氣がする。實際東京だつて、昔はあのやうに間口の狭い奥行きが深い、すつと裏まで通り庭のある家が澤山あつたのだ。私の茅場町時代の家もさうであつた。そして夏になると狭い往來へ竹の縁臺を持ち出し、隣り近所の人と話をしたり將基をさしたりして夜を更かす。此方にはああ云ふのんびりとした空氣が、大阪のやうな大都會にもまだ残つてゐる。それと、繁華な町の横丁に小綺麗なちんまりとした家が並び、格子を開けた取つ着きの六疊に長火鉢が置いてあつて、柱や板の間などつやつやと拭き込まれ、裃纏着の主が意氣な上さんと小鍋立てでもしてゐようと云ふ路次の生活、——以前はお店者や職人など皆さう云ふ所に住んだものだが、あれがまだ此方には船場や島の内の中

心地にさへ澤山ある。關西も東京の眞似をして巨大なビルディングが追ひ追ひ殖えて行くけれども、それは幹線道路附近だけのことで、一遍焼け野原にでもならない限りああ云ふ町の情景は案外餘命を保つことであらう。先斗町なども火事があつたら最後再建築を許さない方針ださうだが、まだまだ當分は亡びさうもないのは嬉しい。

關西に長く住んで、上に述べたやうないろいろの人情、風俗、習慣を知り、さてその後文樂の人形芝居を見ると、從來東京人の眼で見たのとは全く違つた印象を受ける。蓋し、あの人形芝居と現代の大阪人との關係は、默阿彌劇と今の東京人との關係とは違ふ。默阿彌劇に現はれる舊幕乃至明治初年頃の世相は、今日の東京人が見ると既に一時代も二時代も過ぎ去つた古典の世界のやうに感じるが、大阪人が見る人形芝居は恐らくさうではあるまい。彼等はその芝居の中に、自分達の環境や生活感情に近いもののあるのを覺え、そのために身につまされたり同情の涙をしばつたり、又は云ひしれぬなつかしさを感ずるのであらう。少くとも四十臺五十臺の大阪人があれを見れば、自分達の少年時代を憶ひ出して甘い回想に耽るであらう。それは何も梅忠や紙治の如き世話物に限つたことではない、淨瑠璃劇と云ふものが最初から大衆を目安に作られてゐて、大がかりな時代物の中にも民衆に親しみのある題材や場面を捉へ、以て彼等の實感に訴へようとしてゐるので、保守的な上

方では今日でも町人や百姓を感動させる力を持つてゐるのである。たとへば忠臣藏の勘平切腹の場面、——東京の歌舞伎芝居だと私はああ云ふ所が大嫌ひで、瓦燈口の暖簾の向うから皺くちやな梅干し婆さんが出て來たりされると薄汚いやうな氣がしたものだつたが、どんな時代狂言にもああ云ふ場面を必ず取り入れる淨瑠璃作者の心持ちが、その狙ひ所が、此方の人形芝居に親しんで、私に始めてよく分つた。あれはやつぱり此の邊の田舎の實寫なのだ。そして今でも山崎あたりへ行けば忠臣藏時分とさう變らない草深い農家を見ることが出来。與市兵衛の住んでゐさうな佻びしい茅葺き屋根が此處彼處にあつて、姿も物云ひもおかやのやうな老婆、お輕のやうな娘に遇ふことが珍しくないのだ。梅忠の新口村、澤市の壺坂、千本櫻のすし屋の后市なども皆昔のままの里や村であり、孫右衛門や澤市や權太やお里の風貌に髣髴とした人々を見かける。あの人形劇が眞の郷土藝術だと云ふ意味は、此處に於いて實によく分る。それも義太夫だけ聞いてゐたのでは左程でないが、驚くのはあの人形の顔である。あの、一見グロテスクのやうな顔をつくづく眺めると、日常私がつき合つてゐる土地の人の誰かに似てゐることを、ふと思ひ出す。殊に老婆の顔がいい。梅忠の養母の顔、おかやの顔、ああ云ふ顔は今も多く市井の間に實在してゐる。それから孫右衛門、宗岸型の老人、八右衛門型の町人、治兵衛型の若旦那、みな知人の中にその類型を求められる。若い女の顔も、何んでもなく作つてゐるやうで、實によく感じを掴まへてゐる。梅川やおさんの如き遊女や町家の女房は勿論だが、若葉の内侍、八重垣姫と云

つたやうな御臺様や姫御前の顔でも、じつと見てゐると矢張り大阪の女の顔だ。阪神沿線に住むハイカラな夫人令嬢方の目鼻立ちの下に皆あれが隠れてゐるのだ。

同じお輕勘平でも、江戸化された清元の「旅路花婿」がいかに今日の實生活とかけ離れてゐることよ。それからみると、東京の歌舞伎劇よりも此方の人形芝居の方がずつと根ざしの深いことを感じる。のみならず、歌舞伎劇は現在殆んど東京だけのものになつてしまつたが、人形芝居は文樂だけでない。淡路源之丞を始めいろいろの座があつて、大阪から西、淡路四國の方まで行き互り、農民と手を握り合つてゐるのである。

以上で私は、大體自分の云はうとする事項にひと渡り觸れたつもりであるから、此のくらゐで筆を擱くことにしよう。關西の食物のことについては前にたびたび雑誌に書いたし、東京がすつかり大阪料理に風靡されてしまつた今日では、最早や事新しく云ふがものはあるまい。それと、氣候の溫暖な點、火事地震等の天災の少い點でも、此方が優つてゐることは云ふまでもない。私どもは小學校の讀本で、「我が大日本帝國は氣候溫暖にして風光明媚……」と教へられたもので、東京にあると一向さう感じないどころか却つて反對の氣がするが、あの記事がほんたうだと云ふことは、ただのお國自慢でないことは、此方へ來て成る程と領かれる。つまりあれに當て箴まる「日本」は何處にあるかと云へば、大阪から

中國に至る本土の西半部なのである。地勢から云つても此の邊が日本の中心であり、古くから開けて異邦人にも知られてゐる地方であり、自然日本を代表することになつたのかも知れない。實際さう云ふ點を考へても、關西が上國で、關東は下國だと思はれる。攝河泉の國々もいいが、これから西へ行けば行くほど土の色が白くなり、氣候が一層温かになり、魚がますます甘くなり、景色がいよいよ明るくなる。

しかし私は決して無條件に此方を讚美するものでないことは上來述べ盡した通りである。何んと云つても、學窓を出てこれから社會に活動する人、或ひは業成り名遂げて隱棲するのにはいいが、子女を教育する土地でない。女の兒は兎に角、男の兒を立派な人物に仕上げようと云ふのには、東京でなければ駄目である。一般に私の書生時代と氣風が變つたせゐもあるが、どうも此方の學生は、意氣地がなく、冒險心に乏しく、商店の番頭のやうに如才がない。些少ながらも親讓りの恒産があつて、氣候がよくつて、食物が安くつて甘いと來るから、皆小成に安んじてしまひ、壯志を抱く者がいやうになる。大阪はまだいいが中國邊の殷賑な小都會の若い者は、小利口でコセコセした理窟を云つて、大局に眼が届かないと云ふやうな青年が非常に多い。あまり天然に恵まれることも善し惡しである。

大阪の藝人

○
大阪の藝人と云つても、芝居ばかりは私はあまり上方のものを好まないもので、俳優のことはよく知らない。随分此方の土地にも馴じみ、人情風俗の面白さも呑み込めて來た時分であるから、昔は蟲が好かなかつた鴈治郎も、近頃見たら大いに見直すかも知れないと思ひ、去年歌舞伎座の柿葺落しに「土屋主税」が出た時は、何年ぶりかで見ると此の老優がどうかして好きになれますやうにと心に祈り、開幕前から満腹の敬意と期待とを以て臨んだのであつたが、羽左衛門の大高源吾にすつかり食はれてしまつてゐるのがまざ／＼と見え過ぎたのには、氣の毒とか腹が立つとかの段ではなくて、感心したいにも感心させてくれないもどかしさ、好かうとして好きになれない遣る瀬なさ、とでも云つたやうなものを味はされた。それも自分が東京人であるが故に巧味が分らないのであるなら、分るまで見て好きになりたいものだけれども、廊下で遇つた北野恒富畫伯に聽けば、全く私と同じことを云ふ。腰元を先に立て、奥から出て來て、縁のところをいんで庭前の雪景色を眺めや

るのに、仰山に一方の足を爪立て、伸び上るやうな形をする、あゝ、やつぱり昔の鴈治郎だなど思つたが、北野君もあの形が嫌味であると云ひ、羽左衛門の方が段違ひによいと云ふ。大阪生れではないが、大阪の水が育てた畫家で、關西の清方と云つてもよい人の意見がさうであるのだから、私は内々安心もすれば淋しくもあつた。さうしてもはや好きにならうとする努力を放棄するより仕方がなかつた。たゞ、それにつけても成駒屋は仕合せな役者であるとは思ふ。二十年前の私であつたら、その仕合せを不當なものとして憎んだであらうが、羽左衛門や六代目に付き合つて貰つて大きな顔をしてゐることに多大の反感を抱いたであらうが、今では我が愛する大阪のために、理窟は抜きにして此の老優の晩年を勞はつてやりたく、その幸福が終生圓滿につゞくことを祈るのである。

さう云ふ譯で、歌舞伎芝居は苦手だけれども、文樂の方はいつからともなく好きになつた。初め私は、人形だけが好きで義太夫は嫌ひであつたが、既に人形に惹き入れられ、は、義太夫に魅了されずにある筈がない。尤も地唄の稽古をしたのが義太夫に興味を覺える端緒となつたのでもあらうが、そのせむか今でもどちらかと云ふと太夫の語り口よりは三味線の音色を聴くのを樂しむ。勿論それもほんたうの味は分らないので、しろうと耳に美しいのを樂しむのである。だから此方の通人に尋ねて、特に名人の三味線弾きが弾く時

は大いに緊張して聴くのであるが、遠慮のないことを云はせて貰へば綱造の絃が一番好きである。綺麗なことが義太夫の三味線としては第一の條件でないかも知れぬが、兎に角私のはあの音色を最も綺麗なやうに感じ、さうしていつも恍惚とするのは、實を云ふとその音色の故のみでなく、彼と津太夫とが肩衣を並べて燭臺を前に端坐する時の、形の上の美觀にも依る。と云ふのは、いつたい名人と云はれる程の藝人の顔は取り取りに一と癖あつて、聴衆の腦裡に強い印象をとどめるものであるけれども、綱造の容貌は分けても印象的であり、彼と對照される時に津太夫のそれも一段と引き立つて、両者が互ひに輝きを増す。先づ綱造の方から云ふなら、これは恐らく藝人中での有數な美丈夫の顔であらう。東西の歌舞伎、新舊の俳優を引つくるめても、これだけ整つた立派な顔は他に見當らない。白皙で、面長で、頭顱がつる／＼に禿げて光つてゐるところは山田耕柞氏を髣髴せしめるものがあるが、輪廓は耕柞氏以上にキチンとしてゐて、而も耕柞氏ほど纖弱でない。それは全體が耕柞氏より大作り、少くとも感じに於いては大作りで、頬にも相當に肉があり、且目鼻の線が強いせむであらう。凡そ文樂の太夫と三味線弾きの中で、色の白いことにかけてはつばめ太夫と此の人とを推すが、つばめ太夫の丸ぼちやで可愛らしいのに反し、此の人の顔には一抹の冷たさと嚴しさがある。あまり端麗過ぎる顔は暖かみに乏しいものであるから、大方そのせむもあるものであらうが、長年の練磨の間に一道の權威としての品格が自然に備はつて來てゐることも見逃せない。それにしても歳はいくつぐら

るであらうか。五十臺にしか見えなけれども、その経歴と地位から察すれば六十を超えてゐるのであらうか。しかし美貌と色白のために實際より若く見えるとしても、それが決して大家らしい貫録を傷つけてはゐない。現に津太夫と並んだ時に、年配と云ひ、押し出しと云ひ、實に似合ひの一對を成してゐるのである。ところで、諸君も御承知の通り、淨瑠璃の三味線弾きと云ふものは、太夫の方が泣いたり喚いたり仰け反つたりして盛んな身振りや表情をするのに引きかへ、始めから終りまで殆ど顔面筋肉を動かすことなく、靜かに弾きつけてゐるのであるが、彫刻的な綱造の顔はそれ故に尙その森嚴さを加へるのである。私はいつも、此の二人の場合に限つて、津太夫の顔よりは彼の顔の方へ一層しばし凝視を注ぐ。彼の顔の特長としては、——あゝ云ふ風に整つてゐると中々それが掴まへにくいものだけれども、一つ顯著なものがある。それは何かと云ふと、眼瞼の肉が厚く、腫れぼつたい。従つて、眼が、切れば長い、非常に細い。だから観客はごく稀にしか彼の腫を見る事が出来ない。私の如きも、かう書きながら彼の風貌を空に描いてみて、外の部分は思ひ出せるが、はつきり腫を見たとき云ふ記憶がない。私は折々、彼の顔を、その重く垂れた眼瞼を視つめながら、盲人を見てゐるやうな氣になることがある。なほその外の特長を云へば、眼の下にある僅かな皮膚のたるみと、高い鋭い鼻であらう。何はともあれ、さう云ふ綱造の顔は、それだけ見てゐても美しく、覺えず襟を正したいやうな威儀に撲たれるが、彼の右側に見臺を控へてすわつてゐる津太夫が又好いのである。但し此の方

は美男子ではない。悪く云へば田舎の百姓親父のやうな感じもする。以前道八や友次郎や叶などと云ふ三味線弾きが弾いてゐた時分には、此の親父の顔がこんなに映えてゐなかつたところを見ると、それは全く綱造との對照もたらす効果にちがひない。なせなら、此の二人は背恰好から、肉づきから、顔の大きさから、頭の禿げ工合まで、同一のタイプに屬してゐて、對照するのにまことに都合がよいのである。而も綱造の肌の白皙なのに對して、津太夫は鐵の如くに黒い。綱造の頭顱は一物もとゞめず禿げ上つてゐるが、津太夫の方は顛頂の周圍に短く刈つた白髪がほのかに光つてゐる。それでなくても津太夫の肉聲は豪宕であり、その淨瑠璃は男性的な太い線を以て貫かれてゐるが、綱造の風貌が玲瓏玉の如くだとすれば、津太夫のそれはブッキラボウな石ころのやうである。だが、不思議なのは、醜男である筈の津太夫が、その男前に於いて格別綱造に見劣りしないことである。凡庸な百姓親父が俄かに堂々たる態度を示して來ることである。私は二人の姿を眺めて、何と實に揃ひも揃つた老藝人であることよと思ひ、又二人ながらほんたうに立派なおぢいさんであると思ふ。蓋し此の光景は文樂座に於ける一個の比類なき壯觀であつて、時には人形劇以上の感銘を與へるのである。

○

二三年前から、私はときどき此方の寄席を覗くことがある。行くのは主に法善寺境内の

「花月」であるが、殆どいつも大入満員の盛況で、ぎつしり詰まつてゐる間に辛じて席を占めながら、小さな手焙りを引き寄せて茶を飲み煙草をふかしてゐると、幼年の頃父や母に連れられて人形町の末廣や茅場町の宮松へ行つた時分のおぼろげな記憶が、なつかしくもよみがへつて來るのである。それはもう今から四十年近くも前、明治も二十年代から三十年代のことであつて、思へばその後の世の有様は随分變つたものであるが、斯く東京を數百里離れた西國の都會の盛り場へ來て、日本橋時代の寄席の空氣を味ふことが出來ようとは、實に何とも不思議な心地がするのである。正直のところ、かう云ふ種類の娛樂機關はとうに滅びてしまつてゐてもよさうであるのに、それが残つてゐるばかりか、而もその土地が大阪ではないか。あれから四十年の後に、私がかうして此の土地に流れて來てゐるのも不思議なら、こんな所であの頃の寄席にめぐり遇ふと云ふのも不思議でならない。が、それにも増して思ひがけない邂逅であつたのは、昔の朝寢坊むらくが今は圓馬と名を改めて此處のしん打ちになつてゐることであつた。私は、彼が高座に現はれたのを見た瞬間、「ぎよつとした」と云つてもよい程に驚きもすれば、なつかしくもあつた。「明治時代の東京」がむらくと云ふ人間に化けて突然出て來たやうに感じた。それと云ふのも、最初に一と目見た時は、圓馬のむらくはそんなにひどく衰へてはゐなかつたからである。こゝでちよつと餘談になるが、せんだい私はむらくの顔を特に覚えてゐる理由があるのだ。と云ふのは、若い時分、二十六七歳頃の私は、むらくに似てゐると云はれたものであつた。さ

う云ひ出したのは偕樂園の女將、即ち我が竹馬の友笹沼源之助の奥さんであつて、當時むらくはしばしば偕樂園のお座敷へ呼ばれ、ついでに帳場で話し込んで行くことが多かつたのである。私は彼に似てゐることを別に光榮とも感じなかつたが、敢て否定もしなかつた。事實、むらくの顔を見てゐると、成る程似てゐるなと思ふ節もあつた。顔のたちや地聲の性質から云へば、私よりはむしろ今の法制局長官金森徳次郎君の系統に屬するやうであるが、あのすばらしい話ぶりと、へんに横着さうな表情と、それから頭髮の工合とが、感じに於いて何處か青年時代の私と共通なものがあつたのであらう。然るに花月に現はれたむらく、いや、圓馬を見れば、髪の毛は大分うすくなつて頭の頂邊に禿げが隠されてゐるらしいが、染めてゐるのかどうかまだ白いものは眼につかず、少しく頤の張つてゐる角顔の肉づきも左程に落ちず、皺もそんなには寄つてゐないので、案外若いと云ふ氣がしたのだが、だん／＼見てゐると、矢張さうでない。矢張圓馬は、もはや往年のむらくでない。第一にそれを感じさせるのは、眼の光が著しく柔和に、分別臭くなつて、あの生意氣な、狡猾さうな輝きが消えてしまつたことである。昔は何處かに「色悪」と云つたやうな、いけづう／＼しい、太々しい氣魄があつたが、今はその顔からさう云ふ魂が抜けてしまつて、一個の好々爺になつてゐる。それに、顔よりは姿勢の方に老いが來たらしく、すわつた背中が心持ち猫背になつてゐる。あれでは高座で「鎗さび」を踊つた當年の元氣はないであらう。つまり、偕樂園の細君をして私を思ひ出させたところの共通點、一種の不